

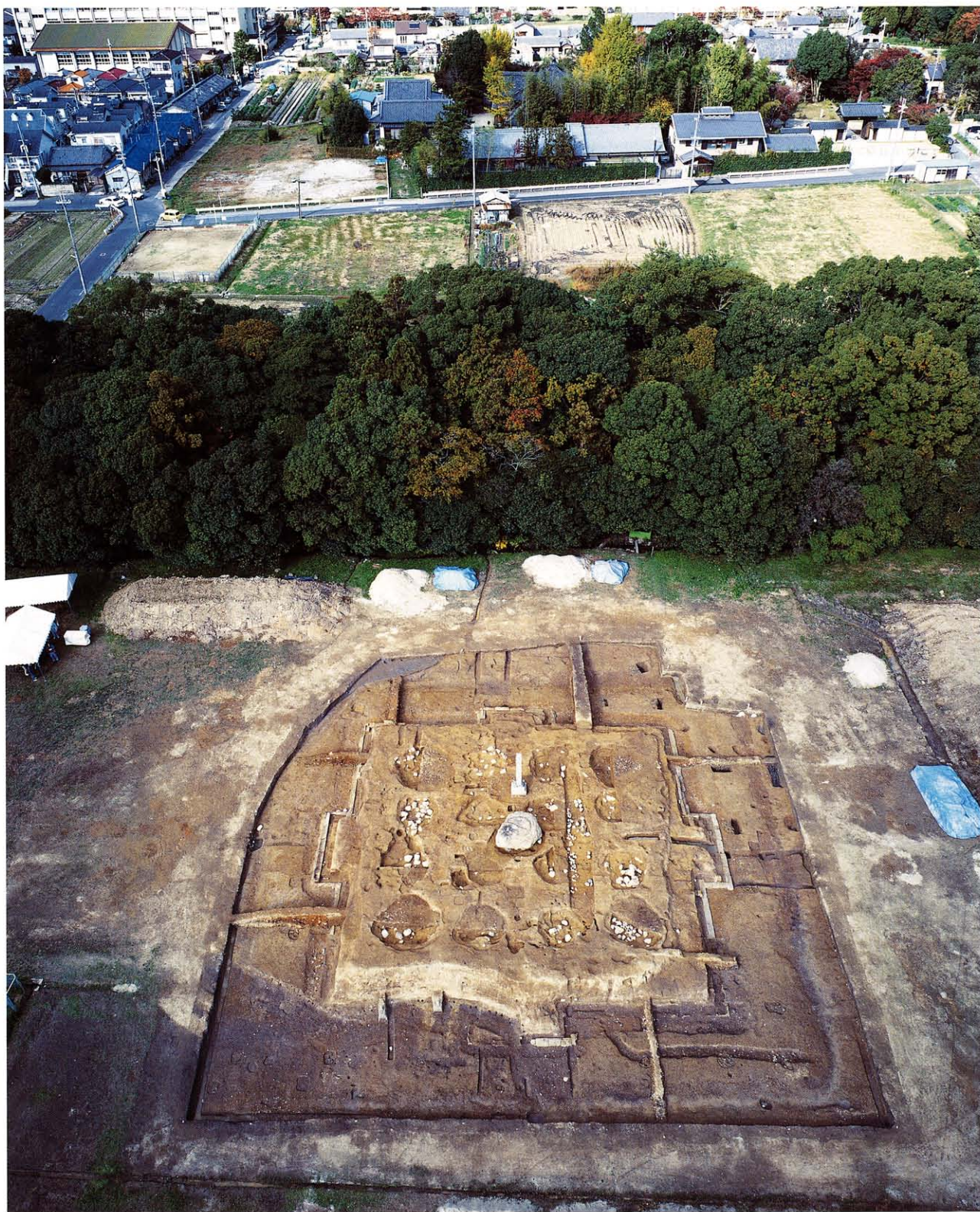
奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 17 (2005) 年度



奈良市教育委員会

2008



1 : 史跡大安寺旧境内 第110次 西塔地区の調査 基壇全景航空写真(南から)【本文71ページ】



2 : 史跡大安寺旧境内 第110次 西塔地区の調査 西階段南端地覆石(東から)【本文71ページ】



3 : 史跡大安寺旧境内 第110次 西塔地区の調査 基壇北面版築状態(北から)【本文71ページ】



4： 歌姫赤井谷第3号横穴の調査 第3次 横穴玄室（南から・奈良文化財研究所撮影）【本文79ページ】



5：平城京跡(右京六条四坊十四坪)の調査 第543次 調査地航空写真(南西から)【本文55ページ】



6：平城京跡(右京六条四坊十四坪)の調査 第543次 木棺墓S X 804(南西から)【本文55ページ】



7：平城京跡(左京二条七坊十五坪)・奈良町の調査 第531次
井戸S E 09出土 六稜鏡【本文28ページ】



8 : ゼニヤクボ遺跡全景 航空写真 (南から・1992年撮影) 【本文165ページ】



9 : ゼニヤクボ遺跡全景 航空写真 (東から・1992年撮影) 【本文165ページ】

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成17(2005)年度

奈良市教育委員会

2008

例 言

1. 本書は、平成17年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査等の各事業の概要についてまとめた年報であり、昭和60年度分から平成16年度分まで刊行した『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』に代わるものとして、新たに創刊したものである。
2. 平成17年度における埋蔵文化財調査および出土遺物整理等の体制は、下記のとおりである。

奈良市教育委員会事務局社会教育部（当時 平成19年度より生涯学習部に名称変更）

文化財課

課 長 福井 進
主 幹 谷村 勝
課長補佐 森下 恵介

埋蔵文化財調査センター

所 長 川本 恭久
調査第一係 係長 立石堅志 技術吏員 鐘方正樹 秋山成人 安井宣也
松浦五輪美 宮崎正裕 久保清子
山前智敬 大窪淳司
調査第二係 係長 三好美穂 技術吏員 森下浩行 武田和哉 中島和彦
久保邦江 池田裕英 原田香織
再任用職員 森川倫秀
庶 務 係 係長 北尾秀一 事務吏員 山形和宏

3. 発掘調査、出土遺物整理等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、ならびに、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表す。
4. 各章の冒頭には、さらに個別の例言を示しているので、併せて参照されたい。
5. 本書の編集は平成19年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下恵介、同 調査第一係長 森下浩行、同 調査第二係長 鐘方正樹の指導のもと、武田和哉が担当した。

目次

| | |
|--|------|
| 巻首カラー図版 | I～VI |
| 目次・例言 | i・ii |
| 第1章 平成17年度埋蔵文化財調査概要報告 | 1 |
| 1. JR奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査 | 6 |
| 平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊坊間東小路）の調査 第541次 | |
| 2. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査 | 17 |
| (1) 西大寺旧境内の調査 第20次 | 18 |
| (2) 西大寺旧境内・平城京跡（一条南大路）の調査 第21次 | 21 |
| 3. 平城京跡（東四坊大路）・油坂遺跡の調査 第529次 | 23 |
| 4. 平城京跡（左京四条三坊六坪）の調査 第530次 | 27 |
| 5. 平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡の調査 第531次 | 28 |
| 6. 平城京跡（右京北辺四坊三坪）の調査 第532次 | 37 |
| 7. 平城京跡（右京四条四坊・西三坊大路）の調査 第533次 | 39 |
| 8. 平城京跡（右京二条二坊九坪）の調査 第534次 | 40 |
| 9. 平城京跡（左京三条二坊三坪）の調査 第535次 | 41 |
| 10. 平城京跡（左京五条二坊二坪・五条条間路）の調査 第536次 | 42 |
| 11. 平城京跡（左京五条六坊二坪）の調査 第537次 | 44 |
| 12. 平城京跡（左京九条三坊十一・十二坪）の調査 第538次 | 45 |
| 13. 平城京跡（右京六条四坊十三・十四坪）の調査 第539次 | 48 |
| 14. 平城京跡（右京二条四坊十二坪）の調査 第540次 | 49 |
| 15. 平城京跡（左京三条四坊四坪）の調査 第542次 | 53 |
| 16. 平城京跡（右京六条四坊十四坪）の調査 第543次 | 55 |
| 17. 平城京跡（左京三条四坊十三坪）・油坂遺跡の調査 第544次 | 65 |
| 18. 平城京跡（左京五条二坊七坪）の調査 第545次 | 67 |
| 19. 平城京跡（左京八条四坊十四坪）の調査 第546次 | 68 |
| 20. 平城京跡（朱雀大路）の調査 第547次 | 69 |
| 21. 史跡大安寺旧境内の調査 | 70 |
| (1) 西塔地区の調査 第110次 | 71 |
| (2) 西面築地地区の調査 第111次 | 74 |
| (3) 西面中房地区の調査 第112次 | 76 |
| (4) 苑院推定地の調査 第113次 | 77 |
| 22. 成務陵古墳陪塚ろ号隣接地の調査 第2次調査 | 78 |
| 23. 歌姫赤井谷第3号横穴の調査 第1～3次 | 79 |
| 24. 古市桜谷遺跡・古市城跡の調査 第4・5次調査 | 87 |
| 25. 平成14～17年度実施試掘調査一覧 | 104 |
| 26. 平成14～17年度実施工事立会一覧 | 107 |
| 第2章 自然科学分析報告 | 135 |
| 1. 平城京跡（右京三条四坊九坪・二条大路）の調査 第517次 採取資料の放射性炭素年代測定 | 137 |
| 2. 平城京跡（右京二条四坊十二坪）の調査 第540次 採取資料の放射性炭素年代測定 | 138 |
| 3. 平城京跡（左京五条六坊二坪）の調査 第537次 における花粉分析 | 139 |
| 4. 史跡大安寺旧境内・西塔地区の調査 第110次 における西塔跡関連資料の TL 年代測定 | 142 |
| 5. 史跡大安寺旧境内・西塔地区の調査 第100・102・105次 出土金属製品の鉛同位対比分析 | 146 |
| 6. 史跡大安寺旧境内・西塔地区の調査 第105次 出土木材の樹種同定 | 160 |
| 第3章 平成17年度保存活用事業報告 | 161 |
| 附 章 ゼニヤクボ遺跡発掘調査概要報告 | 167 |
| 奈良市教育委員会編集・発行の埋蔵文化財関係刊行物一覧（昭和54年度～平成19年度発行分） | 205 |

第 1 章 平成17年度埋蔵文化財調査概要報告

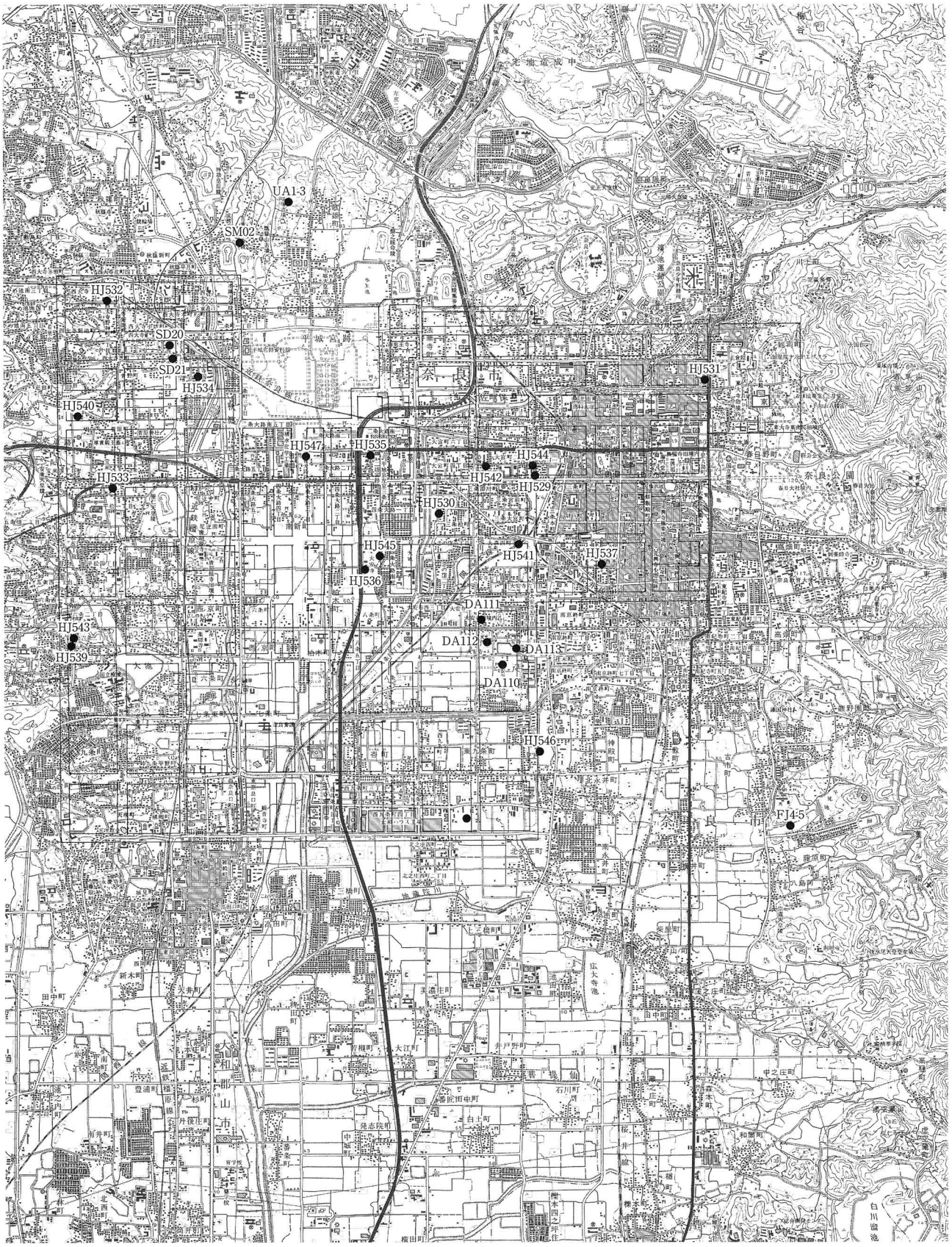
第1章 平成17年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告 例言

1. 本章は平成17年度に奈良市教育委員会が実施した発掘調査の概要をまとめた報告である。
2. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。
H J 平城京跡 D A 大安寺旧境内 G G 元興寺旧境内 S D 西大寺旧境内
S R 西隆寺旧境内 T I 東市跡推定地 N R 奈良町遺跡 H K 東紀寺遺跡
F J 古市城跡 U A 歌姫赤井谷遺跡 B T 別所辻堂遺跡 B S 別所下ノ前遺跡
3. 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。
4. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。
S A (柱列・塀) S B (掘立柱建物) S D (溝・濠・溝状遺構・暗渠) S E (井戸)
S F (道路) S K (土坑) S X (その他)
また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。
5. 本文中に示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。
国 — 独立行政法人奈良文化財研究所 (旧 奈良国立文化財研究所含む)
県 — 奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所
市 — 奈良市教育委員会
6. 本報告で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。
奈良時代 軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良市教育委員会 1996
鬼瓦：毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦 — 8世紀を中心として—」
『研究論集IV』 奈良国立文化財研究所 1980
土器：『平城宮発掘調査報告書XI』 奈良国立文化財研究所 1982
古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
弥生時代 土器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003
7. 発掘区位置図については、奈良市発行の1/2500の「大和都市計画図」を、また調査地位位置図については、国土地理院発行の1/25000の地形図を利用した。
8. 本文中において示した、位置の表示値は、測量法改正(2002年4月)以前の平面直角国土座標体系第VI系の数値である。
9. 本章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した奈良市教育委員会生涯学習部文化財課職員と平成19年度臨時職員 渡辺和仁(奈良大学大学院生)が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。
10. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

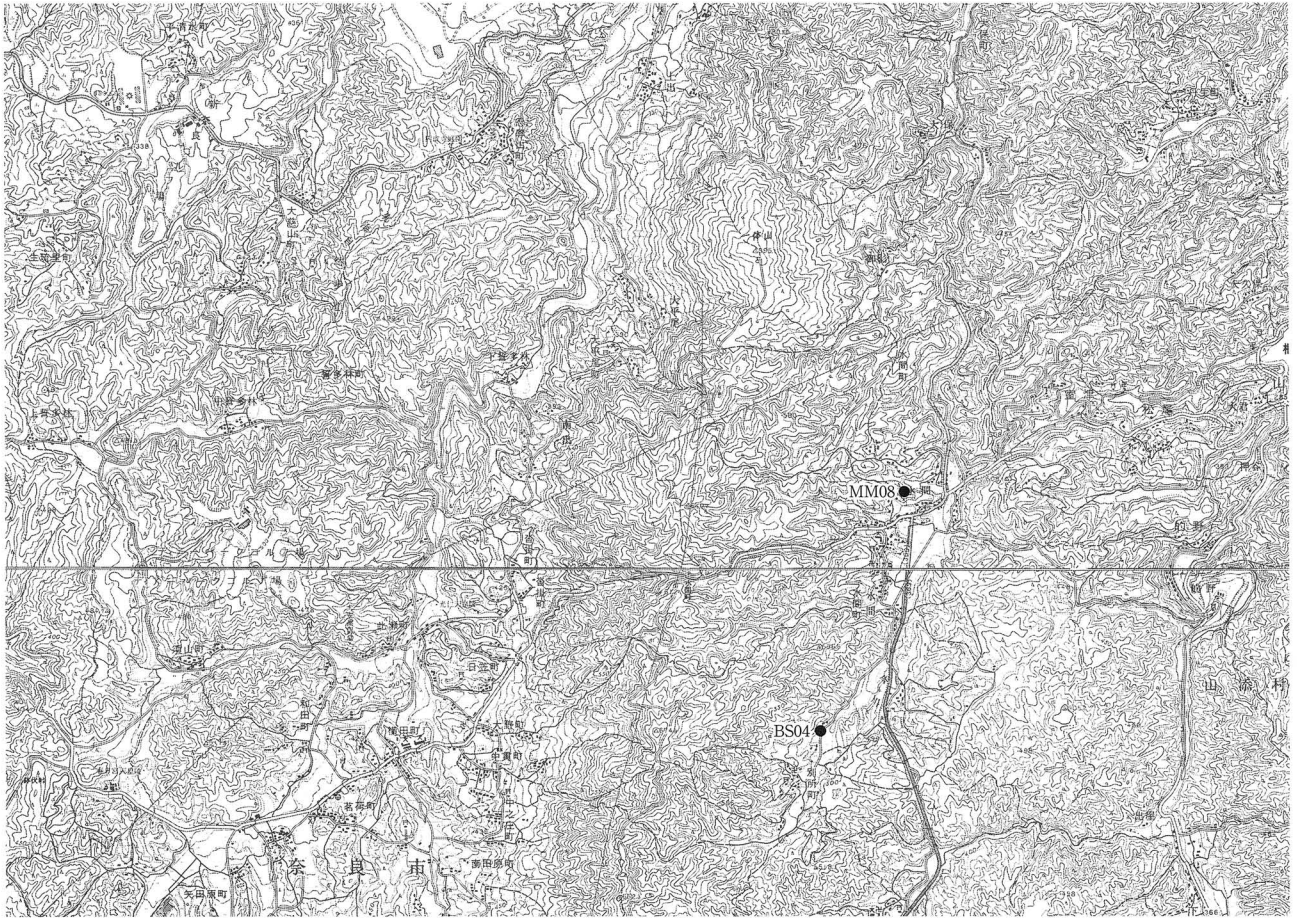
平成17(2005)年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

| No. | 調査次数 | 遺跡名 | 調査地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査担当者 | 届出(申請)者 | 事業内容 | 事業区分 | 届出(申請)番号 |
|-----|--------|----------------------------|------------------|----------------------|-------|-----------|------------------|------------------------|------|----------|
| 1 | HJ529次 | 平城京跡(東四坊大路)・油坂遺跡 | 大宮町二丁目125-5他 | 2005/5/9～6/14 | 212㎡ | 秋山・久保清・山前 | 奈良市長 | 大和都市計画街路事業(芝辻大森線) | 公共 | H10.3011 |
| 2 | HJ530次 | 平城京跡(左京四条三坊六坪) | 三条栄町161-1他 | 2005/5/9～5/18 | 110㎡ | 池田裕・武田・松浦 | (株)栗実住宅(株)オークホーム | 宅地造成 | 原因者 | H16.3384 |
| 3 | HJ531次 | 平城京跡(左京二条七坊十五坪)・奈良町遺跡 | 今小路町7-1他 | 2005/5/16～7/21 | 372㎡ | 中島・武田 | 個人 | 共同住宅建設 | 原因者 | H16.3329 |
| 4 | HJ532次 | 平城京跡(右京北辺坊四坊三坪) | 西大寺宝ヶ丘町737-1他 | 2005/5/31～7/29 | 667㎡ | 久保邦 | (株)奥村組 | マンション建設 | 原因者 | H17.0207 |
| 5 | HJ533次 | 平城京跡(右京四条四坊・西三坊大路) | 宝来三丁目815-2 | 2005/6/13～6/21 | 14㎡ | 池田裕 | 個人 | 個人住宅新築 | 緊急 | H17.3033 |
| 6 | HJ534次 | 平城京跡(右京二条二坊九坪) | 西大寺国見町一丁目2137-74 | 2005/9/1～9/16 | 100㎡ | 久保邦 | (株)新星和不動産 | マンション建設 | 原因者 | H17.3053 |
| 7 | HJ535次 | 平城京跡(左京三条二坊三坪) | 三条大路一丁目607-3 | 2005/9/7～9/14 | 60㎡ | 武田 | 個人 | 賃貸住宅・事務所・個人住宅建設 | 原因者 | H17.3132 |
| 8 | HJ536次 | 平城京跡(左京五条二坊二坪・五条間路) | 大安寺町521-1他 | 2005/9/15～10/8 | 330㎡ | 中島・武田 | (株)川西建設 | ショールーム付修理工場建設 | 原因者 | H17.3162 |
| 9 | HJ537次 | 平城京跡(左京五条六坊二坪) | 西木辻町5-2 | 2005/10/3～11/2 | 400㎡ | 宮崎・安井 | 奈良市長 | 済美小学校校舎建設事業 | 公共 | H17.3180 |
| 10 | HJ538次 | 平城京跡(左京九条三坊十一・十二坪) | 東九条町15他 | 2005/10/17～12/21 | 1460㎡ | 久保邦・中島 | (宗)真澄寺 | 寺院新築 | 原因者 | H17.3130 |
| 11 | HJ539次 | 平城京跡(右京六条四坊十三坪) | 六条西三丁目1559-1の一部他 | 2005/10/17～10/18 | 10㎡ | 武田・三好 | (株)大陽興産 | 宅地造成 | 原因者 | H17.3161 |
| 12 | HJ540次 | 平城京跡(右京二条四坊十二坪) | 菅原町633-4他 | 2005/10/17～2006/3/16 | 950㎡ | 久保清・安井・大窪 | 奈良市長 | 大和都市計画街路事業(大和中央道・菅原工区) | 公共 | H17.3240 |
| 13 | HJ541次 | 平城京跡(左京五条四坊九・十六坪・東四坊坊間東小路) | 大森町135-9他 | 2005/11/1～2006/3/15 | 1400㎡ | 宮崎・山前 | 奈良市長 | JR奈良駅南特定土地区画整理事業 | 公共 | H17.3145 |
| 14 | HJ542次 | 平城京跡(左京三条四坊四坪) | 大宮町三丁目204-7 | 2006/1/18～2/2 | 162㎡ | 武田 | (株)宝来住宅 | 共同住宅建設 | 原因者 | H17.3213 |
| 15 | HJ543次 | 平城京跡(右京六条四坊十四坪) | 六条西三丁目1480-4の一部他 | 2006/1/10～3/10 | 1490㎡ | 中島・久保邦 | 個人 | 宅地造成 | 原因者 | H13.3116 |
| 16 | HJ544次 | 平城京跡(左京三条四坊十三坪)・油坂遺跡 | 大宮町二丁目82-40他 | 2006/2/23～3/29 | 176㎡ | 武田 | (株)近鉄不動産 | 共同住宅建設 | 原因者 | H17.3289 |
| 17 | HJ545次 | 平城京跡(左京五条二坊七坪) | 大安寺町554-1他 | 2006/3/9* | 40㎡ | 三好 | (株)ファーストホーム | 宅地造成 | 原因者 | H17.3386 |
| 18 | HJ546次 | 平城京跡(左京八条四坊十四坪) | 東九条町722-1他 | 2006/3/13～3/17 | 60㎡ | 三好 | (有)やすらぎ住宅 | 宅地造成 | 原因者 | H17.3199 |
| 19 | HJ547次 | 平城京跡(朱雀大路) | 三条大路三丁目444-6他 | 2006/3/20～3/30 | 48㎡ | 三好 | (株)タジマコーポレーション | 展示場新築 | 原因者 | H17.3360 |
| 20 | DA110次 | 史跡大安寺旧境内 | 東九条町1340他 | 2005/7/19～2006/1/17 | 1090㎡ | 松浦 | 奈良市教育委員会教育長 | 史跡大安寺旧境内保存整備事業 | 公共 | H17.1004 |
| 21 | DA111次 | 史跡大安寺旧境内 | 大安寺四丁目1042-2他 | 2005/8/1～8/5 | 30㎡ | 武田 | 個人 | 個人住宅改築 | 緊急 | H17.1011 |
| 22 | DA112次 | 史跡大安寺旧境内 | 大安寺八幡町1310-3 | 2005/10/25～11/16 | 43㎡ | 池田裕 | 個人 | 個人住宅改築 | 緊急 | H17.1003 |
| 23 | DA113次 | 史跡大安寺旧境内 | 大安寺町ヒラキ1238-1 | 2006/2/6～3/9 | 102㎡ | 池田裕 | 芝池水利組合長 | 芝池改修 | 緊急 | H17.1074 |
| 24 | SD20次 | 西大寺旧境内 | 西大寺南町2405-1他 | 2005/6/15～9/14 | 1060㎡ | 安井 | 奈良市長 | 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業 | 公共 | S63.3056 |
| 25 | SD21次 | 西大寺旧境内・平城京跡(一条南大路) | 西大寺南町2387-2他 | 2005/12/15～2006/3/13 | 460㎡ | 安井 | 奈良市長 | 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業 | 公共 | S63.3056 |
| 26 | SM2次 | 成務陵古墳陪塚ろ号隣接地 | 山陵町318-1他 | 2005/7/5～7/12 | 28㎡ | 池田裕 | 個人 | 個人住宅新築 | 緊急 | H17.3002 |
| 27 | UA3次 | 歌姫赤井谷第3号横穴 | 歌姫町赤井谷986-2 | 2005/8/1～10/20 | 44㎡ | 池田裕・植野浩三* | 奈良市教育委員会教育長 | 遺跡範囲確認 | 緊急 | — |
| 28 | FJ5次 | 古市桜谷遺跡・古市城跡 | 古市町98-1他 | 2005/7/11～11/10 | 1440㎡ | 山前 | 奈良市長 | 古市公園整備事業 | 公共 | H15.3266 |
| 29 | BS4次 | 別所下ノ前遺跡 | 別所町480他 | 2005/7/14～11/11 | 1580㎡ | 鐘方・大窪 | 奈良県北部農林振興事務所長 | 県営ほ場整備事業・田原東地区 | 原因者 | H13.3153 |
| 30 | MM8次 | 水間遺跡 | 水間町1052他 | 2005/11/28～2006/1/13 | 555㎡ | 鐘方・大窪 | 奈良県北部農林振興事務所長 | 県営ほ場整備事業・田原東地区 | 原因者 | H13.3153 |

*奈良大学文学部文化財学助教授(当時)



平成 17 年度 発掘調査位置図 A 1/50000



平成 17 年度 発掘調査位置図 B 1/50000

1. J R奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査 平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊坊間東小路）の調査 第541次

I. はじめに

奈良市教育委員会では、平成13年度からJ R奈良駅南特定土地区画整理事業地内（総面積14.6万㎡）の発掘調査を実施しており、平成15年度までの3カ年度に、10箇所計5,341㎡の発掘調査を実施している。今年度の調査は平成16年度事業の繰越分で、調査位置は下記の一覧表と位置図の通りである。

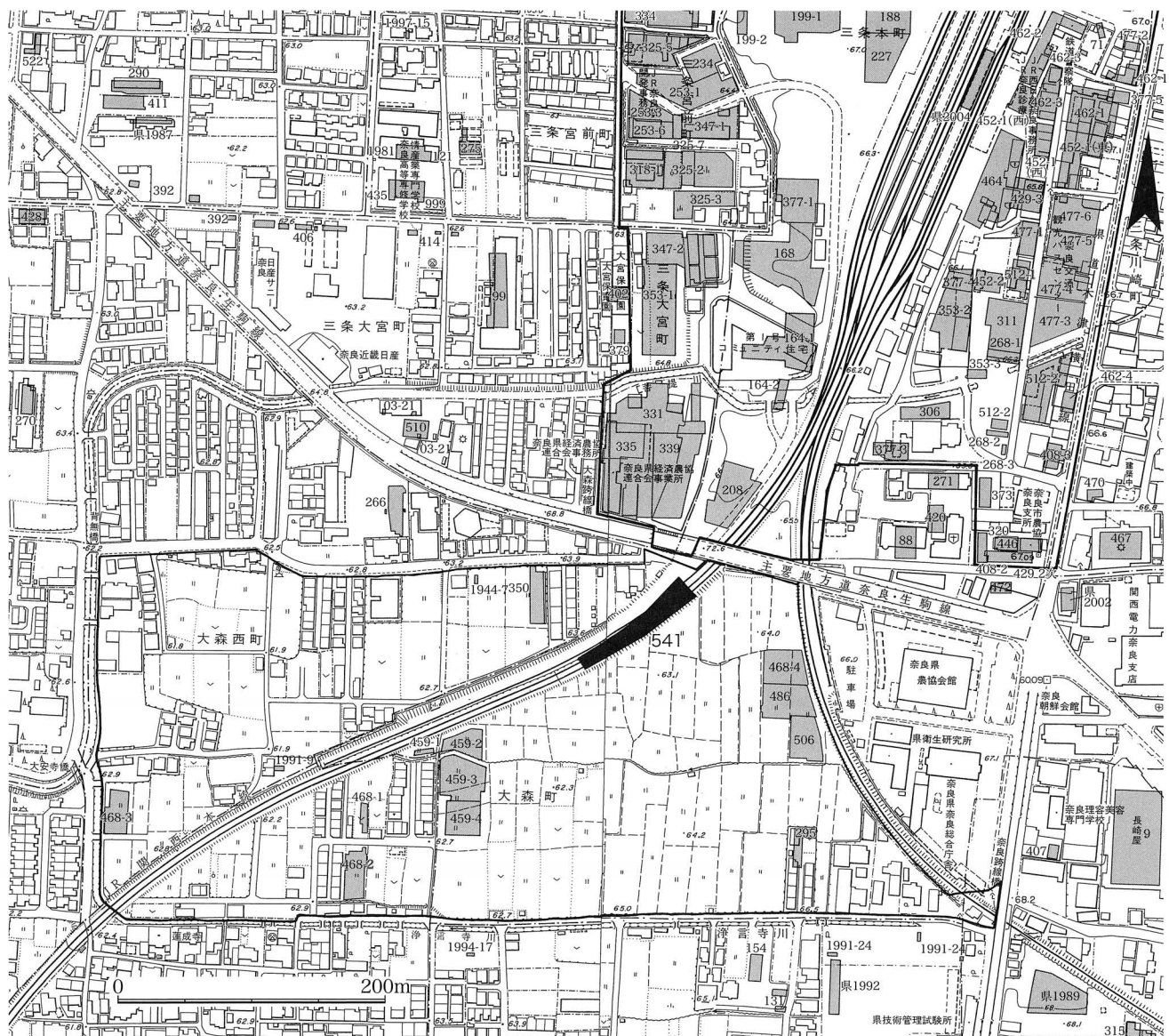
発掘調査は連続立体交差関連公共事業による高架工事に先立ち、J R関西本線の軌道高架工事部分で実施した。調査は東発掘区（800㎡）と西発掘区（600㎡）に分けて行なった。調査地は平城京の条坊復原では左京五

条四坊九坪および十六坪に該当し、発掘区中央には東四坊坊間東小路、北端には四条大路が位置する。これまで、九坪内では坪の北端部でH J第350次、南西隅でH J第459-2次、十六坪内では坪の南東隅でH J第468-4次、H J第486次の各調査を実施している。今回の調査は、九・十六坪の様相と東四坊坊間東小路の確認を主たる目的として実施した。

報告に用いる遺構記号・番号は、古墳時代以前の遺構には2桁を、奈良時代以降のものには3桁以上の番号を用い、これらの番号は当事業地内で、坪ごとに設定している通し番号とした。（宮崎正裕）

平成17年度 J R奈良駅南特定土地区画整理事業地内 発掘調査一覧表

| 遺跡名 | 調査回数 | 事業名 | 調査地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査担当者 |
|----------------------------|---------|--------------|-----------|-----------------------|--------|-------|
| 平城京跡（左京五条四坊九・十六坪、東四坊坊間東小路） | HJ第541次 | 連立関連公共施設整備事業 | 大森町135-9他 | H17.11.1～ H18.3.15 | 1,400㎡ | 宮崎・山前 |



J R奈良駅南特定土地区画整理事業地内 発掘調査位置図 (1/5000)

II. 基本層序

発掘区が北東から南西に細長いため、基本層序は場所により異なる。東発掘区北半では造成土、黒灰色・灰色砂質土、灰色砂質土・灰黄色粘砂と続き、現地地表下1.5m前後で旧流路埋土である橙茶灰色粘砂（標高約63.4m）となる。東発掘区南端では造成土、暗灰色砂質土と続き、現地地表下1.3m前後で淡黄灰色粘質土の地山（標高約63.4m）となる。西発掘区南端では、造成土直下の現地地表下1.1m前後で明黄色粘土あるいは明黄灰色粘砂の地山（標高約63.3m）となる。

なお、東発掘区南端から西発掘区北端にかけては、部分的に黄灰茶色粘砂を主体とする整地土層が0.1m程度の厚さで堆積する。遺構はこの整地土層、旧流路埋土、地山上面に遺存し、遺構検出は旧流路埋土上面、整地土層上面、地山上面で行なった。

東発掘区北半の旧流路は、堆積状況と出土土器の特徴などから、弥生時代後期に埋没したものとみられる。

III. 検出遺構

検出遺構には弥生時代と奈良・平安時代のものがあり、各遺構の概要は、次頁以下の遺構一覧表の通りである。

東発掘区で検出した土坑 S K 02 は南北・東西ともに、1.1m以上の規模で、発掘区外北西へと延びる。弥生時代

中期末～後期初頭の弥生土器甕・高杯の小片が出土した。

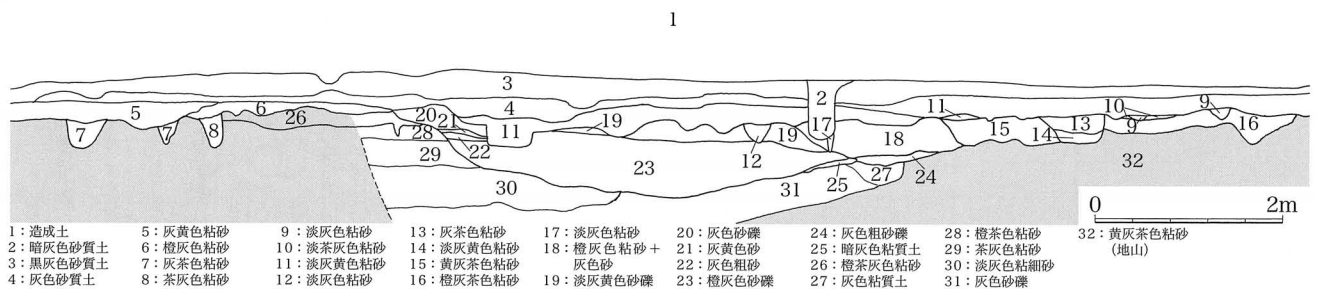
奈良・平安時代の遺構には、東四坊坊間東小路とその両側溝、それと平行する南北溝、坪内を区画する溝、掘立柱塀・建物、井戸、土坑がある。以下、東四坊坊間東小路に関連する条坊遺構、九坪内の遺構、十六坪内の遺構の順で報告する。

条坊遺構 西発掘区で検出した S D 1011 は、幅1.6～2.2m、深さ0.3mの南北溝である。S D 1012 はその東側に平行する幅1.8～3.0mの南北溝で、その溝心間距離は約6.9mを測る。両溝の検出位置から、S D 1011 が東四坊坊間東小路の西側溝、S D 1012 が東四坊坊間東小路の東側溝とみられ、その間が東四坊坊間東



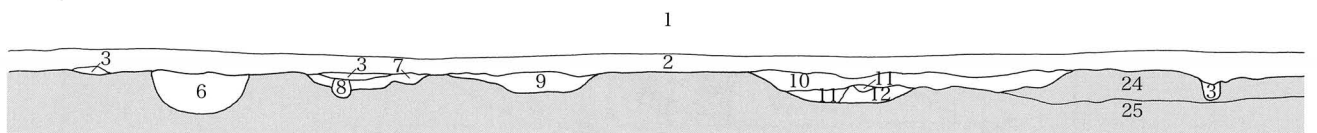
東四坊坊間東小路 S F 1010 (北から)

SW NE
L.H:65.5m

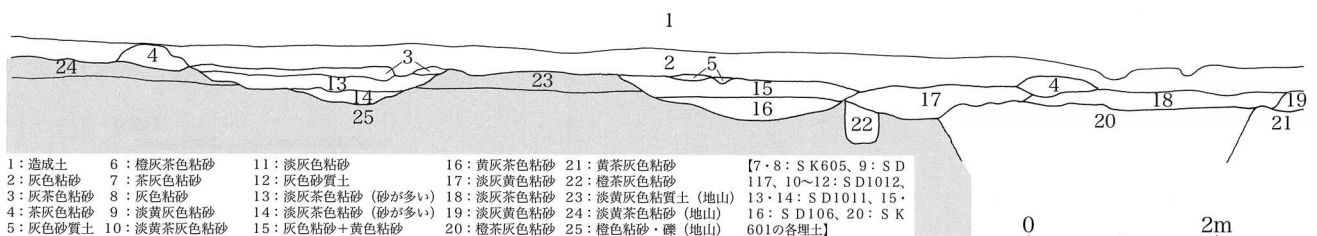


H J 第 541 次調査 東発掘区旧流路部分土層断面図 (1/80)

NE SW
L.H:64.6m



SW L.H:64.6m



H J 第 541 次調査 西発掘区東四坊坊間東小路 (S F 1010) 部分土層断面図 (1/80)

小路の路面（SF1010）に相当する。SF1010は路面幅が約5mで、標高が63.4m前後である。路面心の国土座標値はX=-147,135.0、Y=-16,588.2となる。

九坪内の遺構 奈良時代の溝7条、掘立柱塀2条、土坑5基がある。

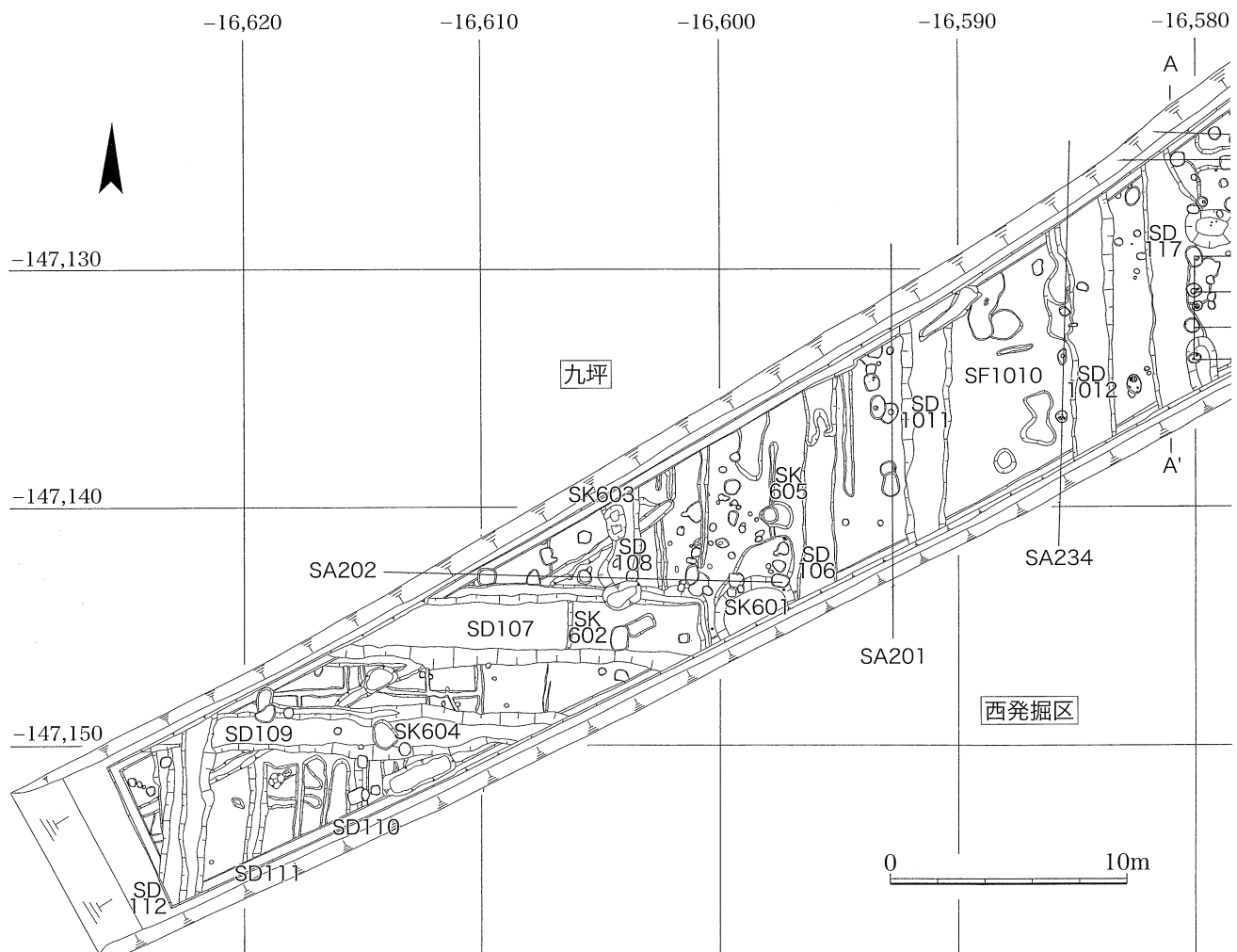
SD106は、前述の東四坊坊間東小路の西側溝SD1011と平行する南北溝である。重複関係から土坑SK601よりも新しい。SD106とSD1011の間には南北塀SA201があり、九坪の東端を限る。また、この部分で検出した東西約1.5m間隔の小柱穴2箇所は、築地塀添柱穴ともみられる。SD107は幅3.5m、深さ0.6mの東西溝で、南北溝SD108が繋がる。SD107は東

端から6m以西は0.1m程度深くなる。SA202はSD107のすぐ北側で検出した東西塀で、重複関係からSD107・108、SK601よりも新しい。SD109はSD107の南約2mで検出した東西溝で、溝底は西に下り、発掘区外西に延びる。SD109には南北溝SD110・111が繋がる。SD112は発掘区の西端で検出した幅2.0m、深さ0.6mの南北溝で、溝底は北に下り、発掘区外北に延びる。SD112は上層と下層に分かれる。下層の埋没はSD109の掘削に先行し、上層はSD109と同時期に埋没する。SD107からSD109の間は、九坪内の南北およそ1/2に相当し、SD112は九坪内の東端からおよそ1/4に位置する。

HJ第541次調査 条坊関係検出遺構（道路側溝）（上）・九坪内検出遺構（掘立柱塀）（下）一覧表

| 遺構番号 | 掘形 | | | 主な出土遺物 | 備考 |
|--------|-----|---------------------|------|--|--|
| | 平面形 | 平面規模 | 深さ | | |
| SD1011 | 南北溝 | 長さ10.5m以上×幅1.6～2.2m | 0.3m | 土師器杯・皿・高杯・壺・甕、須恵器杯・蓋・鉢・壺・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦 | 埋没時期は平安時代初頭。溝心の国土座標値はX=-147,135.0、Y=-16,591.7。 |
| SD1012 | 南北溝 | 長さ11.5m以上×幅1.8～3.0m | 0.3m | 土師器杯・高杯・壺・甕・甕、須恵器杯・皿・蓋・壺・平瓶・甕・水瓶（ミニチュア）、土馬、丸瓦、平瓦 | 埋没時期は平安時代初頭。溝心の国土座標値はX=-147,135.0、Y=-16,584.8。 |

| 遺構番号 | 棟方向 | 規模 | 全長 (m) | 柱間寸法 (m) | 備考 |
|-------|-----|-----|--------|----------------------------|------------------------------|
| SA201 | 南北 | 1以上 | 3.0以上 | 3.0 | |
| SA202 | 東西 | 6以上 | 11.9 | 西から1.8-1.8-2.1-2.6-1.8-1.8 | 重複関係からSD107・108、SK601よりも新しい。 |



HJ第541次調査 西発掘区遺構平面図 (1/300)

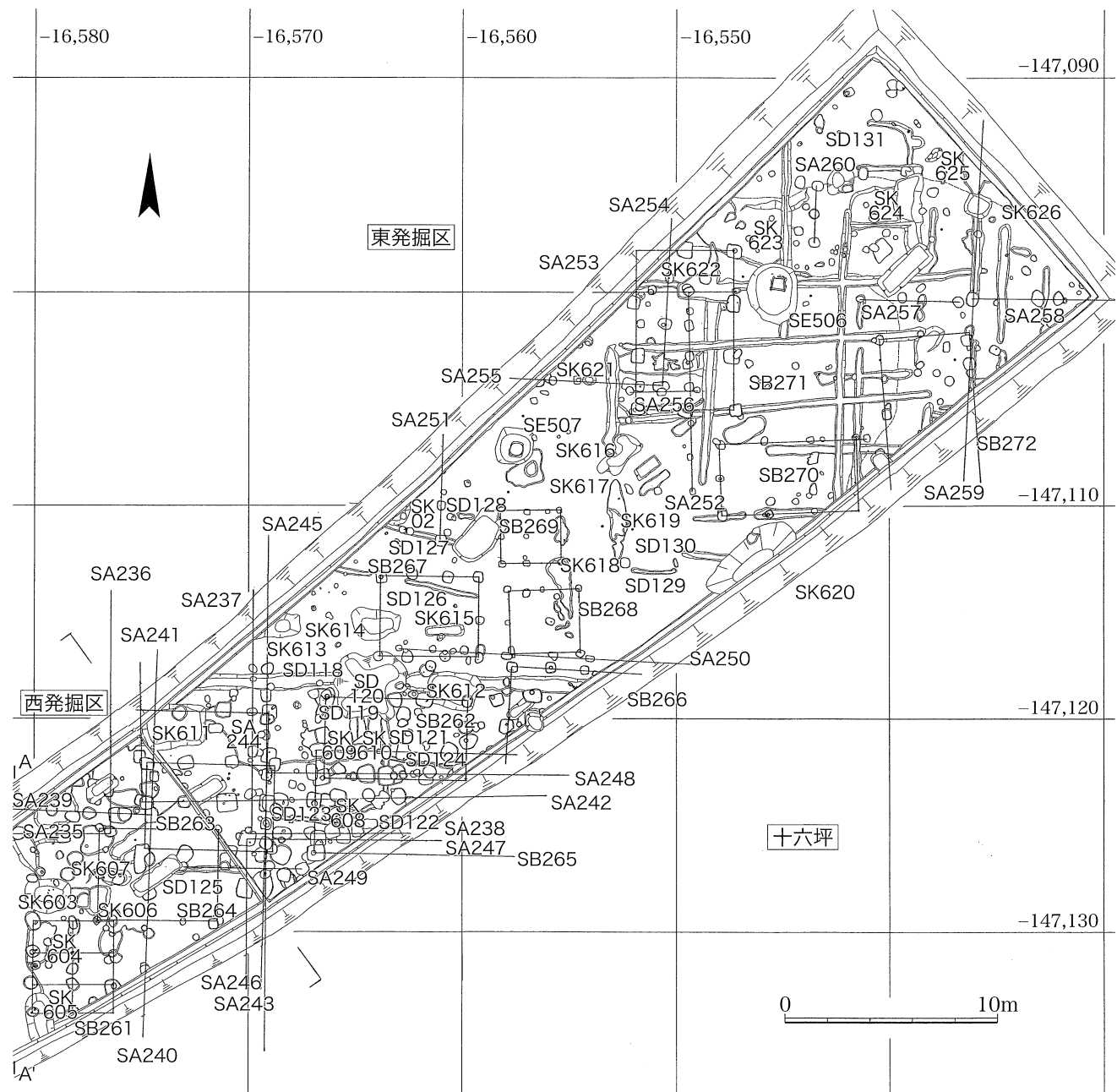
十六坪内の遺構 奈良・平安時代の溝15条、掘立柱塀27条、掘立柱建物12棟、井戸2基、土坑24基がある。

なお、後述のSD117以东およびSD118以南の掘立柱塀・建物の大半は、前述の整地土層上面で検出した。この整地土層中には、奈良時代後半の土器が含まれる。

SD117は、整地土層下の地山上面で検出した南北溝で、東四坊坊間東小路の東側溝SD1012と平行する。十六坪西端の南北棟建物SB261と東西塀SA235は、SD117が埋った後に建てられる。SD118は、整地土層下の地山上面で検出した東西溝で、溝底は西に下る。埋土から奈良時代後半の土器が大量に出土した。SD118は十六坪内の北端からおよそ1/4に位置する。また、SD118の南側と北側とは、遺構密度が大きく変わることから、坪内を南北に区画する溝とみられる。

SD118の南側に点在するSD119～124は、すべて整地土層下の地山上面で検出した。

南北溝SD117の東側で、東西溝SD118の南側部分には掘立柱塀とみられる柱列で区画された時期が複数ある。まず、南北塀SA243と東西塀SA244でL字形に区画される。つぎにSA234を踏襲した南北塀SA246と東西塀SA247でL字形に区画される。この時期までは、これらの塀で区画された範囲には掘立柱建物は確認できない。その後、南北塀SA236・237とそれに繋がる東西塀SA235・238が東西対称な位置に配される。この時期には、SA237とSA238で区画された北東側にSB262が建てられ、SA235の南側に南北塀SA241と東西塀SA242でL字形に区画され、その北東側にSB268～270・272が建てられる。

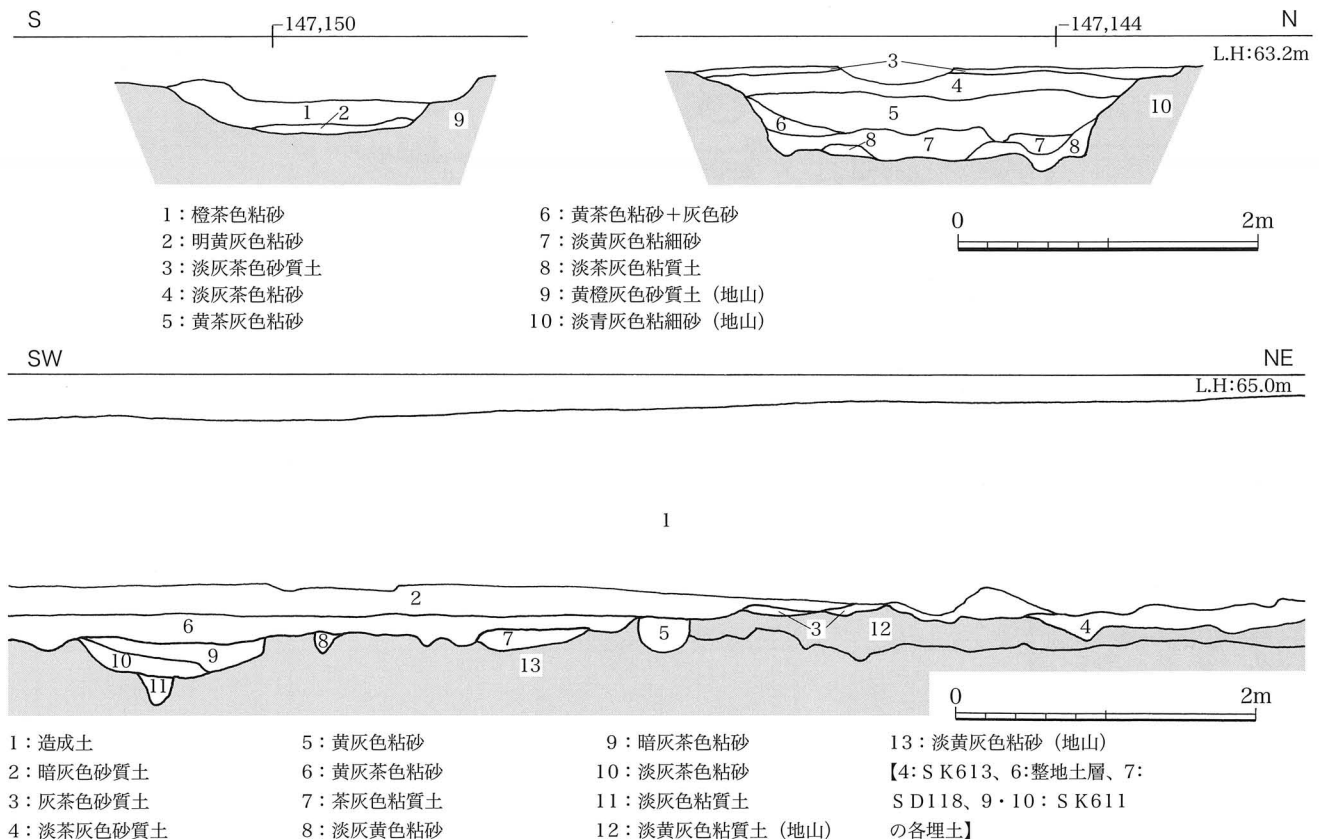


HJ第541次調査 西発掘区(東端)・東発掘区遺構平面図 (1/300)

H J 第 541 次調査 九坪内検出遺構（溝・土坑）・十六坪内検出遺構（井戸）一覽表

| 遺構番号 | 掘形 | | | 主な出土遺物 | 備考 |
|---------|------|-------------------|---------|---|---|
| | 平面形 | 平面規模 (m) | 深さ (m) | | |
| S D 106 | 南北溝 | 長さ10.3以上×幅1.4～1.7 | 0.1～0.3 | 土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、製塩土器丸瓦、平瓦 | 出土土器の時期不明。溝心の国土座標値はX=-147,135.0、Y=-16,596.2。 |
| S D 107 | 東西溝 | 長さ16.0×幅3.5 | 0.6 | サヌカイト剥片、土師器杯・皿・鉢・高杯・壺・蓋・甕・甕・高杯（ミニチュア）、須恵器杯・杯蓋・皿・鉢・壺・壺蓋・平瓶・甕、製塩土器、線刻土器、丸瓦、平瓦 | 埋没時期は奈良時代末。重複関係からS K 601・602よりも新しく、S A 202よりも古い。S D 108に繋がる。溝心の国土座標値はX=-147,144.9、Y=-16,609.0。 |
| S D 108 | 南北溝 | 長さ4.5×幅2.0 | 0.1～0.2 | 土師器甕、須恵器杯・壺・横瓶・甕、丸瓦、平瓦 | 出土土器の時期不明。重複関係からS K 603よりも新しい。S D 107に繋がる。 |
| S D 109 | 東西溝 | 長さ15.0×幅2.0 | 0.4 | サヌカイト剥片、土師器杯・皿・高杯・蓋・甕・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・鉢・壺・壺蓋・平瓶・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦 | 埋没時期は奈良時代後半。重複関係からS K 604よりも新しく、S D 112と同時期に埋没。S D 110・111に繋がる。溝心の国土座標値はX=-147,149.4、Y=-16,609.0。 |
| S D 110 | 南北溝 | 長さ2.7×幅0.6 | 0.2 | 土師器甕 | 出土土器の時期不明。S D 109に繋がる。 |
| S D 111 | 南北溝 | 長さ4.5×幅0.7 | 0.3 | 土師器杯・皿・壺・甕、須恵器杯・鉢・甕 | 出土土器の時期不明。S D 109に繋がる。 |
| S D 112 | 南北溝 | 長さ8.2×幅2.0 | 0.6 | 土師器杯・甕、須恵器杯・皿・鉢・蓋・甕 | 出土土器の時期不明。重複関係から、下層の埋没はS D 109の掘削に先行し、上層はS D 109と同時期に埋没。溝心の国土座標値はX=-147,149.4、Y=-16,622.0。 |
| S K 601 | 不整形 | 南北4.2以上×東西3.5以上 | 1.4以上 | 土師器杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・皿・壺・蓋・甕 | 湧水が激しく完掘を断念。出土土器の時期不明。重複関係からS A 202、S D 107よりも古い。 |
| S K 602 | 隅丸方形 | 南北1.0×東西0.8 | 0.2 | 出土遺物無 | 重複関係からS D 107よりも古い。 |
| S K 603 | 南北溝状 | 南北1.8×東西1.2 | 0.7 | 出土遺物無 | 重複関係からS D 108よりも古い。 |
| S K 604 | 不整形 | 南北1.7×東西2.0 | 0.2 | 土師器、須恵器杯・壺・甕 | 重複関係からS D 109よりも古い。 |
| S K 605 | 不整形 | 南北1.2×東西1.4 | 0.1 | 土師器杯、須恵器杯 | |

| 遺構番号 | 掘形 | | | 井戸枠 | | 主な出土遺物 | 備考 |
|---------|------|---------------|------|-------------|---------|--|---|
| | 平面形 | 平面規模 | 深さ | 構造 | 内法 | | |
| S E 506 | 楕円形 | 南北3.0m×東西2.5m | 1.3m | 方形縦板隅柱横棧留 | 一辺0.55m | (掘形) 土師器杯・皿・鉢・高杯・甕、須恵器杯・壺・蓋・甕、丸瓦、平瓦 (枠内) 土師器杯・皿・碗・鉢・甕、須恵器杯・壺・蓋・甕、製塩土器、墨書土器「大」、丸瓦、平瓦 (枠抜取) 土師器甕、須恵器皿、墨書土器「十」、埴塼 | 井戸底の標高は62.1m。奈良時代末の井戸。重複関係からS K 623よりも新しく、S K 622よりも古い。 |
| S E 507 | 隅丸方形 | 南北1.6m×東西1.7m | 1.4m | 一木半裁割り貫き+曲物 | 直径0.6m | (掘形) 土師器杯・皿・甕、須恵器杯・壺・甕、丸瓦、平瓦 (枠内) 土師器杯・皿・甕、須恵器杯・鉢・壺・蓋・平瓶・甕、黒色土器A類皿・碗、製塩土器、軒平瓦(6667A)、丸瓦、平瓦、曲物の蓋板(習書)(枠抜取) 土師器碗 | 井戸底の標高は61.9m。平安時代前半の井戸。重複関係からS K 616よりも新しい。 |



H J 第 541 次調査 西発掘区 S D 107・109 土層断面図 (1/50) (上)・東発掘区土層断面図 (1/50) (下)

H J 第 541 次調査 十六坪内検出遺構（掘立柱塀・建物）一覧表

| 遺構番号 | 棟方向 | 規模 | 桁行(南北) | 梁行(東西) | 柱間寸法(m) | | 備考 |
|---------|-----|-------------------|---------|---------|----------------------------|--------|--|
| | | 桁行(南北) ×梁行(東西) | 全長(m) | 全長(m) | 桁行(南北) | 梁行(東西) | |
| S A 234 | 南北 | 2以上 | 4.5以上 | | 北から1.8-2.7 | | 重複関係からSD1012よりも古い。 |
| S A 235 | 東西 | 2以上 | 4.2以上 | | 2.1等間 | | 重複関係からSK607よりも新しい。S A 236に繋がる。建物の南側柱の可能性あり。 |
| S A 236 | 南北 | 2以上 | 4.0以上 | | 2.0等間 | | 重複関係からSK607よりも新しい。S A 235に繋がる。建物の東側柱の可能性あり。 |
| S A 237 | 南北 | 4以上 | 7.6以上 | | 南から1.8-1.8-2.0-2.0 | | 重複関係からS A 246よりも新しい。S A 238に繋がる。 |
| S A 238 | 東西 | 3以上 | 5.2以上 | | 西から1.5-2.4-1.3 | | 重複関係からSD123、S A 247よりも新しい。S A 237に繋がる。 |
| S A 239 | 東西 | 3以上 | 4.8以上 | | 東から1.2-1.8-1.8 | | S A 240に繋がる。 |
| S A 240 | 南北 | 5以上 | 9.6以上 | | 南から1.8-1.8-1.5-2.1-2.4 | | 重複関係からSB263よりも古い。S A 239に繋がる。 |
| S A 241 | 南北 | 1以上 | 2.1以上 | | 2.1 | | 重複関係からSB263よりも古い。 |
| S A 242 | 東西 | 6以上 | 12.1以上 | | 西から2.0-2.0-2.4-2.7-1.5-1.5 | | 重複関係からS A 243よりも新しい。 |
| S A 243 | 南北 | 4以上 | 8.4以上 | | 2.1等間 | | 重複関係から整地土層、S A 245、SB263よりも古い。S A 244に繋がる。 |
| S A 244 | 東西 | 2以上 | 4.2以上 | | 2.1等間 | | 重複関係からSK611、整地土層よりも古い。S A 243に繋がる。 |
| S A 245 | 南北 | 5以上 | 12.0以上 | | 2.4等間 | | 重複関係からS A 243よりも新しく、SK613よりも古い。S A 248に繋がる。 |
| S A 246 | 南北 | 1以上 | 2.4以上 | | 2.4 | | 重複関係からS A 237よりも古い。S A 247に繋がる。建物の西側柱の可能性あり。 |
| S A 247 | 東西 | 3以上 | 4.5以上 | | 西から1.5-1.8-1.2 | | 重複関係からSD123よりも新しく、S A 238よりも古い。S A 246に繋がる。建物の北側柱の可能性あり。 |
| S A 248 | 東西 | 3以上 | 7.5以上 | | 西から2.1-2.7-2.7 | | 重複関係からSB262よりも新しい。S A 245に繋がる。 |
| S A 249 | 東西 | 3以上 | 6.0以上 | | 西から2.1-2.1-1.8 | | 重複関係からS A 245よりも新しく、SD263よりも古い。 |
| S A 250 | 東西 | 6以上 | 10.8以上 | | 西から1.5-1.5-2.1-2.1-1.8-1.8 | | 重複関係からSB268よりも新しい。 |
| S A 251 | 南北 | 2以上 | 3.4以上 | | 1.7等間 | | 重複関係からSD127よりも新しい。 |
| S A 252 | 南北 | 6 | 9.4 | | 北から1.7-1.5-1.3-1.5-1.7-1.7 | | 重複関係からSK621よりも古い。 |
| S A 253 | 東西 | 2以上 | 3.9以上 | | 東から2.1-1.8 | | 重複関係からSK622よりも新しい。 |
| S A 254 | 南北 | 3以上 | 5.1以上 | | 南から1.5-1.5-2.1 | | 重複関係からS A 255、SK621よりも古い。 |
| S A 255 | 東西 | 3以上 | 5.1以上 | | 東から1.5-1.8-1.8 | | 重複関係からS A 255よりも古い。 |
| S A 256 | 東西 | 2 | 3.2 | | 1.6等間 | | 重複関係からS A 254・255よりも新しい。 |
| S A 257 | 東西 | 2 | 4.5 | | 東から2.7-1.8 | | |
| S A 258 | 東西 | 1以上 | 3.0以上 | | 3.0 | | S A 259に繋がる。 |
| S A 259 | 南北 | 2以上 | 6.0以上 | | 3.0等間 | | 重複関係からSB272よりも古い。S A 258に繋がる。 |
| S A 260 | 南北 | 2 | 2.8 | | 1.4等間 | | |
| S B 261 | 南北 | 3×2 | 4.5 | 3.6 | 1.5等間 | 1.8等間 | 重複関係からSD117、SK604・605よりも新しい。 |
| S B 262 | 東西 | 4×2 | 6.3 | 3.6 | * | 1.8等間 | 桁行柱間寸法は、西から1.5-1.5-1.5-1.8。重複関係からS A 248、SB265よりも古い。 |
| S B 263 | 東西 | 3×2 | 6.3 | 4.2 | 2.1等間 | 2.1等間 | 重複関係からSD123、S A 240・241・242・243よりも新しい。 |
| S B 264 | 東西 | 3×2 | 5.5 | 4.2 | * | 2.1等間 | 桁行柱間寸法は、西から2.0-2.0-1.5。重複関係からSK607よりも新しい。 |
| S B 265 | 東西 | 4以上×2 | 8.4以上 | 4.8 | 2.1等間 | 2.4等間 | 重複関係からS A 247よりも新しい。 |
| S B 266 | 不明 | (1以上)× (2以上) | (2.7以上) | (3.2以上) | 2.7 | * | 東西柱間寸法は、西から1.8-1.5。 |
| S B 267 | 東西 | 3×2 | 4.5 | 3.6 | 1.5等間 | 1.8等間 | 重複関係からSD126よりも新しく、SK614よりも古い。 |
| S B 268 | 不明 | (2)×(2) | 3.0 | 3.3 | 1.5 | * | 東西柱間寸法は、西から1.5-1.8。重複関係からS A 250よりも古い。 |
| S B 269 | 不明 | (2)×(2) | 2.4 | 2.7 | 1.2等間 | * | 東西柱間寸法は、西から1.2-1.5。重複関係からSK617・618よりも古い。 |
| S B 270 | 東西 | 3×2 | 6.3 | 3.2 | 2.1等間 | 1.6等間 | 北側柱柱穴から、軒平瓦(6668A)が出土。 |
| S B 271 | 南北 | 3×2 | 7.2 | 4.8 | 2.4等間 | 2.4等間 | 重複関係からSK621・622よりも新しい。 |
| S B 272 | 南北 | 3以上×2 | 5.4 | 4.2 | 1.8等間 | 2.1等間 | 西側柱柱穴から、緑釉陶器蓋が出土。重複関係からS A 259よりも新しい。 |

H J 第 541 次調査 十六坪内検出遺構（溝・土坑）一覧表

| 遺構番号 | 掘 形 | | | 主な出土遺物 | 備考 |
|---------|------|-------------------|---------|---|--|
| | 平面形 | 平面規模 (m) | 深さ (m) | | |
| S K 02 | 不整形 | 南北1.1以上×東西1.1以上 | 0.75 | 弥生土器高杯・甕 | 底が平坦な、弥生時代後期初頭の土坑。 |
| S D 117 | 南北溝 | 長さ11.0以上×幅1.8～3.0 | 0.1～0.3 | 土師器杯・皿・甕、須恵器杯・壺・蓋・甕、漆壺（土師器壺）、製塩土器、土馬、平瓦、フイゴ羽口 | 重複関係から整地土層、S A 235、S B 261、S K 603・604・605よりも古い。溝心の国土座標値はX=-147,135.0、Y=-16,581.4。 |
| S D 118 | 東西溝 | 長さ19.3以上×幅0.6 | 0.2～0.3 | 古墳時代須恵器杯身、土師器杯・皿・椀・高杯・壺・甕、須恵器杯・皿・鉢・壺・蓋・横瓶・甕・壺（漆付着）、製塩土器 | 埋没時期は奈良時代後半。重複関係からS K 612よりも新しく、整地土層よりも古い。溝心の国土座標値はX=-147,118.2、Y=-16,569.0。 |
| S D 119 | 南北溝 | 長さ1.2以上×幅0.4 | 0.1 | 弥生土器、土師器、須恵器杯 | 重複関係から整地土層、S K 610よりも古い。 |
| S D 120 | 南北溝 | 長さ0.8以上×幅0.3 | 0.05 | 土師器 | 重複関係から整地土層、S K 610よりも古い。 |
| S D 121 | 南北溝 | 長さ3.7以上×幅0.5 | 0.1 | 弥生土器壺、土師器、須恵器 | 南端でS D 122に繋がる。重複関係から整地土層、S A 248、S B 262よりも古い。 |
| S D 122 | 蛇行 | 長さ1.3以上×幅0.3 | 0.05 | 須恵器杯 | 北端でS D 121に繋がる。重複関係から整地土層、S A 238よりも古い。 |
| S D 123 | 東西溝 | 長さ3.3以上×幅0.3 | 0.05 | 出土遺物無 | 重複関係から整地土層、S A 238・247、S B 263よりも古い。 |
| S D 124 | 東西溝 | 長さ3.0以上×幅0.2 | 0.05 | 出土遺物無 | 重複関係から整地土層、S D 121、S B 265よりも古い。 |
| S D 125 | 東西溝 | 長さ3.3以上×幅0.4 | 0.1 | 土師器 | 重複関係からS A 249よりも新しい。 |
| S D 126 | 東西溝 | 長さ3.6以上×幅0.3 | 0.05 | 出土遺物無 | 重複関係からS B 267よりも古い。 |
| S D 127 | 東西溝 | 長さ3.8以上×幅0.3 | 0.05 | 出土遺物無 | 重複関係からS A 251よりも古い。 |
| S D 128 | 東西溝 | 長さ0.9以上×幅0.3 | 0.05 | 須恵器杯蓋 | |
| S D 129 | 東西溝 | 長さ2.2以上×幅0.2 | 0.05 | 土師器皿、須恵器甕 | |
| S D 130 | 東西溝 | 長さ4.3以上×幅0.3 | 0.1 | 土師器杯、須恵器杯・皿 | 重複関係からS K 620よりも新しい。 |
| S D 131 | 蛇行 | 長さ3.5以上×幅0.3 | 0.1 | 土師器杯 | |
| S K 603 | 隅丸方形 | 南北1.6×東西2.0 | 0.15 | 土師器、須恵器杯・壺、丸瓦、平瓦 | 重複関係からS D 117よりも新しい。 |
| S K 604 | 不整形 | 南北2.0×東西1.5 | 0.45 | 土師器、須恵器 | 重複関係からS D 117よりも新しく、S B 261よりも古い。 |
| S K 605 | 楕円形 | 南北2.3以上×東西1.3 | 0.4 | 土師器、須恵器、平瓦 | 重複関係からS D 117よりも新しく、S B 261よりも古い。 |
| S K 606 | 不整形 | 南北1.3×東西1.1 | 0.1 | 土師器 | 重複関係からS K 607よりも古い。 |
| S K 607 | 不整形 | 南北0.8×東西2.0 | 0.1 | 須恵器壺 | 重複関係からS B 263・264よりも古い。 |
| S K 608 | 東西溝状 | 南北0.5×東西1.7 | 0.1 | 土師器杯・高杯、須恵器壺・甕 | 重複関係からS A 242、S B 265よりも古い。 |
| S K 609 | 東西溝状 | 南北0.7×東西1.5 | 0.05 | 土師器 | 重複関係からS B 265よりも古い。 |
| S K 610 | 楕円形 | 南北0.9×東西1.2 | 0.1 | 土師器杯蓋、須恵器甕 | 重複関係からS D 119・120、S B 265よりも古い。 |
| S K 611 | 隅丸方形 | 南北2.0×東西3.0 | 0.25 | 土師器椀・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・甕、製塩土器、転用硯（須恵器杯・杯蓋）、丸瓦、平瓦 | 重複関係からS A 244よりも新しく、整地土層よりも古い。 |
| S K 612 | 不整形 | 南北1.8×東西2.7 | 0.5 | 古墳時代土師器高杯、土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器皿・鉢・蓋、製塩土器 | 重複関係からS D 118、S B 262よりも古い。 |
| S K 613 | 隅丸方形 | 南北1.1×東西2.6以上 | 0.2 | 土師器皿、須恵器杯・甕 | |
| S K 614 | 不整形 | 南北1.5×東西2.3 | 0.5 | 弥生土器、土師器、須恵器 | 重複関係からS B 267よりも新しい。 |
| S K 615 | 隅丸方形 | 南北0.5×東西1.8 | 0.4 | 土師器、古墳時代須恵器杯身 | |
| S K 616 | 不整形 | 南北2.8以上×東西2.8 | 0.2 | 土師器、須恵器杯 | 重複関係からS E 507よりも古い。 |
| S K 617 | 不整形 | 南北1.4×東西0.7 | 0.15 | 土師器皿 | 重複関係からS B 269よりも新しい。 |
| S K 618 | 不整形 | 南北2.9×東西1.3 | 0.1 | 土師器、須恵器 | 重複関係からS B 269よりも新しい。 |
| S K 619 | 南北溝状 | 南北3.6×東西1.0 | 0.2 | 土師器壺、須恵器杯・甕、平瓦 | |
| S K 620 | 不整形 | 南北3.5以上×東西4.2以上 | 0.8 | 弥生土器、土師器、須恵器甕、製塩土器、平瓦 | 重複関係からS D 130よりも古い。 |
| S K 621 | 東西溝状 | 南北0.7～1.7×東西4.5 | 0.1 | 土師器椀・高杯、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・甕、黒色土器A類椀、製塩土器、丸瓦、平瓦 | 重複関係からS A 252・254よりも新しく、S B 271よりも古い。 |
| S K 622 | 東西溝状 | 南北0.4～1.5×東西4.0 | 0.15 | サヌカイト剥片、土師器甕・甕、須恵器杯・壺・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦 | 重複関係からS E 506よりも新しく、S A 253よりも古い。 |
| S K 623 | 不整形 | 南北3.2×東西2.4 | 0.1 | 土師器、須恵器、製塩土器 | 重複関係からS B 271、S E 506よりも古い。 |
| S K 624 | L字形 | 南北3.7以上×東西3.5 | 0.1～0.3 | 弥生土器、土師器高杯、須恵器杯・杯蓋・甕・製塩土器、丸瓦、平瓦 | 西半に比べ、東半は深い。 |
| S K 625 | 不整形 | 南北2.3以上×東西1.5以上 | 0.1 | 土師器 | 重複関係からS K 626よりも古い。 |
| S K 626 | 隅丸方形 | 一辺1.0 | 0.6 | 土師器甕、須恵器杯・杯蓋・甕、製塩土器、丸瓦、平瓦 | 重複関係からS K 625よりも新しい。 |

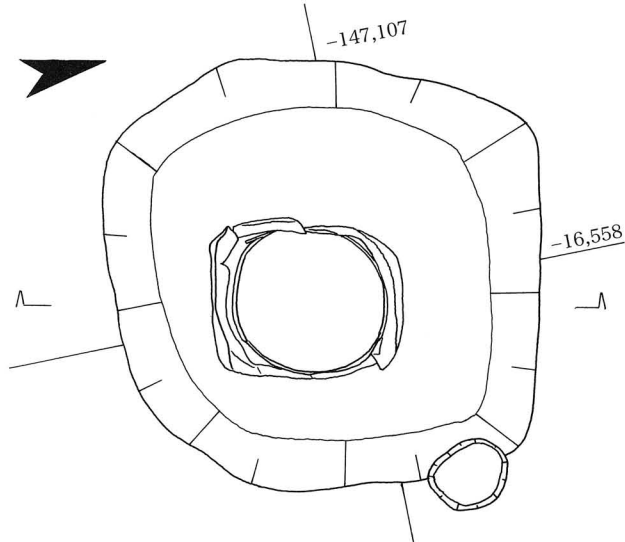
十六坪東端の井戸 S E 506 は方形縦板隅柱横棧留の枠をもつもので、枠が一部抜き取られている。枠内から奈良時代末の土器が出土した。重複関係から土坑 S K 623 よりも新しく、S K 622 よりも古い。S E 506 の西側には、南北棟建物 S B 271、東西塀 S A 253 が建てられる。S E 506 の東側には S A 253 と柱筋を揃えて東西塀 S A 257・258 が建てられる。S A 258 は西端で南北塀 S A 259 に繋がる。

井戸 S E 507 は一木半裁割り貫きの枠で、枠が一部抜き取られている。枠は高さ 0.9～1.1m が遺存し、井戸底に曲物を据えている。曲物内から、習書された曲物の蓋板が出土した。枠内の出土土器は奈良時代末～平安時代初頭のもものが主体を成すが、曲物内からは 9 世紀後半の黒色土器 A 類皿（1 点）が出土している。重複関係から土坑 S K 616 よりも新しい。（宮崎正裕）

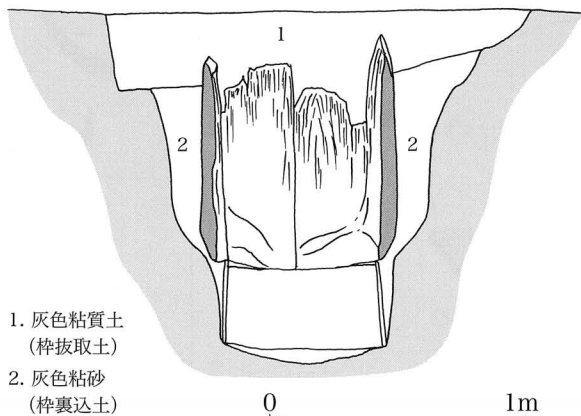
IV. 出土遺物

弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺物が遺物整理箱で 48 箱分出土した。

弥生時代の遺物には、弥生土器（壺・甕・高杯）と、



S N
L.H:63.6m



- 1. 灰色粘質土
(枠抜取土)
- 2. 灰色粘砂
(枠裏込土)

井戸 SE507 平面・立面図 (1/30)

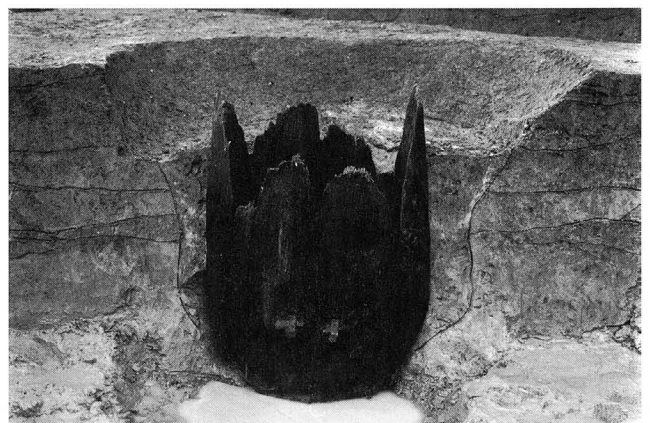
サヌカイト製の石鏃（1 点）と剥片（27 点）があり、遺物整理箱で 0.5 箱分出土している。弥生土器はすべて破片で、主に S K 02 および旧流路から出土した弥生時代中期末～後期初頭のものである。

古墳時代の遺物には、土師器と須恵器の小片が少量あり、奈良時代の遺構および遺物包含層から出土している。

奈良・平安時代の遺物には土器類、瓦類、木製品などがある。このうち、土器類は遺物整理箱で 35 箱分あり、内訳は土師器、須恵器、黒色土器 A 類、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、墨書土器、線刻土器、硯、ミニチュア土器、土馬などで、主に坪内の区画溝や井戸などから出土している。奈良時代後半～末にかけての土師器、須恵器が中心を占める。緑釉陶器は蓋の破片で、S B 272 の柱穴から、灰釉陶器は小片で、遺物包含層から出土した。製塩土器は遺物整理箱で 1 箱分あり、墨書土器は 11 点ある。瓦類は遺物整理箱で 10 箱分出土し、内訳は丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、塼である。出土の大半は奈良時代の丸瓦と平瓦で、丸瓦が 198 点（19,567 g）、平瓦が 482 点（48,749 g）、丸瓦か平瓦のいずれか不明が 191 点（2,799 g）である。型式不明の軒丸瓦が S D 109 から、軒平瓦 6668 A が S B 270 の柱穴から、同 6667 A が S E 507 枠内から各 1 点出土した。塼は S E 506・507 枠内から各 1 点出土した。木製品には、習書した曲物の蓋板（直径 186×厚さ 4mm）が、S E 507 枠内から 2 点（1 個体）出土した。その他には、柑壺（5 点）、フイゴ羽口（1 点）、鉍滓、炭化物、植物種がある。

以下、出土量の大半を占める井戸 S E 506・507、東西溝 S D 107 から出土した土器の概要を記す。

S E 506 からは、土師器杯 A（7）・杯 B、皿 A・皿 B・皿 C（1）・椀 A（2～4）・高杯・鉢・甕、須恵器杯蓋（5・6）・杯 A（8）・杯 B（9～13）・皿 C（14）・壺・壺 G（15）・甕が出土している。2～4 は内面、口縁部外面をヨコナデし、体部外面をヘラケズリで調整する。ヨコナデの方向は時計回りである。4 は底部外面に



井戸 S E 507 (東から)

「大」の墨書がある。5・6は外面に重ね焼きの痕がある。5は内面に灰が降下しており、内面を上に向けて置いていたことがわかる。8は口縁部に粘土紐を巻きあげた痕が明瞭に残り、口縁部と底部の境をロクロケズリし、東海産の須恵器に類似する。9～13は口径16.7～18.2cm、器高4.8～6.0cmである。色調は青灰色～暗青灰色で、口縁部内外面をロクロナデで、底部外面をナデで調整する。12・13は高台に重ね焼きの痕がある。15は底部外面に回転糸切りの痕がみられ、頸部と体部は2段接合である。1～8、12・13・15が枠内、6・9～11・14が枠抜取から出土している。

SE507からは、土師器杯・皿C (17)・椀D (16)・甕、須恵器杯蓋・杯A (18)・杯B・皿・壺 (19)・平瓶・甕、黒色土器皿 (20)・杯 (21)・椀 (22) が出土している。17は口縁端部に煤が付着しており、灯明皿に用いられたと思われる。18は箱形をし、胎土中に黒色微粒子を多く含む。口縁部外面に重ね焼きの痕がある。19は灰白色で、軟質の焼き上がりである。黒色土器 (20～22) は、いずれも内面、口縁部外面に炭素を吸着さ

せたA類である。内面、口縁部外面をヘラミガキで、口縁部外面をヘラケズリで調整する。21は内面に螺旋暗文が施される。20～22が枠内、16～19が枠抜取から出土している。

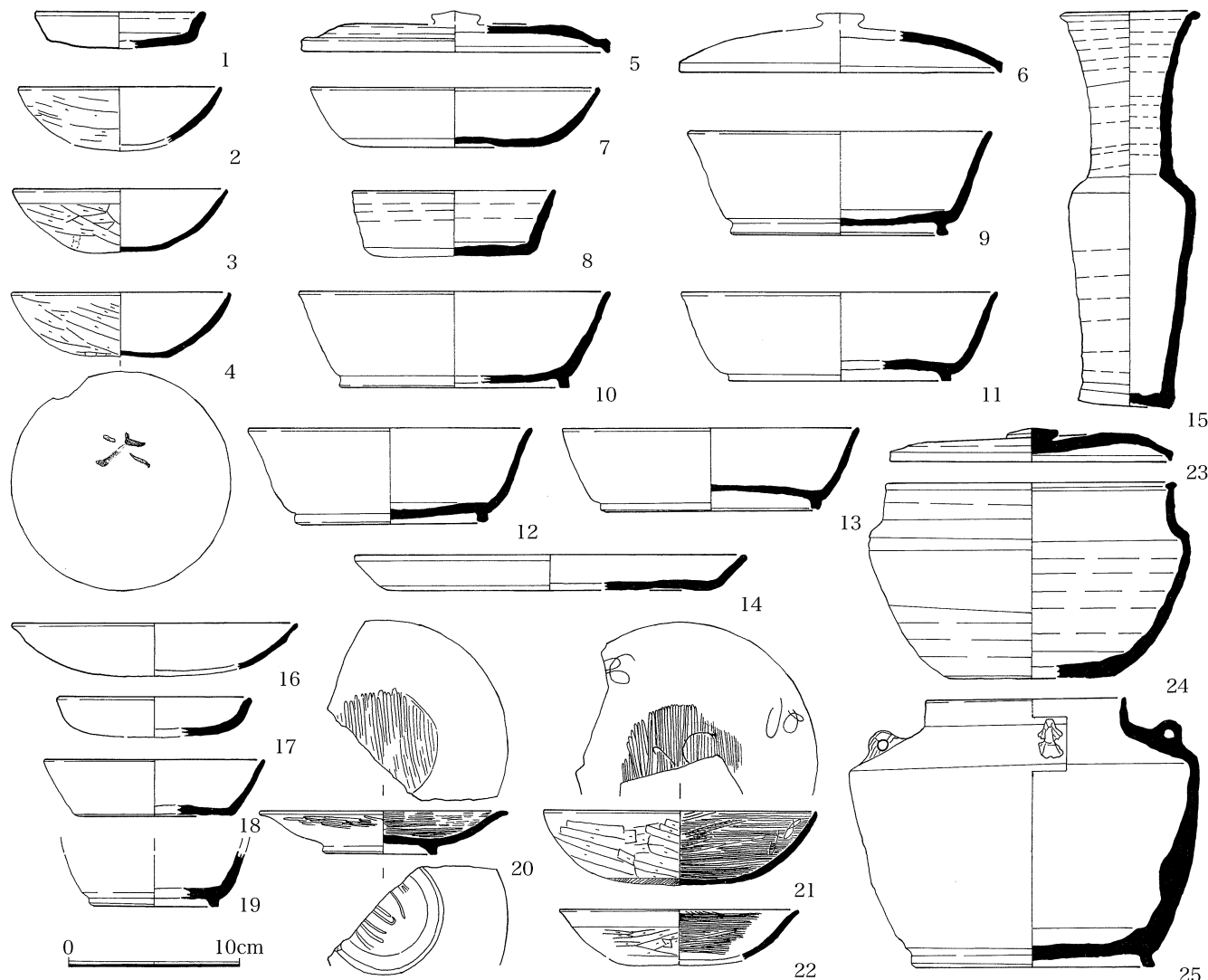
SD107からは、土師器杯蓋・杯A・杯B・皿A・皿B、ミニチュア高杯・鉢C・甕、須恵器杯蓋 (23)・杯A・B、皿・壺A・壺B・壺G・壺A蓋・壺X (24)・把手付壺 (25)・平瓶・横瓶・鉢A・鉢E・甕が出土している。23は頂部外面をロクロケズリで調整する。内面は非常に平滑で墨痕が残り、転用硯と思われる。25は外面に暗灰緑色の自然釉がかかる。底部内面にも釉の降下がみられ、蓋をしない状態で焼かれたことがわかる。

これらの土器は器形や調整から、SE506枠内とSD107出土のものは8世紀末、SE507枠内出土のものは9世紀前半に位置づけられる。(宮崎正裕・池田裕英)

V. 調査所見

条坊遺構 調査地の北端に想定できる四条大路に関する遺構は、今回の発掘区内では確認できなかった。

東四坊坊間東小路については、当発掘区の北約100

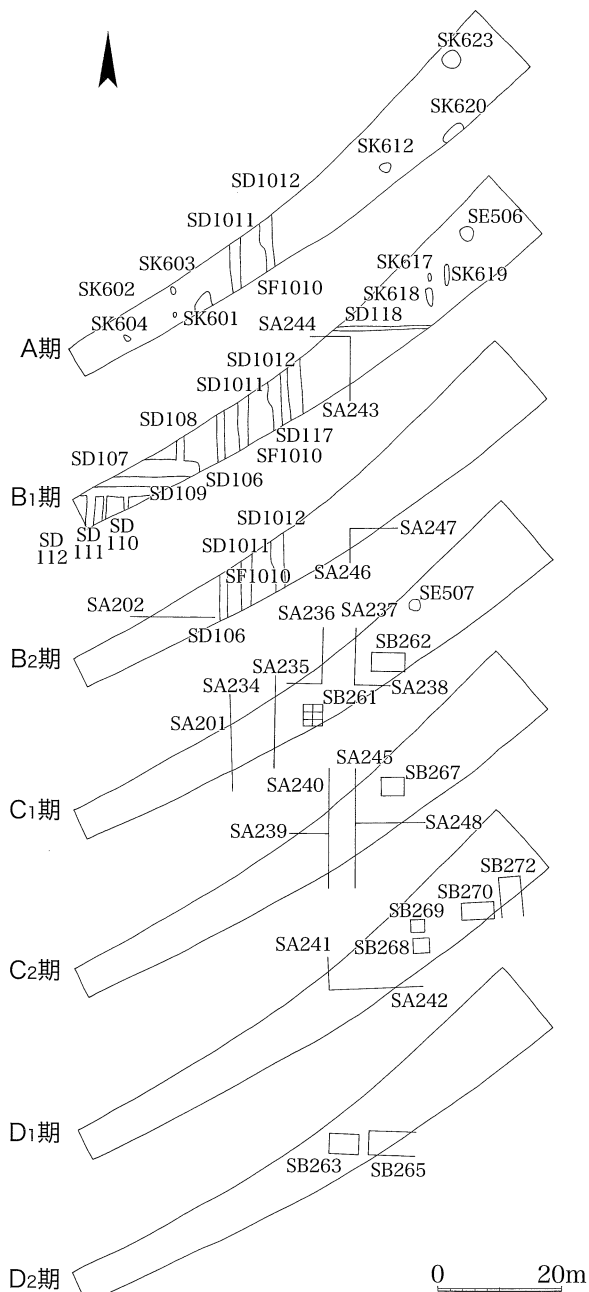


HJ第541次調査 SE506・507、SD107出土土器 (1/4)

mの左京四條四坊十二・十三坪間で実施したH J第335次調査でも検出している。この調査で得られた東四坊坊間東小路心の国土座標値はX = -147,031.0、Y = -16,589.0で、今回、検出した道路心と比較すると、国土座標北に対してN0°24'47" Wの振れをもつ。また、十六坪東端のH J第486次調査で検出している東四坊大路（S F 1601）の両側溝心心間の距離から導いた東四坊大路心と東四坊坊間東小路心の距離は、計算上約132.7mを測る。

坪内の様相と遺構変遷 今回検出した主要遺構の変遷をまとめると、遺構の重複関係や配置、遺物の年代観などから、以下のA～Dの4期に大きく分けられる。

A期 東四坊坊間東小路S F 1010の両側溝（S D 1011・1012）が掘られる。九坪内には土坑S K 601



H J 第541次調査 遺構変遷概念図 (1/1200)

～604が、十六坪内には土坑S K 612・620・623が点在する。奈良時代前半に相当するものと思われる。

B₁期 九坪内には南北溝S D 106や坪内を南北1/2で区画する東西溝S D 107・109が掘られる。十六坪内には南北溝S D 117や、坪内を北から1/4で区画する東西溝S D 118が掘られる。S D 118の南側には、S A 243・244が建てられる。さらに、坪の北端には井戸S E 506が掘られる。奈良時代後半に相当するものと思われる。

B₂期 九坪内はS D 107～112の区画溝が埋められ、東西溝S D 107の北端を踏襲する位置に東西塀S A 202が建てられる。十六坪内は西端の南北溝S D 117が埋められ、さらに一帯が整地される。奈良時代末～平安時代初頭に相当するものと思われる。

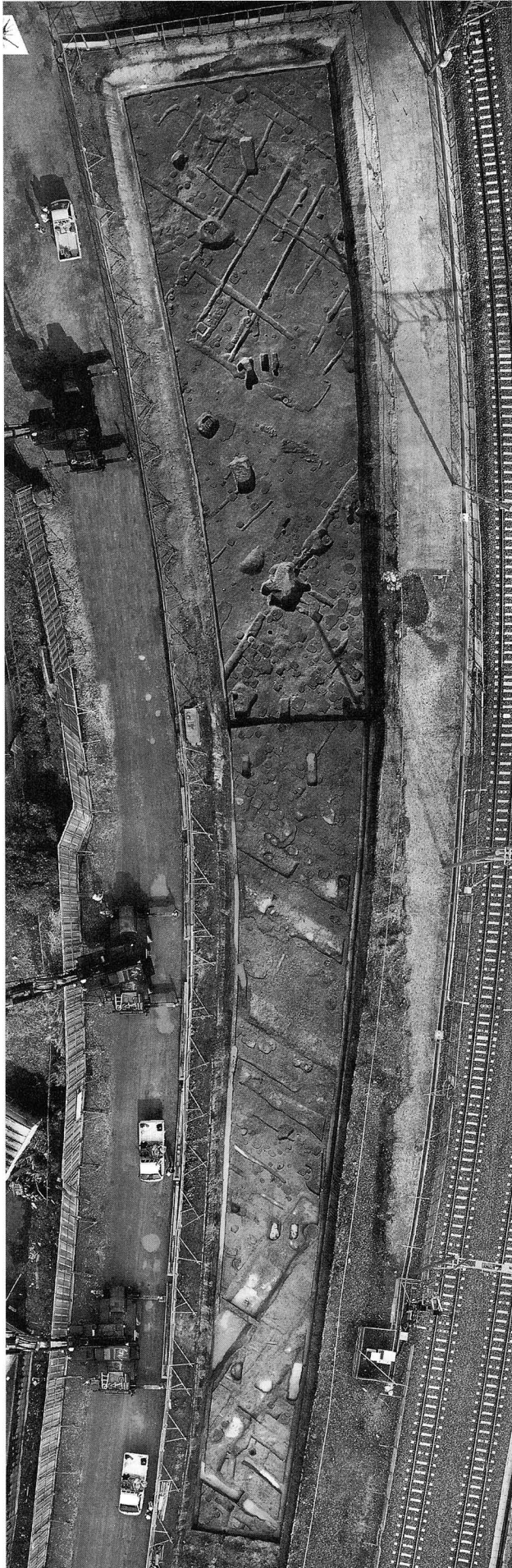
C₁期 東四坊坊間東小路の両側溝（S D 1011・1012）が廃絶し、路面には南北塀S A 234が建てられる。さらに、すぐ西側の九坪東端には南北塀S A 201が建てられる。南北塀S A 201とS A 234の間は、東四坊坊間東小路を踏襲した南北道路としての機能を保っていた可能性がある。十六坪内には東西棟建物S B 262と井戸S E 507を囲むように、南北塀S A 237と東西塀S A 238が、これらの西側の対称位置には南北塀S A 236と東西塀S A 235が、その南側にはS A 236と柱筋を揃えた南北棟建物S B 261が建てられる。S A 236とS A 237の間には南北方向の通路が想定できる。

C₂期 C₁期の南北塀S A 236・237、東西塀S A 235・238とS B 262をほぼ踏襲した位置に、南北塀S A 240・245と東西塀S A 239・248と東西棟建物S B 267が建てられる。S A 240とS A 245の間は、C₁期よりもさらに南に延びる南北通路となる。

D₁期 C₂期のS A 240の柱筋を踏襲した位置に、国土座標北で西に振れる南北塀S A 241が建てられ、南端で東西塀S A 242と繋がる。S A 241・242で区画された北東側に、建物の主軸がS A 241・242と同じ方位に振れるS B 268・269・270・272が建てられる。

D₂期 十六坪西端は塀で囲まれなくなり、D₁期のS A 242を踏襲した位置に、東西棟建物S B 263・265が南側柱筋を揃えて建てられる。

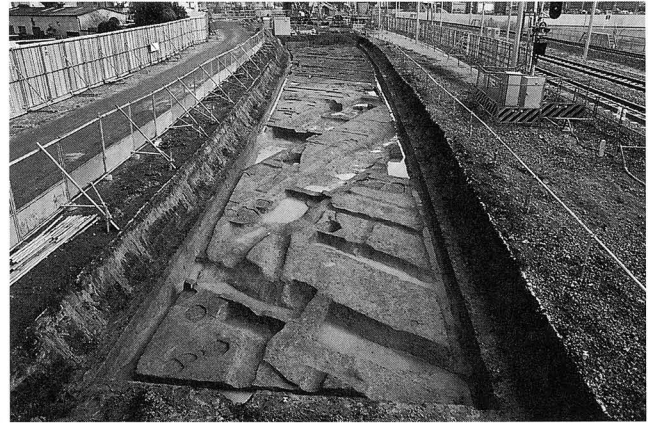
今回の調査成果をまとめると、奈良時代の様相は大きく2期に分けられる。九・十六坪内とも、奈良時代後半（B₁期）までは溝で区画され、奈良時代末（B₂期）になると、これらの溝を埋めて掘立柱塀で区画されている。また、東四坊坊間東小路の側溝が埋まる平城廃都後も十六坪内は掘立柱塀で区画され、掘立柱建物や井戸が所在することなどから、少なくとも平安時代前半までは利用され続けられたことが窺える。 (宮崎正裕)



HJ 第 541 次調査 空中写真（上が北東）



西発掘区全景（北東から）



西発掘区全景（南西から）



東発掘区全景（北から）



東発掘区全景（南西から）

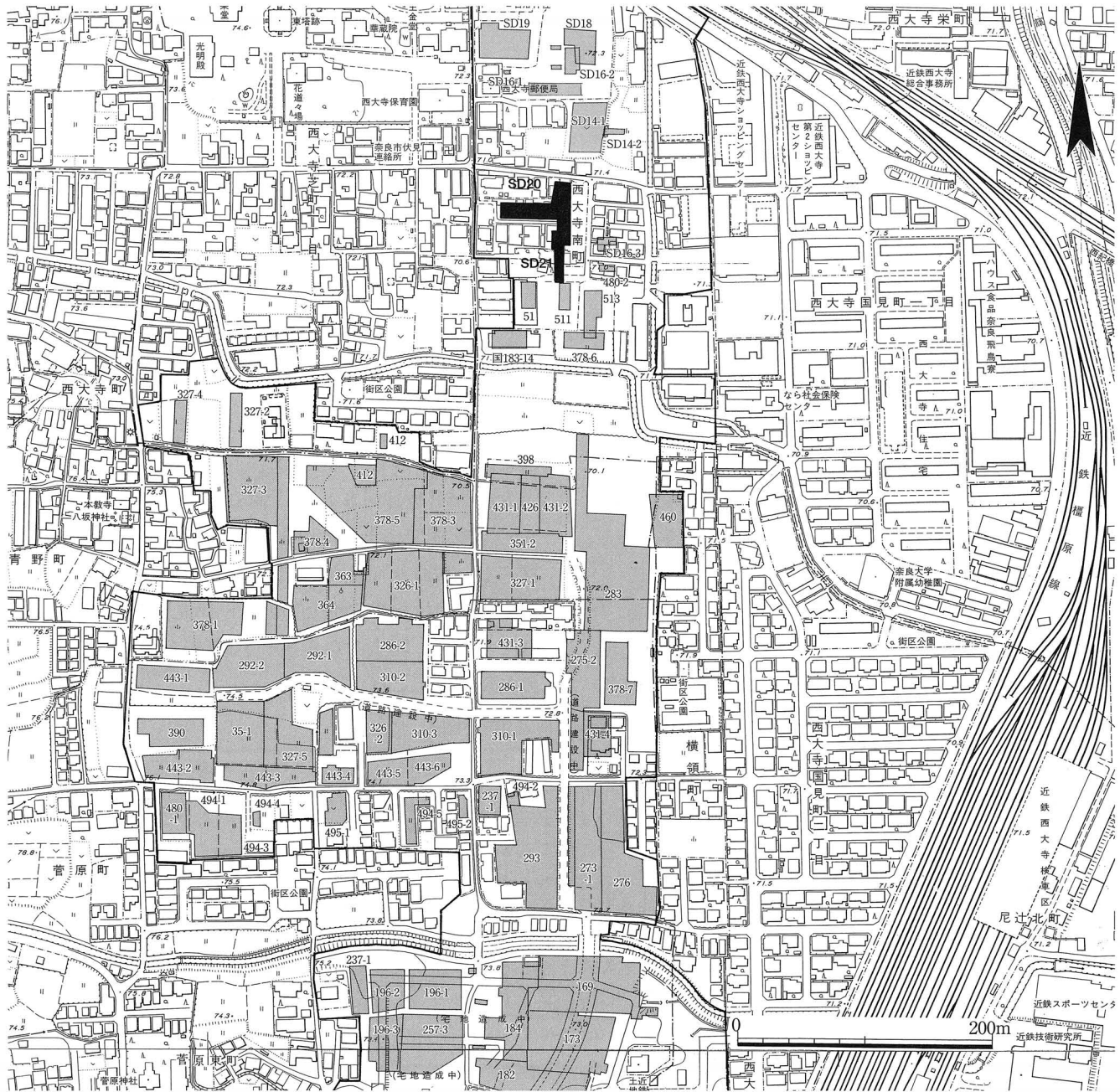
2. 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査

本調査は、奈良市が進めている近鉄西大寺駅南土地区画整理事業（総面積約30万㎡）について実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では昭和63年から事業地内の発掘調査を継続して実施している。平

成17年度は下表のとおり、2箇所で発掘調査を実施した。合計調査面積は1,520㎡であり、初年度からの総調査面積は108,099㎡になる。これらの調査は、平城京の条坊復原では西大寺旧境内及び一条南大路に該当してい

平成17年度近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

| 遺跡名 | 調査回数 | 事業名 | 調査地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査担当者 |
|------------------|-------|---------|--------------|----------------------|-------|-------|
| 西大寺旧境内 | S D20 | 臨時交付金事業 | 西大寺南町2405-1他 | 2005/6/15～9/14 | 1060㎡ | 安井 |
| 西大寺旧境内 ・一条南大路 | S D21 | 通常事業 | 西大寺南町2387-2他 | 2005/12/15～2006/3/13 | 460㎡ | 安井 |



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内の調査発掘区位置図 (1/5000)

(1) 西大寺旧境内の調査 第20次

I. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条三坊四坪の南西部にあたり、西大寺造営後は伽藍の東に隣接する寺地の一画となる。現況は宅地である。宅地化する前は水田で、坪の東側を画する西二坊大路と南側を画する一条南大路の想定地では遺存地割が認められた。

四坪内では、過去に2件の調査が実施されている。坪の北東部で実施された市SD第14調査では、奈良時代から平安時代初頭にかけての掘立柱建物・塀、溝、井戸、土坑と、西二坊大路の位置を踏襲する江戸時代に埋没した旧河道が確認された。また、坪の南東隅で実施された市SD第16-3次調査では、西二坊大路と一条南大路の位置を踏襲する江戸時代に埋没した旧河道が確認された。

今回の調査は、西大寺造営前の四坪内及び造営後の寺地内の様相を確認することを目的として実施した。

II. 基本層序

基本的には、造成土(厚さ0.3m)の下に水田耕土・床土層(厚さ0.2m)があり、その直下で青灰白色シルト・粘土あるいはシルト混砂の地山となる。この層の上面が奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構面で、標高は70.8~71.0mである。ただし、発掘区南東部では地山上面が約1m低く、水田耕土・床土層との間に鎌倉時代(13世紀)の土器片を含む灰色砂質シルト層がみられる。

III. 検出遺構

遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構には、奈良~平安時代中期の掘立柱建物3棟(SB31~33)、掘立柱列8条(SA34~41)、井戸2基(SE42・

43)、土坑2基(SK45・46)、平安時代末~鎌倉時代の井戸1基(SE44)・池状遺構1基(SX47)がある。各遺構の概要は、遺構一覧表に示す通りである。

奈良~平安時代中期の遺構 この時期の遺構は発掘区内に散在する。

SB31は南廂付き東西棟建物の南東隅部分とみられ、重複関係からSK45・46より古い。掘立柱列のうち、SA34・35・37~41は塀である。SA34は重複関係からSK45より新しい。SA35はSA34に接続する。SA36は柱穴の形状や大きさから、後述する平安時代末~鎌倉時代のSX47の掘削により西部分が破壊された南北棟建物の東側柱列の可能性はある。

SE42の井戸枠は2段分が残る。水溜の周囲に木炭や礫が敷かれている。枠内埋土から8世紀の土器・瓦類片が出土した。SE43の井戸枠は抜き取られている。重複関係から後述のSX47より古い。SE44の井戸枠は最下段のみ残る。

なお、SK45・46の埋土からは9世紀末~10世紀初頭の土器片が出土した。

平安時代末~鎌倉時代の遺構 この時期の遺構は発掘区の西辺部でみられる。

SE44は後述のSX47と同じ埋土で埋まる。埋土から12世紀前半の土器片が出土した。SX47は北寄りが高くなっており、西岸には導水路とみられる溝が接続する。廃絶後は多量の地山のシルト・粘土ブロックで埋め立てられる。埋土中から8~13世紀の土器片と8世紀の瓦片が出土した。

SD第20次調査 検出遺構一覧表

| 遺構番号 | 棟方向 | 規模(間) 桁行×梁行 | 桁行全長 (m) | 梁行全長 (m) | 柱間寸法(m) | | 備考 |
|------|-----|----------------|-------------|-------------|-------------|-------|--------------------------|
| | | | | | 桁行 | 梁行 | |
| SB31 | 東西 | 1以上×1以上 | 1.8以上 | 2.4以上 | 1.8 | 2.7 | 南廂(廂の出2.1m)、柱穴深さ0.1~0.2m |
| SB32 | 東西 | 3×1 | 5.4 | 3.6 | 1.8等間 | 3.6 | 柱穴深さ0.2m |
| SB33 | 東西 | 3×2 | 5.4 | 4.2 | 1.8等間 | 2.1等間 | 柱穴深さ0.2~0.5m |
| SA34 | 南北 | 5以上 | 9.0 | | 1.8等間 | | 柱穴深さ0.1~0.2m |
| SA35 | 東西 | 3以上 | 6.3 | | 2.1等間 | | 柱穴深さ0.1~0.2m |
| SA36 | 南北 | 3以上 | 6.6 | | 2.1-2.1-2.4 | | 柱穴深さ0.3~0.4m、柱痕跡 |
| SA37 | 南北 | 3 | 5.4 | | 1.8等間 | | 柱穴深さ0.1~0.2m |
| SA38 | 南北 | 2 | 3.3 | | 1.65等間 | | 柱穴深さ0.2~0.3m |
| SA39 | 東西 | 3 | 5.4 | | 1.8-2.1-1.5 | | 柱穴深さ0.1~0.2m |
| SA40 | 東西 | 2 | 3.3 | | 1.65等間 | | 柱穴深さ0.1~0.2m |
| SA41 | 東西 | 2 | 4.8 | | 2.4等間 | | 柱穴深さ0.1m |

| 遺構番号 | 掘形 | | | 井戸枠 | | 主な出土遺物 | 備考 |
|------|------|---------------|-------|------------|-----------|-------------|--------------|
| | 平面形 | 平面規模(m) | 深さ(m) | 構造 | 内法(m) | | |
| SE42 | 隅丸方形 | 東西2.0×南北1.7 | 0.90 | 方形横板組 | 1.08×1.08 | 奈良時代の土器片・瓦片 | 底部に曲物を利用した水溜 |
| SE43 | 隅丸方形 | 東西1.2以上×南北2.0 | 0.30 | (抜き取られている) | | なし | 底部に曲物を利用した水溜 |
| SE44 | 円 | 径0.8 | 0.70 | 曲物積上 | 径0.45 | 平安時代末の土器片 | |
| SK45 | 隅丸方形 | 東西1.5以上×南北2.1 | 0.15 | | | 平安時代中期の土器片 | |
| SK46 | 隅丸方形 | 東西1.5×南北2.8 | 0.20 | | | 平安時代中期の土器片 | |
| SP47 | 隅丸方形 | 東西6.0×南北9.5 | 0.40 | | | 平安・鎌倉時代の土器片 | |



発掘区全景（東から）



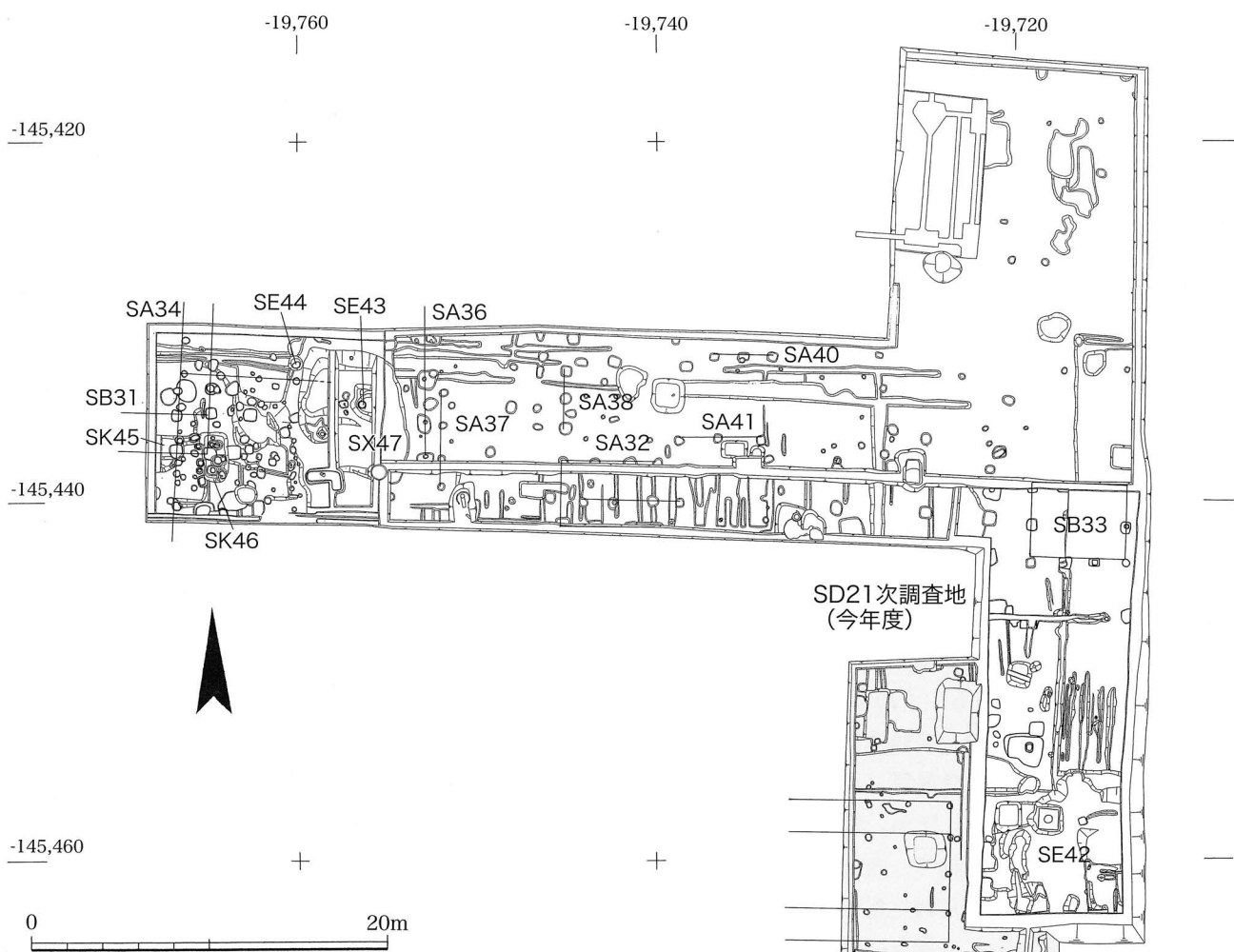
発掘区南東部（北から）



発掘区西端部（南西から）



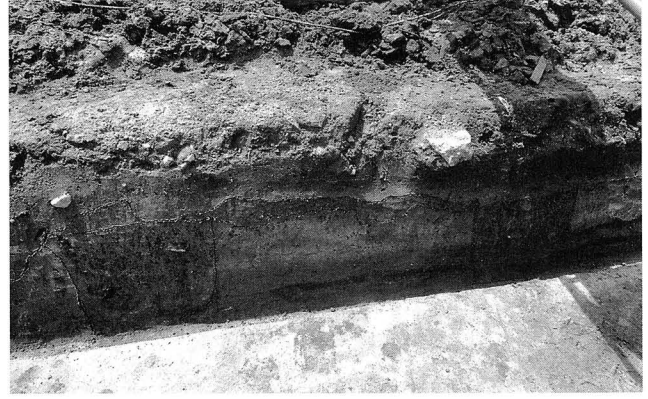
発掘区中央部（南西から）



SD 第20次調査 発掘区遺構平面図 (1/400)



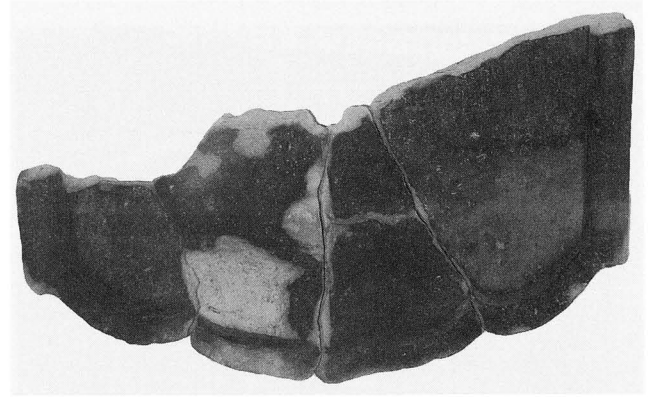
井戸 S E 42 (北から)



建物 S B 33 北側柱断面 (北から)



井戸 S E 43 (西から)



井戸 S E 42 出土隅木蓋瓦

IV. 出土遺物

土器が遺物整理箱18箱分、瓦類が同2箱分、木製品が10点出土した。

奈良～平安時代中期 土器には、柱穴や井戸 S E 42 の埋土から出土した8世紀の土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・高杯・甕・壺、鎌倉時代の池状遺構 S X 47 の埋土から出土した9世紀末～10世紀初頭の灰釉陶器碗、緑釉陶器皿、土坑 S K 45・46 の埋土から出土した10世紀後半～11世紀初頭の土師器皿がある。

瓦類は、主に S E 42 や S X 47 の埋土から出土した。

S E 42 から出土した瓦類には、丸・平瓦と軒丸瓦 6236 型式 A 種 4 点と隅木蓋瓦、塼がある。隅木蓋瓦 (写真) は平蓋形で前面を花卉状につくり、周縁の 3cm 内側に幅 1 cm、深さ 0.7cm の溝が巡る。幅 50cm、残存長約 28cm。厚さは周縁部で 4cm、中央部で 6cm と上面が盛り上がり、緩やかな甲盛りとなっている。上面の中軸線上には刻線があり、前端から 21cm の位置に一辺 1.8cm の方形の釘孔がある。下面は平坦である。接合しない隅部分の破片があり、2 個体ある。

他に、発掘区南東部の灰色砂質シルト層からは方形の施釉瓦片が出土した。厚さ 0.9cm。濃緑釉で三葉文の輪郭を、淡緑釉で周縁の線を描く。西大寺塔の三彩極先瓦類似した構図をもち、塔所用極先瓦である可能性がある。また、奈良時代の柱穴から軒平瓦 6646 型式 D 種 1 点が出土している。

平安時代末～鎌倉時代 井戸 S E 44 の埋土から出土した 12 世紀前半の土師器皿、瓦器碗、S X 47 の埋土から出土した 13 世紀前半の土師器皿・羽釜や瓦器碗・小碗がある。

V. まとめ

今回の発掘調査の成果は以下の通りである。

- ① 奈良～平安時代の井戸 SE42 から出土した西大寺創建時の軒丸瓦 6236A や隅木蓋瓦は 9 世紀中頃から 10 世紀にかけての罹災によって廃絶した西大寺伽藍の建物に伴うものとみられ、平安時代における西大寺の急速な衰退がうかがえる。
- ② 奈良時代から平安時代中期にかけての遺構は宅地の様相を示し、重複関係から少なくとも 3 時期の変遷がある。北隣接地の市 S D 14 次調査地でも同様であることから、調査地付近ではこの時期に広く宅地として利用されたと考えられる。
- ③ 平安時代末から鎌倉時代については、発掘区の西辺部で井戸 S E 44 や池状遺構 S X 47 を確認したことや、これらの埋土から碗・皿といった日用の土器が出土したことから、西大寺の伽藍に近い調査地の西寄りが居住地であったことがうかがえる。S X 47 の性格については、庭の池や耕地用の貯水池の可能性はあるが、本調査の成果だけでは確定しづらい。(安井宣也)

1) 奈良国立文化財研究所 「昭和53年度 平城宮跡発掘調査部 発掘調査概報」 1979

(2) 西大寺旧境内・平城京跡（一条南大路）の調査 第21次

I. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では西大寺造営後に寺地の一面となる右京一条三坊四坪の南辺中央部及び一条南大路にあたる。現況は宅地である。宅地化する前は水田で、四坪の東側を画する西二坊大路与南側を画する一条南大路の遺存地割が認められた。

調査地周辺では、過去に5件の調査が実施されている。北隣接地で今年度実施された市SD第20次調査では、奈良～平安時代中期の宅地に関連する遺構や平安時代末～鎌倉時代の井戸、池状遺構が確認された。西二坊大路的遺存地割にあたる箇所で行われた市SD第16-3次調査では、江戸時代までに埋没した旧流路が確認された。また、一条南大路の遺存地割にあたる箇所で行われた市HJ第480-2次調査では江戸時代までに埋没した旧流路が、市HJ第513次調査では遺存地割の南端部にあたる箇所の地山が北落ちの急斜面に改変されていることが、それぞれ確認されている。

今回の調査は、四坪の南辺中央部及び一条南大路の様相の把握を目的として実施した。

II. 基本層序

発掘区北半部では、北寄りにおいては造成土（厚さ0.2m）、オリーブ黒色砂質シルトの水田耕土（厚さ0.1m）、灰色シルト質砂の水田床土（厚さ0.1m）の下で青灰白色のシルト・粘土やシルト混砂の地山となり、南寄りにおいては地山上面が切土により約0.5m低くなり、水田床土層との間に奈良時代や鎌倉時代の遺物を含む灰色砂質シルト層がみられる。奈良時代の遺構が存する面は地山上面で、標高は概ね70.8mである。

発掘区南半部では、基本的に造成土（厚さ0.6～1.7m）、水田耕土（厚さ0.2m）の下に江戸時代の水田造成に伴い形成された層（厚さ1～1.2m）があり、その下で後述する室町時代以前の切通し状遺構SD49の埋土となる。江戸時代の水田造成に伴う層は、南寄りが地山のシルト・粘土のブロックからなる盛土、北寄りが暗灰色シルト・粘土の水田耕土（厚さ0.1～0.2m）と地山のシルト・粘土のブロックからなる水田床土（厚さ0.1～0.2m）の互層で、いずれも土器片を含む。

III. 検出遺構

四坪内にあたる発掘区北半部で奈良～平安時代前半とみられる掘立柱建物SB48を、一条南大路にあたる同南半部で室町時代以前の旧流路SD49を検出した。

SB48 桁行2間（4.5m）以上、梁間2間（7.8m）の東西棟南北廂付建物で、発掘区外西に続く。柱間寸法

は、桁行2.25m等間、梁間2.1m等間、廂の出1.8m。

SD49 幅13～14mの東西方向の旧流路。兩岸沿いは江戸時代の水田造成で改変されており、周辺の遺構面から1mほど低くなっている。

埋土は、南寄りが寄州を形成する砂礫層、北寄りが寄州と北岸の間にできた凹地内に堆積した暗灰色や褐色の腐植混シルト・粘土層やシルト質砂層となる。後者から8世紀の土器・瓦片、平安時代以降の瓦片や14～16世紀の土器片・木製品が出土した。

なお、埋土を最深部で約2m掘下げたが、底面は確認できなかった。

IV. 出土遺物

土器類が遺物整理箱9箱分、瓦類が同6箱分、木製品が7点出土した。

土器類には、奈良及び鎌倉・室町・江戸の各時代のものがある。残存状態は概してよくない。奈良時代の土器には、発掘区北半部の遺物包含層である灰色砂質シルト層や旧流路SD49の埋土から出土した土師器甕・高杯や須恵器甕・壺・杯等がある。鎌倉・室町時代の土器には、発掘区北半部の遺物包含層である灰色砂質シルト層から出土した13世紀の土師器皿や瓦器椀、SD49の埋土から出土した14～16世紀の土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、青磁椀等がある。江戸時代の土器にはSD49の埋土から出土した伊万里焼椀等の陶磁器がある。

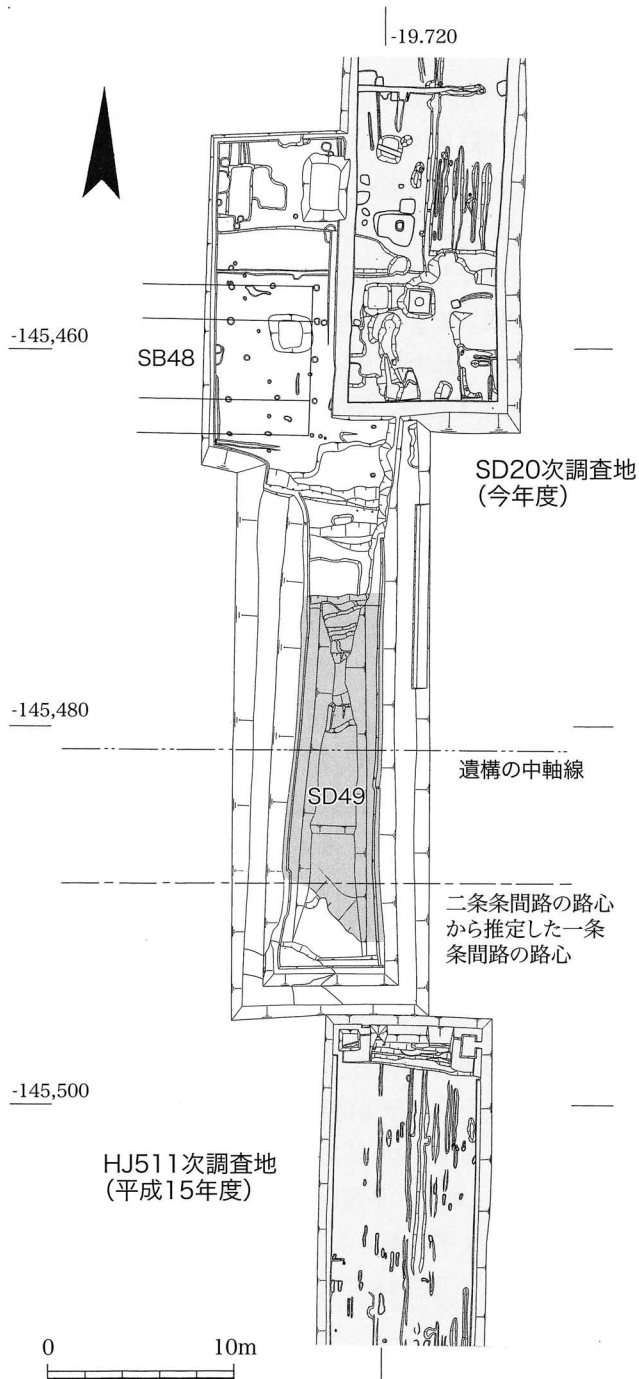
瓦類には、SD49の埋土から出土した奈良時代の軒丸瓦6685A・丸瓦・平瓦、平安時代以降の巴紋軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。

木製品には、SD49の埋土から出土した下駄や漆器椀等がある。

V. 調査所見

四坪の南辺部は、奈良～平安時代前半とみられる掘立柱建物SB48を確認したことから、宅地の一面となっていたことがうかがえる。

一条南大路の想定地で確認された室町時代以前の旧流路SD49は、一条南大路の切通し内に水が流れたものなのか、後に掘り直したものなのか、現状では特定できない。ただし、この遺構の中軸線の位置は、南約260mの市HJ第283次調査で確認された二条条間路の路心をもとに推定した一条南大路の路心よりも約7m北である。右京一条では、発掘調査で把握できた一条条間路及び一条条間北小路の路心の位置が推定される条坊計画心より少し北にずれることがわかっている。このことを踏まえると、この旧流路は一条南大路の位置を踏襲していると



SD 第 21 次調査 発掘区遺構平面図 (1/400)

考えられ、一条南大路が条坊計画心より約7m北に路心をずらして施工されていた可能性がある。

なお、SD49については、

- ① 調査地の近くを秋篠川の支流である外大門川が北西から南東に流れており、この遺構の西延長上が川筋にあたる。
- ② 調査地南方の外大門川沿いで行われた調整池の掘削工事の際に、現地表から約7m下で室町時代の14～16世紀の土器や木製品を含む旧河川に伴う砂礫層が確認されている。

の上記2点を勘案すれば、室町時代の外大門川の分水路であった可能性が高い。

(安井宣也)



発掘区全景 (北から)



発掘区全景 (南から)



発掘区南半部西壁 (南東から)



SD 49 室町時代遺物出土状態 (南西から)

3. 平城京跡（東四坊大路）・油坂遺跡の調査 第529次

| | | | |
|------|----------------------------|-------|-----------------|
| 事業名 | 大和都市計画街路事業（芝辻大森線） | 調査期間 | 平成17年5月9日～6月14日 |
| 届出者名 | 奈良市長 | 調査面積 | 212㎡ |
| 調査地 | 奈良市大宮町二丁目124-5、136-4、82-67 | 調査担当者 | 秋山成人・久保清子・山前智敬 |

I はじめに

本調査は、平城京東四坊大路跡に沿って計画される都市計画街路の事前調査である。過去の調査では、東四坊大路及び同西側溝、三条条間南小路南側溝を確認している、その他に弥生時代末から古墳時代初頭の井戸・土坑・溝、縄文時代晩期の土坑等も確認している。¹⁾ 今回の調査では、現在の三条通りの北側に北に向かって第1・第2発掘区、さらに北へ150mのところにはHJ第502次調査地の北側で第3発掘区を設定し、東四坊大路および同側溝、三条大路北側溝の確認と、縄文・弥生・古墳時代の遺跡の様相を明らかにすることを目的として実施した。

II 基本層序

第1発掘区・第2発掘区の層序は、上から造成土、黒灰色土（旧耕土）、黒灰色土（旧耕土）、茶灰色砂質土、茶灰色粘砂、黄灰色粘質土と続き、黄褐色粘土（地山）の順となる。検出遺構面は、2面ある。この発掘区では、鎌倉・室町時代の遺構面が黄灰色粘質土上面（標高64.1m）で、奈良時代の遺構面が黄褐色粘土上面（標高64.0m）となる。

第3発掘区の層序は、上から造成土、黒灰色土（旧耕土）、黄褐色粘質土、褐色粘土と続き、黄褐色砂質土（地山）の順となる。検出遺構面は、2面ある。この発掘区では、奈良時代の遺構面が褐色粘土上面（標高64.6m）で、黄褐色砂質土上面（標高64.4m）が弥生時代以前の遺構面となる。

III 検出遺構

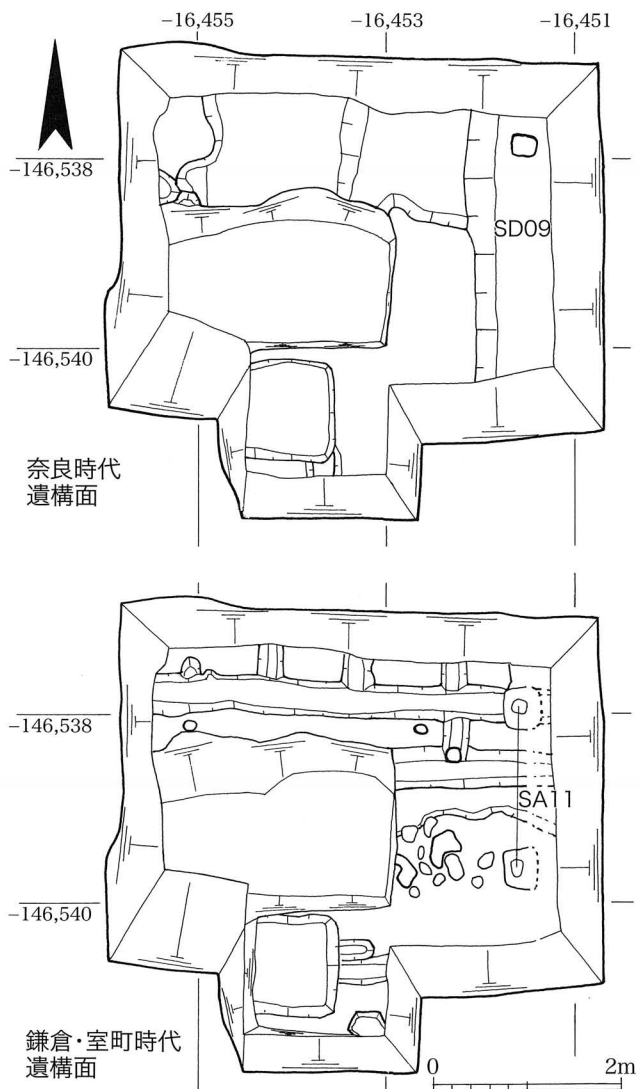
弥生時代以前の土坑6基（SK01～06）、弥生時代末から古墳時代初めの溝1条（SD07）を第3発掘区で検出。奈良時代の東四坊大路東側溝（SD09）西肩部分を第1・第2発掘区で検出。西側溝（SD10）を第3発掘区で検出。鎌倉・室町時代の掘立柱列1条（SA11）を第1発掘区で検出。各遺構の概要は、検出遺構一覧表にまとめた。

IV 出土遺物

遺物整理箱6箱分が出土した。弥生土器甕、庄内式土器甕・小型器台²⁾、サヌカイト製石鏃、石核、剥片が第3発掘区から出土。奈良時代の土器器皿・須恵器杯、丸瓦、平瓦、刻印平瓦、塼が第1～3発掘区から出土。平安時代の白磁椀、鎌倉時代の瓦器椀、室町時代の青磁椀、土器器羽釜、時期不明の砥石、鉄滓が第1・2発掘区から出土。

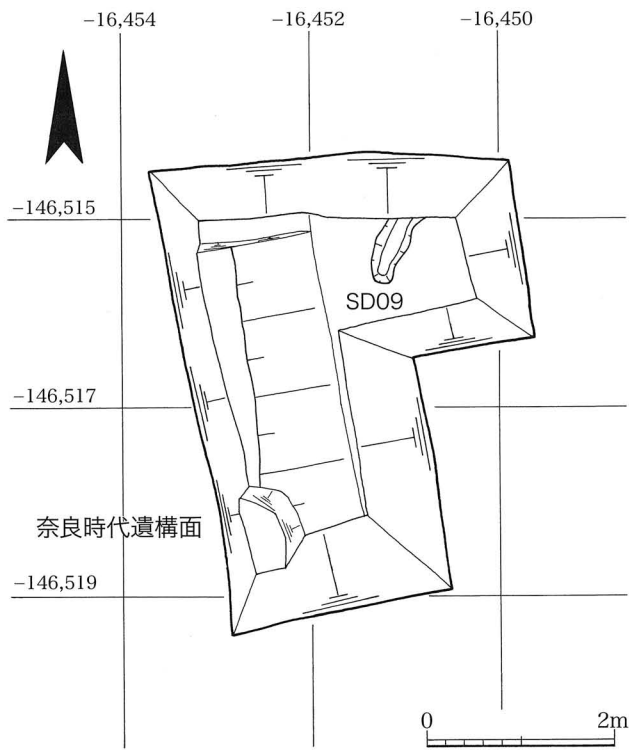


HJ第529調査 発掘区位置図 (1/5000)

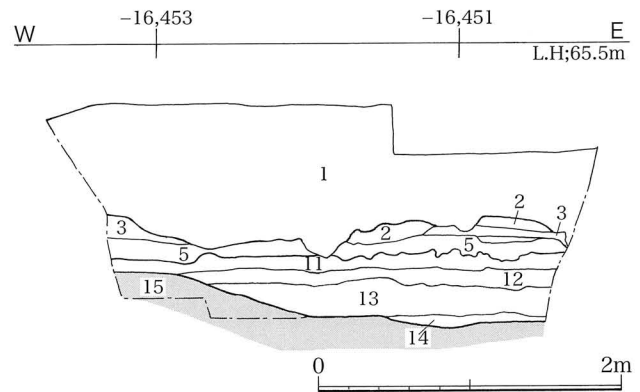
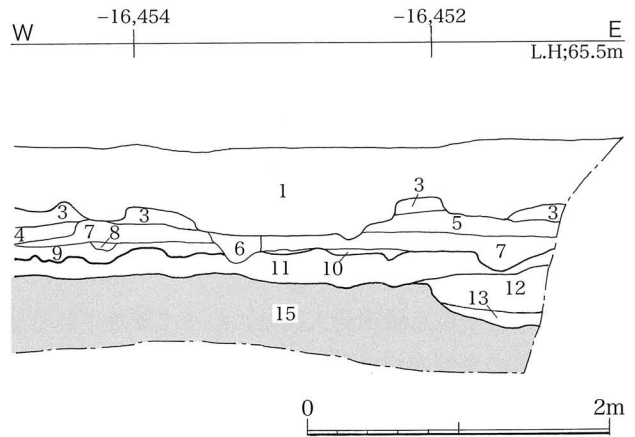


HJ第529次調査 第1発掘区遺構平面図 (1/80)

(上) 奈良時代遺構面・(下) 鎌倉・室町時代遺構面



H J 第 529 次調査 第 2 発掘区遺構平面図 (1/80・奈良時代遺構面)



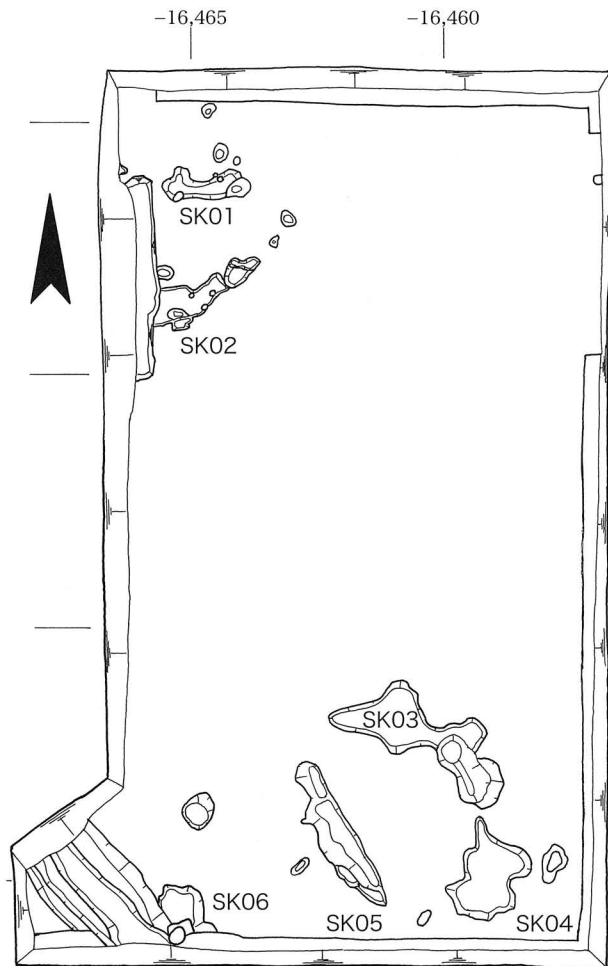
- | | | | |
|-------------|----------|-----------------------------|---------------|
| 1 造成土 | 5 茶灰色砂質土 | 9 灰色土 | 13 灰褐色砂質土 |
| 2 黄茶色土 (耕土) | 6 灰色粘砂 | 10 灰色砂質土 | 14 灰色砂質土 |
| 3 黒灰色土 (耕土) | 7 茶灰色粘砂 | 11 黄灰色粘質土 | 15 黄褐色粘土 (地山) |
| 4 淡灰色土 | 8 灰色粘土 | 12 褐灰色粘質土 (12~14 S D 09 埋土) | |

H J 第 529 次調査 第 1 発掘区北壁土層断面図(上)・第 2 発掘区北壁土層断面図(下) (1/50)

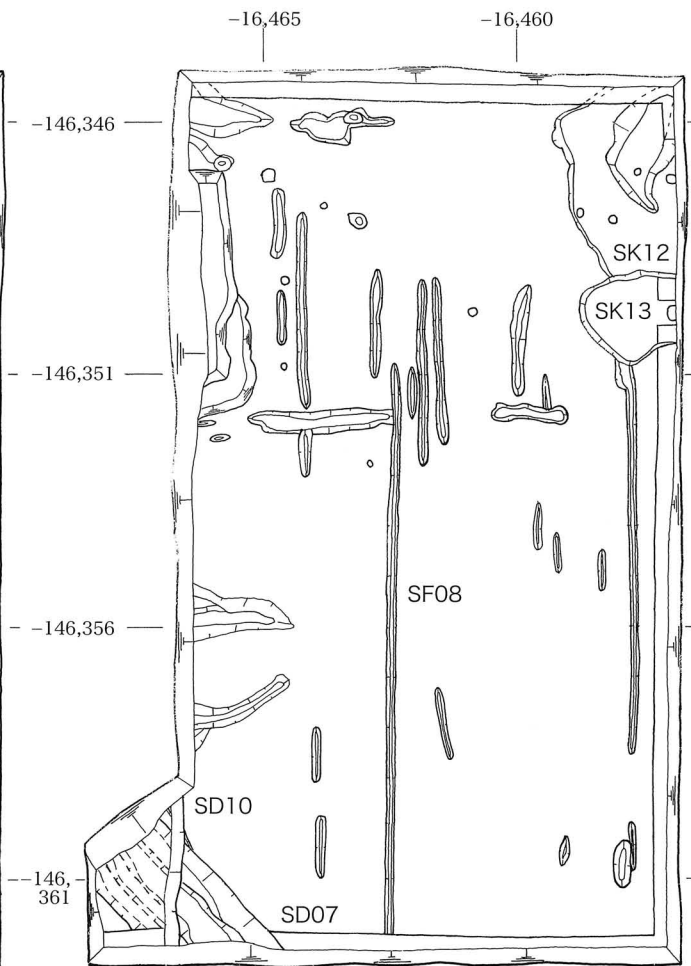
H J 第 529 次調査 検出遺構一覧表

| 遺構番号 | 発掘区番号 | 棟方向 | 規模 | 桁行全長 | 梁行全長 | 柱間寸法 m | | 備考 |
|--------|---------|-----|-------------|---------|------|--------|----|------------------------------|
| | | | 桁行(間)×梁行(間) | m | m | 桁行 | 梁行 | |
| S A 11 | 第 3 発掘区 | 南北 | 1 以上 | 1.65 以上 | | 1.65 | | 柱穴から 13 世紀末から 14 世紀の土師器羽釜が出土 |

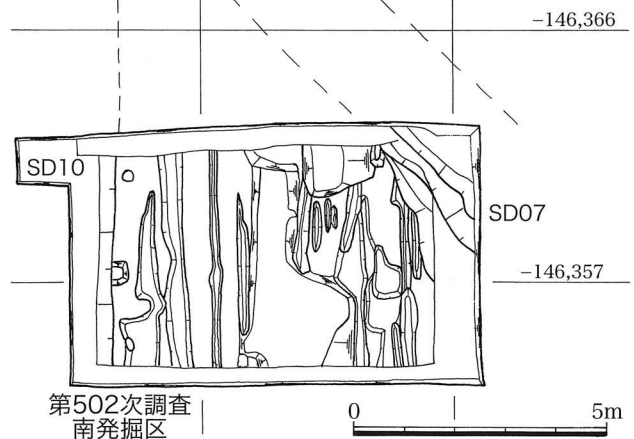
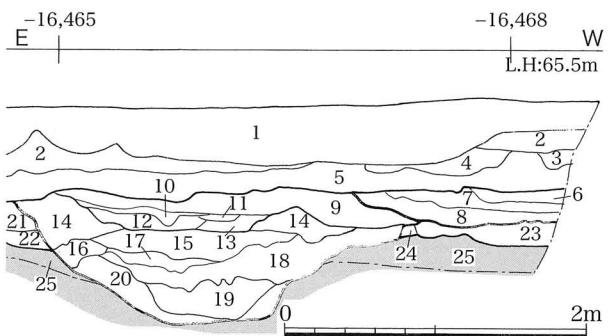
| 遺構番号 | 発掘区番号 | 掘形 | | | 主な出土遺物 | 備考 |
|------|---------|-----|---------------------|--------|---------------------------------|--|
| | | 平面形 | 平面規模 (m) | 深さ (m) | | |
| SK01 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 0.4×東西 1.6 | 0.6 | なし | 埋土は暗黄褐色粘砂 |
| SK02 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 0.5×東西 1.1 | 0.3 | なし | 埋土は暗黄褐色粘砂 |
| SK03 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 1.4~0.4×東西 2.9 | 0.8 | なし | 埋土は暗黄褐色粘砂 |
| SK04 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 1.6×東西 1.4~0.9 | 0.9 | なし | 埋土は暗黄褐色粘砂 |
| SK05 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 2.1×東西 0.7 | 0.2 | なし | 埋土は暗黄褐色粘砂 |
| SK06 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 0.9×東西 0.9 | 0.1 | なし | 埋土は暗黄褐色粘砂 |
| SD07 | 第 3 発掘区 | 斜行溝 | 長さ 3.6 以上×幅 2.7 | 0.9 | 弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器 | 重複関係から溝 SD10 より古い |
| SF08 | 第 3 発掘区 | | 長さ 17 以上×幅 9.5 以上 | | 路面上に南北方向の細い溝が数条みられその埋土から須恵器小片出土 | 路面舗装は認められず |
| SD09 | 第 1 発掘区 | 南北溝 | 南北 2.9 以上×幅 0.9 以上 | 0.6 | 奈良時代の土師器小片・須恵器小片出土 | 溝西肩の旧国土地標は X=-146,537.48 Y=-16,452.10 |
| SD09 | 第 2 発掘区 | 南北溝 | 南北 3.3 以上×幅 2.5 以上 | 0.4 | 奈良時代の土師器小片・須恵器小片出土 | 溝西肩の旧国土地標は X=-146,515.00 Y=-16,452.85 |
| SD10 | 第 3 発掘区 | 南北溝 | 南北 3 以上 幅 1.7 | 0.3 | 奈良時代の土師器・須恵器出土 | 溝東肩の旧国土地標は X=-146,362.50 Y=-16,466.93 |
| SK12 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 3.5 以上×東西 2.2 以上 | 0.4 | なし | 埋土は上層暗褐色土 下層淡褐色砂質土 |
| SK13 | 第 3 発掘区 | 不整形 | 南北 1.8×東西 1.9 以上 | 0.2 | 焼土塊 炭 | 埋土は暗褐色土 |



弥生時代以前遺構面



奈良時代遺構面



第502次調査
南発掘区

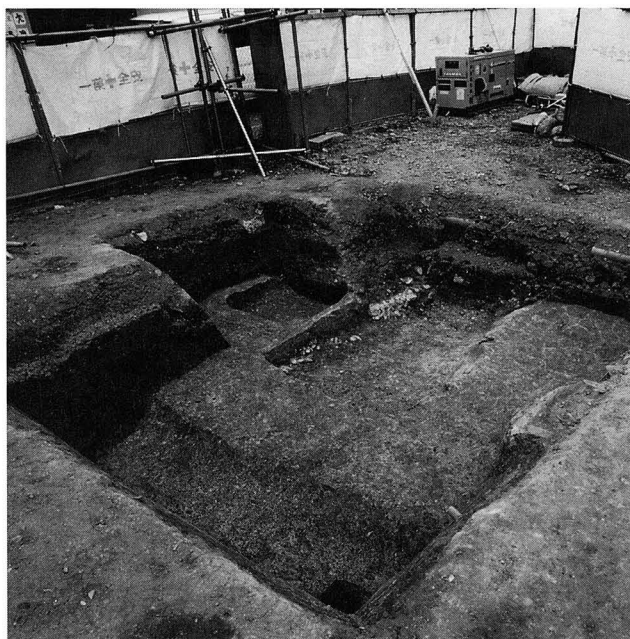
- | | | | |
|----------------------------|-----------|-----------|------------|
| 1 造成土 | 7 灰褐色粘質土 | 13 灰色粘砂 | 20 淡灰色細砂 |
| 2 黒灰色土 (耕土) | 8 茶灰色粘質土 | 14 黄灰色砂 | 21 暗灰褐色粘土 |
| 3 黄灰褐色砂質土 | 9 黄灰褐色砂質土 | 15 灰褐色粘砂 | と茶灰色砂の混合土 |
| 4 暗灰色粘砂 | 10 灰色粗砂 | 16 淡灰色粘砂 | 22 暗灰褐色粘土 |
| 5 黄褐色粘質土 | 11 黄灰色粘砂 | 17 暗灰色粘砂 | 23 暗褐色灰色粘土 |
| 6 褐色粘質土 | 12 灰色粘土 | 18 黒灰色粘土 | 24 褐色粘土 |
| (6~8 SD 10埋土 9~20 SD 07埋土) | 19 青灰色粘砂 | 25 黄褐色砂質土 | |

また、凹面に刻印された『六人』銘の平瓦が、第2発掘区遺物包含層（黄灰色粘質土）から1点出土した。この刻印は、恭仁宮跡出土のK J 05B 型式³⁾と同範とみられる。

V 調査所見

今回の調査では、東四坊大路東側溝（S D09）、西側溝（S D10）を確認したが、三条大路については、北側溝を第1発掘区内に想定していたが、確認できなかった。また、第3発掘区では、弥生時代末から古墳時代初めの溝（S D07）を検出しており、H J 第502次調査発掘区北東隅で検出した溝⁴⁾に続くと考えられる。近接するH J 第515次調査でも同時期の井戸・土坑・溝⁵⁾を検出しており、弥生時代末から古墳時代初めの遺跡の広がりがかがえる。（秋山成人・久保清子・山前智敬）

- 1) 奈良市教育委員会「油坂遺跡・平城京跡（左京三条四坊十二坪・東四坊大路）の調査第461・465・479次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成13年度』2004
- 2) 財団法人大阪府文化財センター『古式土師器の年代学』2006
- 3) 京都府教育委員会「第六章出土遺物2瓦」『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』2000
- 4) 奈良市教育委員会「油坂遺跡・平城京跡（東四坊大路）の調査第502次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』2006
- 5) 奈良市教育委員会「平城京跡（東四坊大路）の調査第515次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成16年度』2007



第1発掘区 奈良時代遺構面全景（北東から）



第2発掘区 奈良時代遺構面全景（北から）



第3発掘区 溝SD07（南東から）



第3発掘区 溝SD10（南から）



第3発掘区 奈良時代遺構面全景（南から）

4. 平城京跡（左京四条三坊六坪）の調査 第530次

| | | | |
|------|-------------------|-------|-----------------|
| 事業名 | 宅地造成 | 調査期間 | 平成17年5月9日～5月17日 |
| 届出者名 | (株)オークホーム (株)栗実住宅 | 調査面積 | 105㎡ |
| 調査地 | 奈良市三条桧町161-1他 | 調査担当者 | 池田裕英・松浦五輪美・武田和哉 |

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条三坊六坪のほぼ中央部にあたる。この六坪では平成8年度に市HJ第355次調査を行っており、坪内を1/3に区画する堀を検出し、奈良時代中頃から後半にかけて坪が分割して使用されていたことがわかっている¹⁾。

本調査は、六坪内の様相を明らかにすることを目的に、敷地の南半部に東西2箇所の発掘区を設定して行った。

II 基本層序

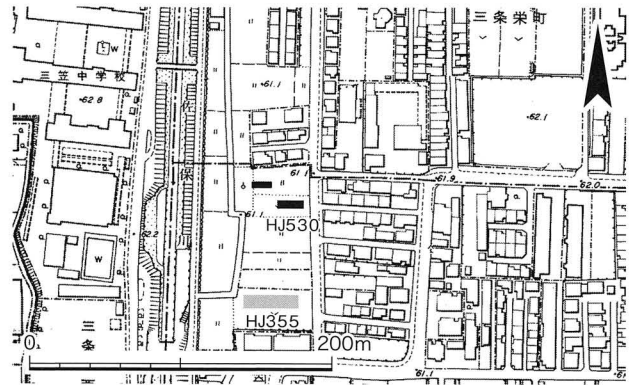
東発掘区 層序は上から造成土、黒灰色土（旧耕土）、灰褐色砂質土、灰褐色土、灰褐色粘質土と続き、現地表下約1.5mで茶黄色土の地山にいたる。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は60.5mである。

西発掘区 層序は上から造成土、暗褐色土（旧耕土）、灰褐色土、茶褐色土、茶灰褐色土、茶灰色砂質土、茶灰褐色粘質土、茶灰色粘質土、暗灰色粘土、暗茶褐色土と続き、現地表下約1.4mで灰緑色粘土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。地山上面の標高は59.8mである。

III 検出遺構

東発掘区 検出遺構には土坑（SK01）、井戸（SE01）がある。SK01は東西4.9m、南北1.5m、深さ0.3mである。SE01は発掘区東南隅で検出し、東西0.8m以上、南北1.5m以上、深さ0.5m以上である。枳材の隅柱を検出したが、発掘区を拡張できず、規模や構造は不明である。両遺構とも奈良時代の遺物が出土したが、詳細な時期は不明である。

西発掘区 土坑（SK02）と小穴（P1）を検出した。SK02は東西1.3m、南北1.5m以上、深さ0.5mである。



HJ第530次調査 発掘区位置図 (1/5000)

奈良時代中頃から後半と考えられる土器が出土した。P1は径0.15～0.2mの平面円形で、深さ0.1mである。

IV 出土遺物

両発掘区から遺物整理箱2箱分の遺物が出土した。出土遺物には弥生土器、古墳時代の土師器、奈良時代の須恵器、土師器、瓦、塼などがある。

V 調査所見

六坪のほぼ中央部の調査を行ったが、建物や柱列などの遺構は検出できなかった。 (池田裕英)

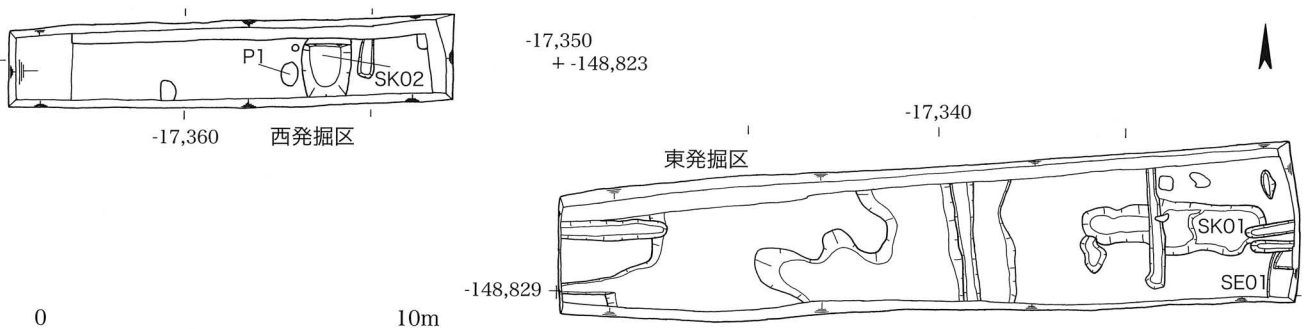
1) 「平城京左京四条三坊六坪の調査第355次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成8年度 1997



東発掘区全景 (東から)



西発掘区全景 (西から)



HJ第530次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)

5. 平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡の調査 第531次

| | | | |
|------|------------------|-------|------------------|
| 事業名 | 共同住宅建設 | 調査期間 | 平成17年5月16日～7月21日 |
| 届出者名 | 個人 | 調査面積 | 372㎡ |
| 調査地 | 奈良市今小路町7-1、8-1番地 | 調査担当者 | 中島和彦・武田和哉 |

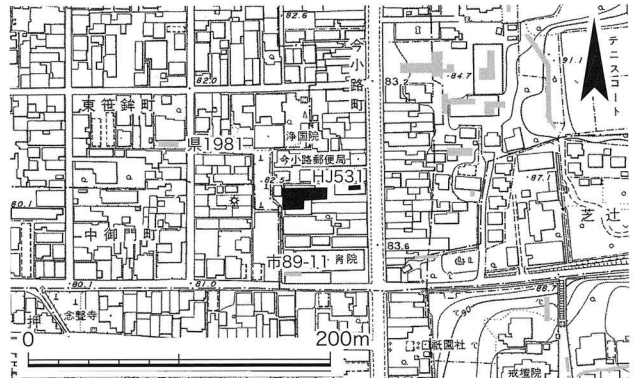
I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京二条七坊十五坪の中央部の東寄りにあたり、東七坊大路の西隣にある。今小路の名は平安時代後半から「今小路郷」として史料に現れる。調査地の南約50mの調査（市89-11次調査）では10世紀頃の井戸が、西約80mの調査（県1981年調査）では11世紀の土坑と14世紀の井戸が検出されている。今回の調査地も各時代の遺構が重層的に遺存すると考えられ、次の2点に注意して発掘調査を行った。1点目は平城京の東七坊大路に関する遺構の有無の確認、2点目は中世以降の宅地内の利用状況の解明である。

調査地は東側の道路に間口を開ける東西に長い敷地で、西側の敷地奥に第1発掘区を、東北隅の道路近くに第2発掘区を設定し、第1発掘区は作業実施の都合上で東西2回に分けて調査した。

II 基本層序

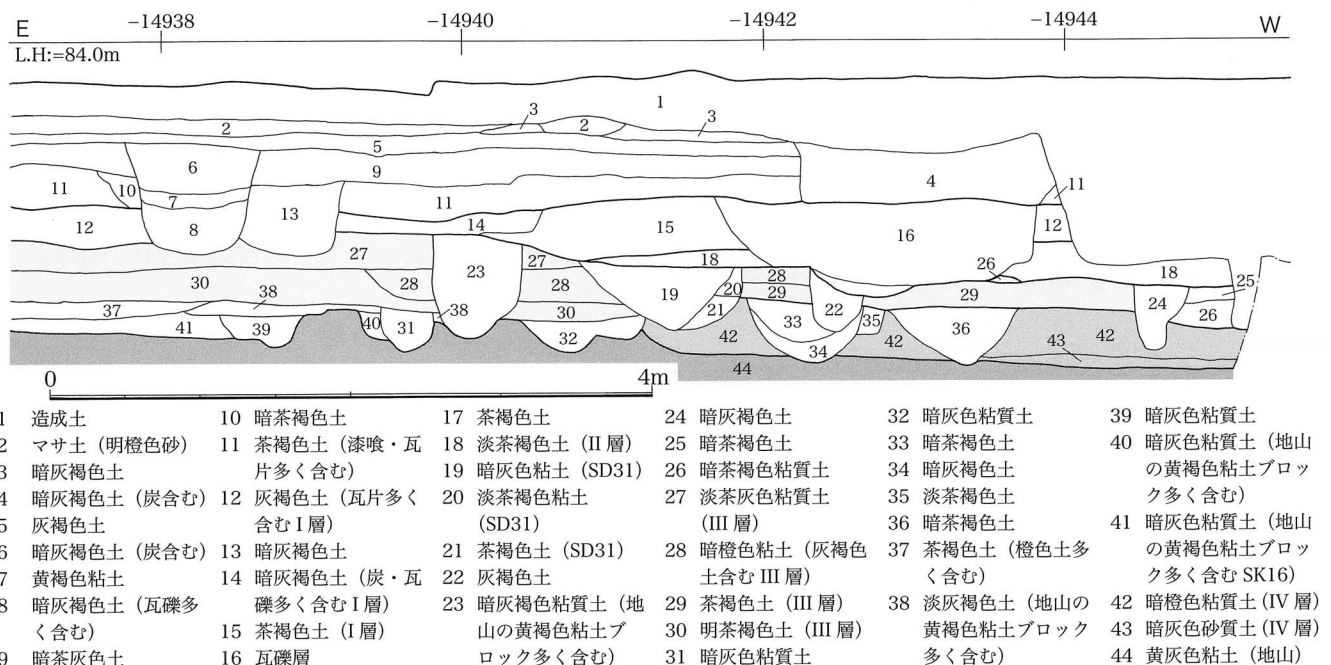
発掘区内の層序は、多くの層が重複し複雑であるが、第1発掘区では大きく近代以降の造成土、江戸時代後半の整地層（I層、土層図12・14・15）、江戸時代中頃の整地層（II層、土層図18）、室町時代の整地層（III層、土層図27～30）に大別される。さらに西端と北東部には奈良時代以前の遺物を含む整地土（または堆積土、IV



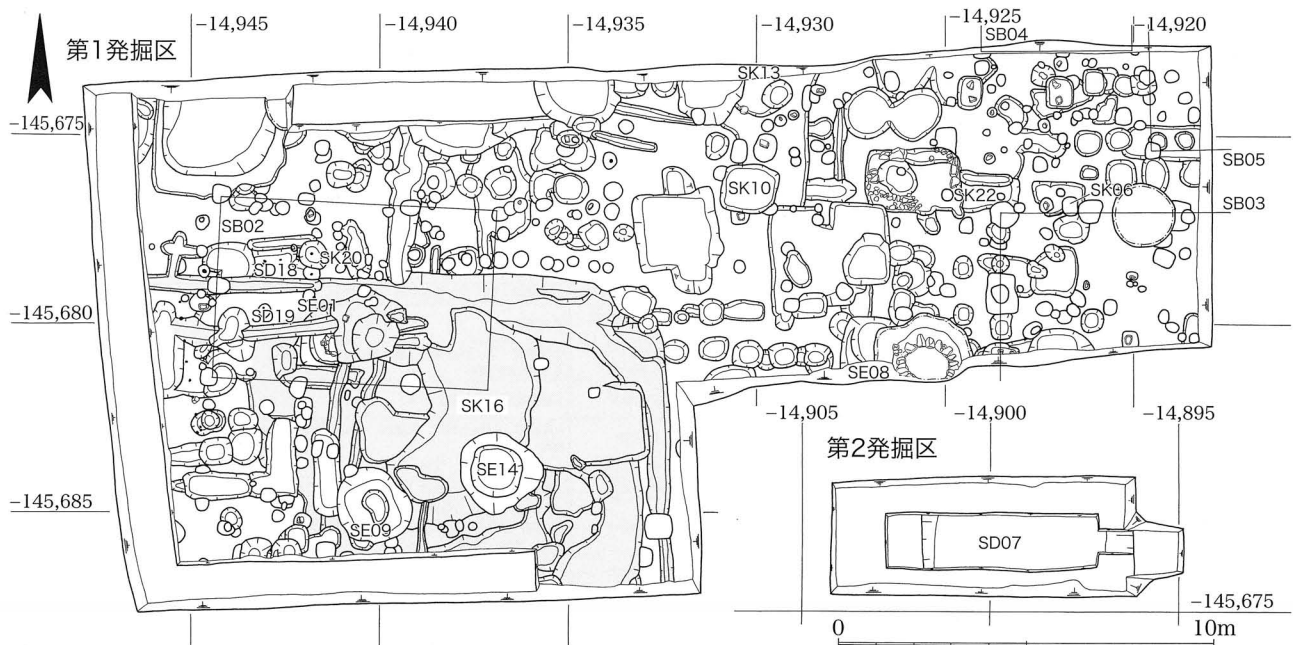
HJ 第531次調査 発掘区位置図 (1/5000)



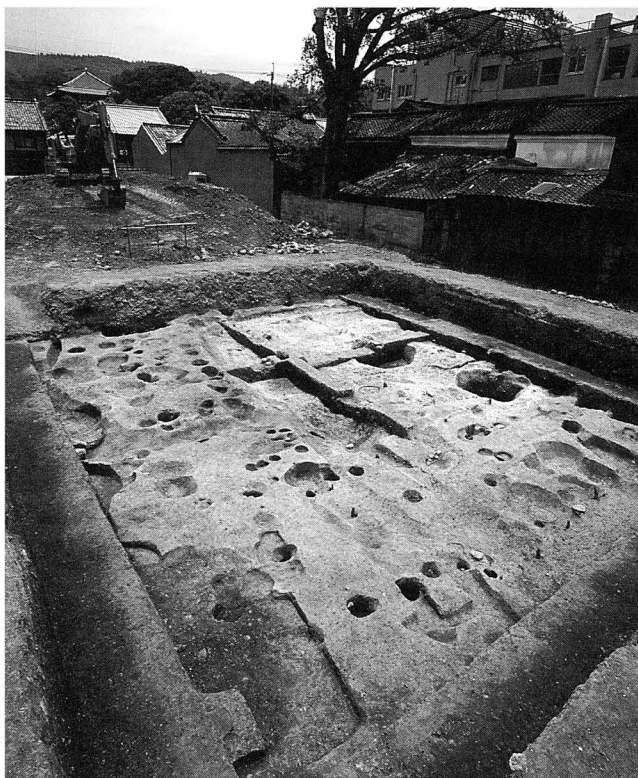
第2発掘区全景（西から）



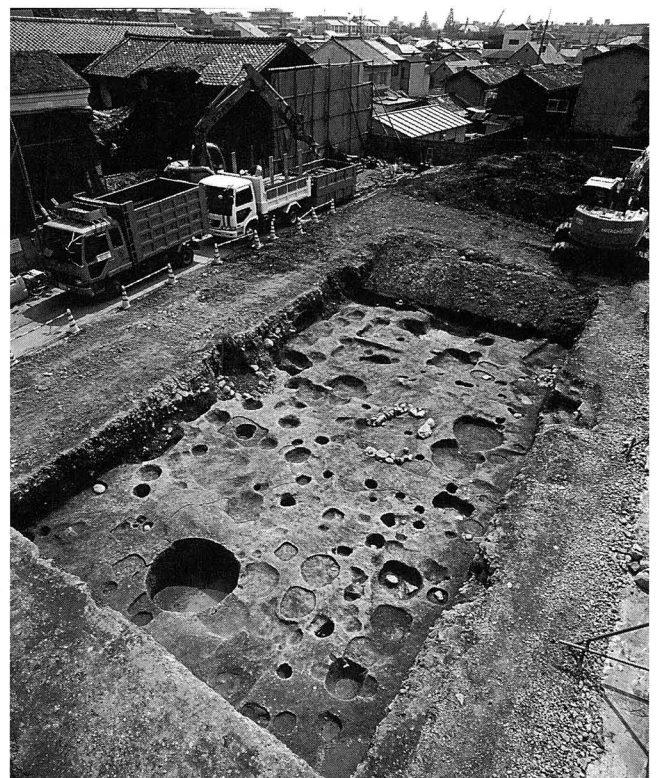
HJ 第531次調査 第1発掘区南壁土層図 (1/50)



HJ 第531次調査 発掘区遺構平面図（鎌倉時代以前・1/200）



第1発掘区西半部全景（鎌倉時代以前 北西から）



第1発掘区東半部全景（北東から）

層、土層図42・43）が部分的にあり、地表面から0.9～2.2mで黄灰色粘土か茶灰色砂礫の地山となる。IV層からは古墳時代後期後半頃の土器が少量出土した。地山は南東から北西に向かって低くなり、地山面の標高は南東隅が最も高く約82.9m、北西隅が最も低く約81.5mである。第2発掘区では、大きく近代以降の造成土、江戸時代の整地層（V層）、鎌倉・室町時代の整地層（VI層）、奈良・平安時代の遺物包含層（VII層）に分かれる。地表面から1.4～1.6mで淡青灰色シルトか淡青灰色砂礫の地山となり、地山面の標高は約82.3～82.5mである。

遺構検出は、第1発掘区では地山上面で行ったが、一部IV層がある部分ではこの上面で行い、奈良時代以降の遺構を検出した。IV層下の地山上面では数個の柱穴を検出したが、多くはIV層上面から掘り込まれたものである。第2発掘区では地山上面とVII層上面で行い、前者で奈良時代、後者で平安時代後期以降の遺構を検出した。

III 検出遺構

奈良～江戸時代までの各時代の遺構が大小約410基ある。詳細は一覧表に記し、各時代ごとに概観する。

奈良時代の遺構 掘立柱建物4棟（SB02～05）、井

HJ 第 531 次調査検出遺構一覧表

| 掘立柱建物遺構番号 | 棟方向 | 規模 | | 桁行全長 | | 梁間全長 | | 桁行柱間寸法 | | 梁間柱間寸法 | | 備考 |
|-----------|------|---------|--|--------|--|-------|--|--------------|--|---------|--|----|
| | | (桁行×梁間) | | m | | m | | m | | m | | |
| SB02 | 東西 | 3×2 | | 5.3 | | 4.8 | | 2.25-2.9-2.1 | | 2.4等間 | | |
| SB03 | 東西 | 3以上×2以上 | | 4.8以上 | | 2.1以上 | | 2.4-2.4? | | 2.1-? | | |
| SB04 | 南北か? | 1以上×2 | | | | 4.1 | | | | 2.1-1.8 | | |
| SB05 | ? | 2以上×1以上 | | 1.95以上 | | | | 1.95 | | | | |

| 井戸・土坑他遺構番号 | 掘形 | | | 枠 | | | 年代 | 主要出土遺物 | 備考 |
|------------|-------|-------------------|---------|-----------|-------------|-------------|----------------|--|--------------------------------|
| | 平面形 | 平面規模 (m) | 深さ (m) | 平面形・構造 | 内法 (m) | 水溜・濾過装置等 | | | |
| SE01 | 隅丸方形 | 東西1.4×南北1.8 | 1.45 | 抜き取り | | 折敷・曲物 | 8世紀中頃～後半 | 土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、丸瓦、平瓦、曲物、 | |
| SX06 | 隅丸長方形 | 東西4.5×南北0.5 | 0.3 | | | | 8世紀中頃～後半? | 須恵器壺Q | 須恵器壺Qを石で蓋をして埋納 |
| SD07 | 南北溝? | 幅5.6×長さ1.5以上 | 0.3 | | | | 8世紀後半～10世紀中頃 | 土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕、丸瓦、平瓦、漆器杯、軒丸瓦 (6235Ma) | |
| SE08 | 隅丸方形? | 東西0.8以上×南北1.2以上 | 0.8以上 | 抜き取り? | | | 10世紀前半 | 土師器皿、須恵器壺、平瓦、 | 現代の石組井戸で東半が破壊 |
| SE09 | 楕円形 | 東西1.9×南北2.0 | 1.6 | 抜き取り? | | | 11世紀末 | 土師器皿、黒色土器碗、瓦器碗、灰釉陶器碗、丸瓦、平瓦、曲物、六稜鏡 | |
| SK10 | 方形 | 東西1.4×南北1.3 | 0.3 | | | | 11世紀末 | 土師器皿、瓦器碗、平瓦、 | 土器を完形で廃棄 |
| SK11 | 楕円形 | 東西1.9×南北1.5 | 0.3 | | | | 11世紀末 | 土師器皿・羽釜、瓦器碗、白磁碗、丸瓦、平瓦、 | 土器を完形で廃棄 |
| SK12 | 隅丸方形 | 東西3.5×南北2.5以上 | 0.3 | | | | 13世紀初め | 土師器皿・羽釜、瓦器碗 (和泉型含む)・皿、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢、青磁碗、白磁碗、青白磁合子・皿、円盤型土製品1、軒丸瓦 (6282E) 丸瓦、平瓦、鉄滓 | 土器を完形で廃棄 |
| SK13 | 楕円形 | 東西1.4以上×南北1.1以上 | 0.1 | | | | 13世紀前半 | 土師器皿、瓦器碗、瓦質土器羽釜 (山城型?)、東海系陶器壺、青磁皿丸瓦、平瓦 | 土器を完形で廃棄 |
| SE14 | 不整形 | 東西2.2×南北2.2 | 2.0 | 抜き取り? | | | 13世紀中頃 | 土師器皿、瓦器碗・皿、東海系陶器壺・碗、白磁碗・皿、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、砥石1、鉄滓、木箸、曲物、桃種 | |
| SK15 | 方形? | 東西1.9×南北1.4以上 | 0.45 | | | | 13世紀後半 | 土師器皿・高台付皿・ミニチュア羽釜、瓦器碗、瓦質土器浅鉢、東海系陶器壺・鉢、青磁碗、白磁碗、青白磁合子、丸瓦、平瓦、砥石1、 | 土器を完形で廃棄 |
| SK16 | 不整形 | 東西11.2×南北8.0以上 | 0.5～0.7 | | | | 13世紀末 | 土師器皿・高台付皿・羽釜・ミニチュア羽釜・鉢、瓦器碗 (和泉型含む)、輪花碗 (樟葉型)・皿、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢・甕、東海系陶器鉢・甕、白磁碗・杯・壺、青磁碗・壺・合子、青白磁壺、褐釉壺、陶甕、軒丸瓦 (奈良時代型式不明)、丸瓦、平瓦、磚、石鍋2、砥石2、石鎌1、銅銭 (治平元寶1)、輪羽口、鉄滓、桃種 | 土師器皿を完形で多量に廃棄 |
| SD17 | 南北溝 | 幅0.5×長さ3.4以上 | 0.1 | | | | 13世紀末 | 土師器皿、丸瓦、平瓦 | SK16に接続 |
| SD18 | 東西溝 | 幅0.4×長さ4.8以上 | 0.1 | | | | 13世紀末 | 土師器皿 | SK16に接続 |
| SD19 | 東西溝 | 幅0.4×長さ4.8以上 | 0.1 | | | | 13世紀末 | 土師器皿、瓦器碗、東海系陶器壺、丸瓦、平瓦 | SK16に接続 |
| SK20 | 円形 | 径0.7 | 0.3 | | | | 13世紀末 | 土師器皿、東海系陶器壺 | 土師器皿を完形で廃棄 |
| SK21 | 不整形 | 東西2.5以上×南北1.5 | 0.7 | | | | 13世紀末 | 土師器皿、瓦器碗、瓦質土器浅鉢、東海系陶器壺、青磁碗、白磁碗、軒丸瓦 (6012B)、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鉄滓 | 土器を完形で廃棄 |
| SK22 | 隅丸長方形 | 東西1.6以上×南北1.1 | 0.1 | | | | 14世紀初め | 土師器皿、瓦器皿、平瓦、 | 土器を完形で廃棄 |
| SK23 | 長方形 | 東西5.5×南北0.9 | 0.25 | | | | 14世紀以降? | 瓦質土器鉢、丸瓦、平瓦、 | 底に自然石を南北に並置 |
| SK24 | 長方形 | 東西0.7×南北0.9 | 0.3 | | | | 14世紀以降? | 丸瓦、平瓦、 | 底に自然石を南北に並置 |
| SX25 | 長方形? | 東西4.0以上×南北3.3以上 | 0.45 | 埋藏遺構 | 東西4列、南北2列以上 | | 15世紀後半～16世紀前半 | 土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、青磁碗、国産陶器 (常滑窯壺、備前窯壺) 軒丸瓦 (6235Mb)、丸瓦、平瓦、砥石1、銅銭 (判読不能2)、 | 甕5基残存 |
| SX26 | | 東西5.4×南北2.0 | 0.1 | 埋藏遺構 | 東西7列、南北2列 | | 15世紀後半～16世紀前半 | 土師器皿、国産陶器 (備前窯壺・信楽窯鉢)、丸瓦、平瓦、 | 甕1基残存、抜き取り坑の1つから信楽窯鉢ほぼ完形で出土 |
| SX27 | 長方形 | 東西2.4×南北1.7 | 0.1 | 方形石組 | | 東西1.9×南北0.9 | 15世紀後半～16世紀前半 | 土師器皿、瓦質土器鉢・鉢、国産陶器 (常滑窯壺、備前窯壺)、白磁碗・皿、青磁碗、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、輪羽口 | |
| SX28 | | 東西6.5×南北1.6 | 0.1 | 埋藏遺構 | 東西8列、南北2列 | | 15世紀後半～16世紀前半? | 土師器皿、丸瓦、平瓦、 | 抜き取り坑のみ |
| SK29 | 不整形? | 東西4.2以上×南北0.9以上 | 0.7 | | | | 16世紀後半～17世紀初め | 土師器皿、国産陶器 (肥前窯碗・備前窯壺)、丸瓦、平瓦、 | |
| SE30 | 円形? | 東西2.7以上×南北0.9以上 | 0.6以上 | 円形石組 | | 0.9以上 | 17世紀前半～中頃 | 土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢・鉢、国産陶器 (信楽窯鉢・甕、瀬戸・美濃窯皿)、国産磁器 (肥前窯皿)、丸瓦、平瓦、磚、 | |
| SD31 | 南北溝 | 幅0.6～0.8×長さ12.0以上 | 0.4 | | | | 17世紀後半 | 土師器皿・羽釜・焙烙、瓦質土器鉢、国産陶器 (信楽窯鉢・甕、備前窯壺、肥前窯碗)、国産磁器 (肥前窯碗・皿)、丸瓦、平瓦、刻印平瓦「東口□」砥石1、銅銭、鉄滓、墨書木材1、 | 部分的に石組みあり |
| SK32 | 円形? | 東西0.6以上×南北0.9以上 | 1.3以上 | | | | 17世紀末～18世紀初め | 土師器皿、瓦質土器鉢、国産陶器 (肥前窯碗・信楽窯鉢・甕・壺)、国産磁器 (肥前窯碗)、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘3、鉄滓、木箸?、曲物、漆碗、木椀、桃種 | 井戸の可能性あり |
| SK33 | 円形 | 東西1.2×南北1.4 | 0.25 | | | | 17世紀末～18世紀初め | 土師器皿、瓦質土器壺、国産陶器 (肥前窯碗・信楽窯鉢)、国産磁器 (肥前窯碗)、丸瓦、平瓦、磚、砥石1、 | 重複関係から SK34より新 |
| SK34 | 円形 | 東西1.3×南北1.4 | 0.25 | | | | 17世紀末～18世紀初め? | 土師器皿、国産陶器 (信楽窯壺)、国産磁器 (肥前窯碗) | |
| SX35 | | 東西3.3以上×南北1.6 | 0.1 | 埋藏遺構 | 東西4列以上、南北2列 | | 17世紀以降? | 土師器皿、国産陶器 (信楽窯壺)、国産磁器 (肥前窯碗・皿)、丸瓦、平瓦、 | 抜き取り坑のみ |
| SK36 | 円形? | 径0.9 | 0.8 | | | | 18世紀前半 | 土師器皿・焙烙、瓦質土器鉢・甕、国産陶器 (信楽窯鉢・鉢・甕)、国産磁器 (肥前窯碗・皿・蓋)、丸瓦、平瓦、銅銭 (判読不能1)、鉄釘1、銅金具1、軒丸瓦 | 埋納・埋藏遺構の抜き取り痕か? 重複関係から SK32より新 |
| SK37 | 方形 | 東西2.25×南北2.1 | 0.65 | | | | 18世紀前半 | 土師器皿・焙烙、瓦質土器浅鉢・深鉢、国産陶器 (信楽窯鉢・壺・甕)、肥前窯碗、国産磁器 (肥前窯碗・皿・猪口・壺・蓋)、丸瓦、平瓦、棧瓦、磚、鉄滓、曲物、漆碗、桃種 | |
| SK38 | 方形? | 東西0.4以上×南北0.6以上 | 0.4 | | | | 18世紀前半? | 土師器皿、丸瓦、木箸、曲物、檜皮、刷毛 (墨書あり)、瓜種 | 重複関係から SK37より新 |
| SK39 | 楕円形? | 東西2.3以上×南北1.3以上 | 0.7以上 | | | | 18世紀後半 | 土師器皿、瓦質土器鉢・甕、国産陶器 (信楽窯碗・花生・播鉢・甕)、国産磁器 (肥前窯碗・皿・仏飯器・御神酒德利)、丸瓦、平瓦、棧瓦、熨斗瓦、砥石1、鉄釘1 | |
| SK40 | 方形 | 東西3.2×南北2.0 | 0.2 | | | | 18世紀後半～19世紀前半 | 土師器皿、瓦質土器鉢、国産陶器 (肥前窯碗・信楽窯鉢・鉢・甕)、国産磁器 (肥前窯碗・皿)、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、土管 | |
| SE41 | 円形 | 径1.6 | 0.9以上 | | | | 18世紀後半～19世紀前半? | 土師器皿・焙烙、国産陶器 (信楽窯壺・碗?)、国産磁器 (肥前窯碗) | 重複関係から SX35より新 |
| SK42 | 方形 | 東西3.9×南北4.8 | 0.1 | | | | 19世紀前半 | 土師器皿・焙烙、瓦質土器深鉢、国産陶器 (肥前窯碗・信楽窯鉢・銅・播鉢・甕)、国産磁器 (肥前窯碗・皿・瓶、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄釘2、銅釘1、木札1)、漆碗、 | 壁沿いに護岸の杭あり |
| SK43 | 長方形 | 東西3.0×南北1.1以上 | 0.3 | | | | 19世紀前半 | 土師器皿・焙烙、瓦質土器壺、国産陶器 (肥前窯碗・信楽窯鉢・甕、軟質施釉陶器皿)、国産磁器 (肥前窯碗)、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、鉄滓 | |
| SX44 | 長方形 | 東西3.7×南北1.8 | 0.3 | 方形、石組と横板組 | | 東西3.3×南北1.3 | 19世紀前半 | 土師器皿・焙烙、瓦質土器鉢、国産陶器 (肥前窯碗・信楽窯鉢・鉢・甕・土瓶・壺・蓋)、国産磁器 (肥前窯碗・皿・瓶)、円盤型土製品1、丸瓦、平瓦、棧瓦、石鏡 (流紋岩製)、頁岩製1) | |
| SK45 | 長方形 | 東西1.9×南北1.4 | 0.35 | | | | 19世紀前半～中頃 | 土師器皿・焙烙、国産陶器 (肥前窯碗・信楽窯鉢・甕)、丸瓦、平瓦、棧瓦、 | |
| SK46 | 不整形 | 東西3.5×南北2.3 | 0.45 | | | | 19世紀中頃 | 国産陶器 (信楽窯鉢・鉢・甕)、国産磁器 (肥前窯碗・蓋)、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、 | |

戸1基 (SE01)、土器埋納土坑1基 (SK06)、溝1条 (SD07) がある。全容が判明する掘立柱建物はSB02の1棟のみであるが、他の建物も柱穴の規模等から中小規模と考えられる。SE01は井戸枠が抜き取られており、底の集水施設が2段分残存する。集水施設は下段が径約36cm、高さ約30cmの円形曲物、上段が東西約45cm、南北約35cm、高さ約12cmの折敷を利用している。SK06は、石の蓋をした須恵器壺Qを埋納したもので、壺内の土を取り出していないため内容物の詳細は不明だが、X線撮影の結果径約1cmの球状もの1点と銅銭一枚が内蔵されていることが判明した。SD07は、第2発掘区で検出した南北方向の溝で、暗青灰色粘土で埋まる。調査範囲が狭く、東七坊大路に関するものか不明。

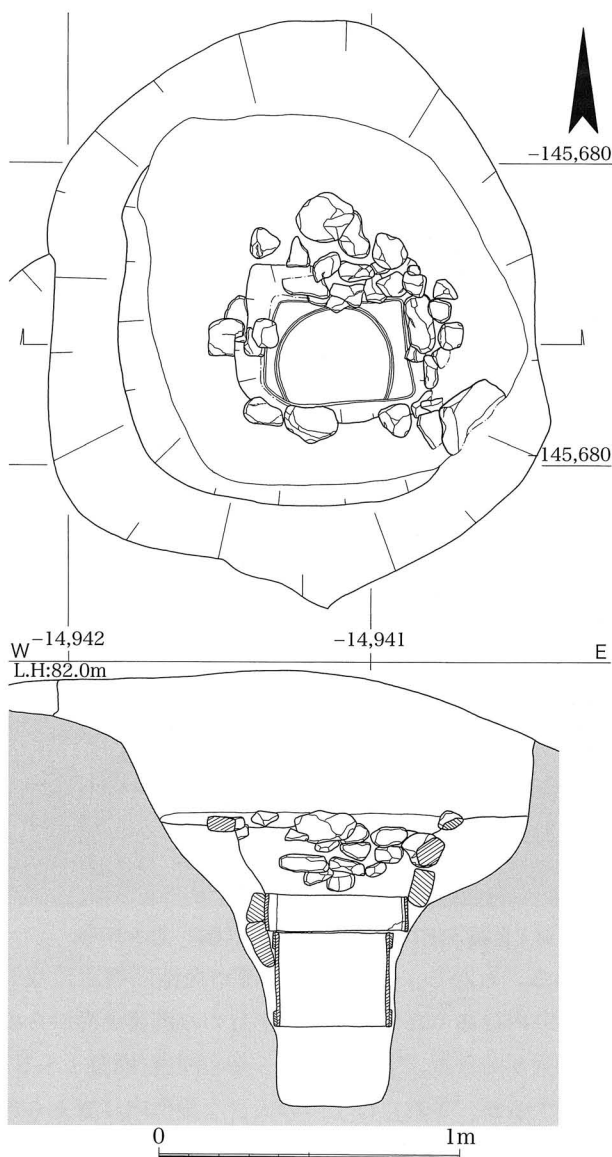
平安時代 井戸2基 (SE08・09)、土坑 (SK10・11) と柱穴多数がある。年代は井戸SE08が平安時代中頃 (10世紀前半) の他は、平安時代後半である。SE08は大半が現代の井戸で破壊されているが、土師器が多くまとまって出土した。SE09の掘形は、上半部では平面楕円形であるが、下半部では隅丸方形となり、井戸枠は抜き取られていると考えられる。埋土の上層からは13世紀末の土器が、下層からは少量の11世紀末の土器と共に六稜鏡がほぼ完形で出土した。土坑SK10と11からはいずれも完形品を含む土器が出土している。

鎌倉時代の遺構 井戸1基 (SE14)、土坑 (SK12・13・15・16・20・21)、溝 (SD17~19) と柱穴多数がある。第1発掘区西半にはその大部分を占めるSK16とそれに付属するSD17~19がある。土坑の平面形は不整形で、北辺と東辺が直線的であるが西辺はいびつで、発掘区南側に続く。南北溝SD17はSK16の南東部で接続し、土坑底の東辺部と北辺部に沿って流れ、北辺中央部でなくなる。土坑北西隅部では東西溝SD18・19が接続する。土坑底には北西隅のSD19の東側、SE09の北側、SE14の北側の大きく3箇所に窪みがあり、完形の土師器皿が重なり合って大量に出土する。この他にも多種多様な遺物が出土しており一覧表に記す。完形品の土器を廃棄した土坑はこの他にも多くある。SK12では土師器皿の他、瓦器碗、須恵器鉢等が出土し、SK20ではほとんどが土師器皿である等、土器組成の差が見られる。

室町時代の遺構 埋甕遺構 (SX25・26・28)、石組土坑 (SX27)、土坑 (23・24)、柱穴がある。埋甕遺構は3群認められ、SX25は南北2列以上、東西4列以上、SX26は南北2列以上、東西7列以上、SX28は南北2列、東西8列である。甕が残存していたのは、SX25が5基 (常滑窯4基、備前窯1基)、SX26が1

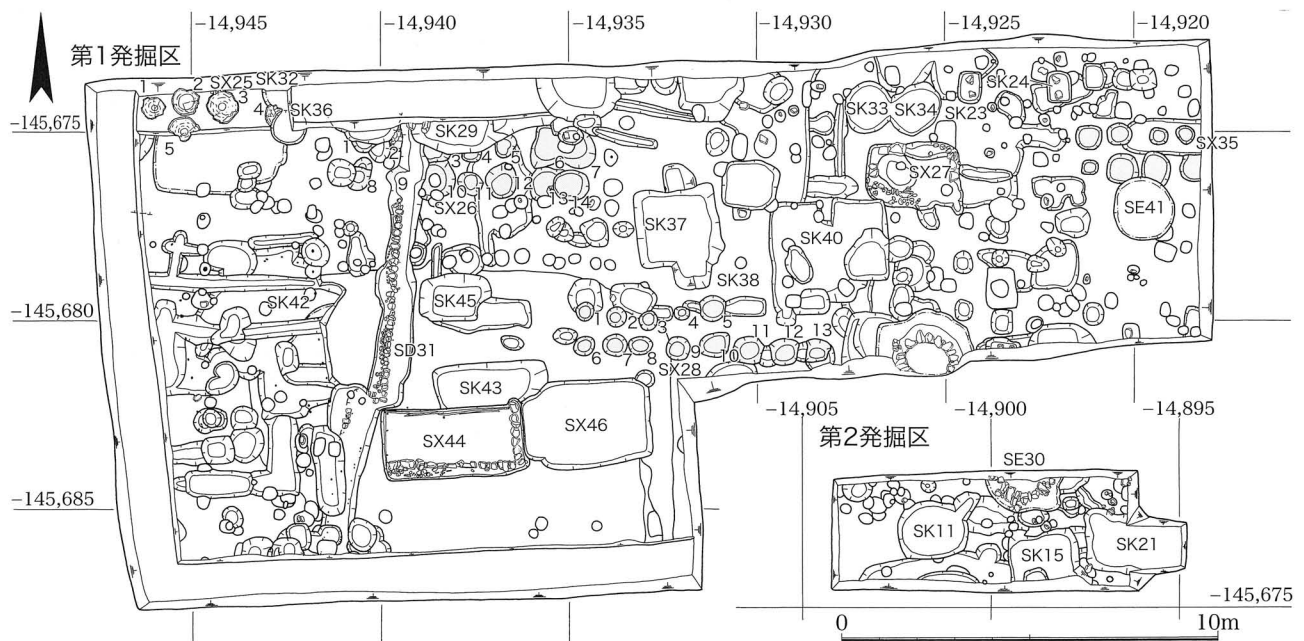


井戸 SE01 (南から)

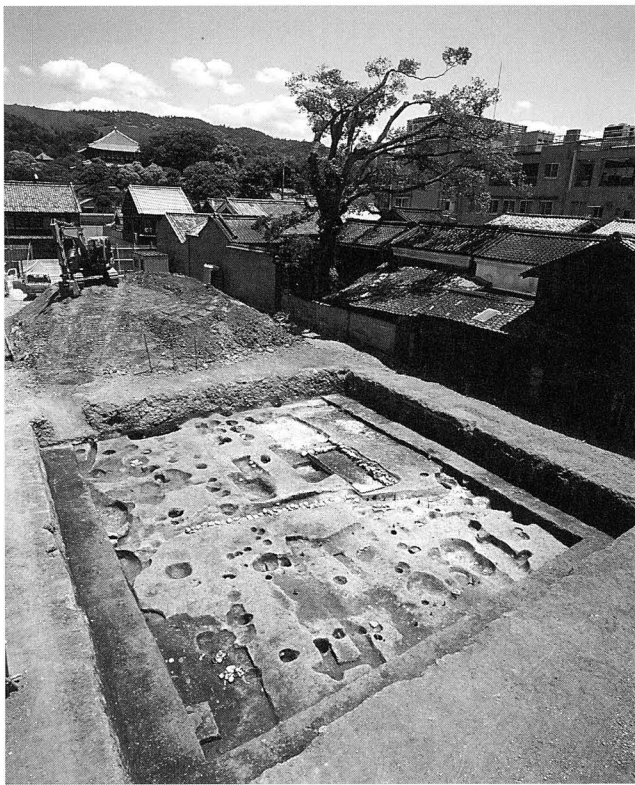


井戸 SE01 平面・立面図 (1/25)

基 (備前窯) である。なお埋甕と抜き取り坑には、各遺構ごとに北西から東西方向へ順に番号を付した。これらの埋甕遺構は、遺構面から約0.4m 下で遺構検出を行った結果、掘形底に残る僅かな抜き取り痕跡を検出したの



HJ 第531次調査 遺構平面図(室町時代以降、第2発掘区は鎌倉時代以降・1/200)



第1発掘区西半部全景(室町時代以降 北西から)

みである。しかし、SX25は一部が発掘区周辺に残した犬走り内であったため、その部分のみ埋甕上面からの発掘調査ができた。SX25では5基の埋甕(埋甕1～5)が残存するが、これらは1つの大きな掘形内に据えられている。掘形は西側と北側が発掘区外に続き、東側が江戸時代の遺構に破壊されている。掘形の南端は埋甕5から約2m南側にあり、そこにもう二列分の埋甕が想定できる。甕内からは甕の破片と共に壁土が出土した。SX26の埋甕14抜き取り坑底には、信楽窯の播鉢がほぼ完形で口縁を上にして据え置かれている。埋甕の底に設

置されていたものとも考えられる。播鉢の内面には3条1単位の播目があり、摩滅がはげしい。SX27は平面長方形の石組土坑で、石組は1段分が残るが、石の多くは抜き取られ残存状態がは悪い。SK23・24はいずれも平面長方形の土坑で、底に人頭大の石を2つ南北に並べており、両者は約2.4mの間隔で東西に並ぶ。形態から何らかの構造物の基礎と考えられるが性格は不明である。出土遺物は少なく、瓦質土器から14世紀でも後半以降のものと考えられる。

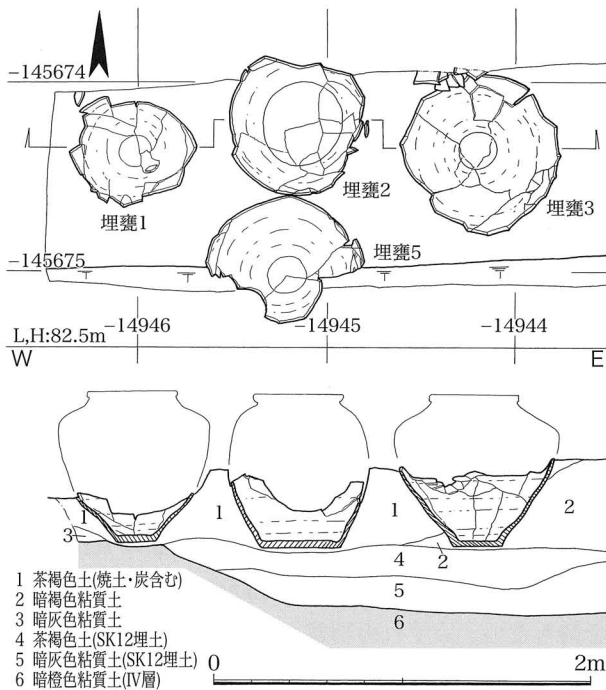
江戸時代の遺構 井戸2基(SE30・41)、土坑(SK29・32～34・36～40・42・43・45・46)、埋甕遺構1基(SX35)、石組土坑1基(SX44)、石組溝1条(SD31)、柱穴多数がある。江戸時代前期の遺構は少なく、SK29とSE30があるのみである。SE30は円形石組みの井戸で、大半が発掘区外北側にあるため、井戸枠内は約0.2mまでしか掘削できなかった。江戸時代中頃～後半の遺構は、第1発掘区西半に土坑が多く見られ、敷地奥に掘られる傾向を看取できる。SE41は平面円形掘形で、深さ約0.9mまで掘削したが枠は確認できなかった。SD31は南北方向の溝で、北でやや東にふれる。SX44の北西隅近くで西側へ鉤型に曲がる。またこの部分から北側5.4m分は、溝の西側が石組によって護岸されている。その他の部分にも杭が溝に沿って打ち込まれる所があり、護岸があったと考えられる。鉤型に曲がる部分の周辺では、埋土に焼土が多く含まれていた。SX44は石組みが南と東側に1段分あり、西側と北側は杭を打ち込み2枚の横板で擁壁する。土器・瓦の破片を出土する土坑が多く、いずれも塵芥処理の機能が考えられる。特にSK37・39からは多量の瓦が



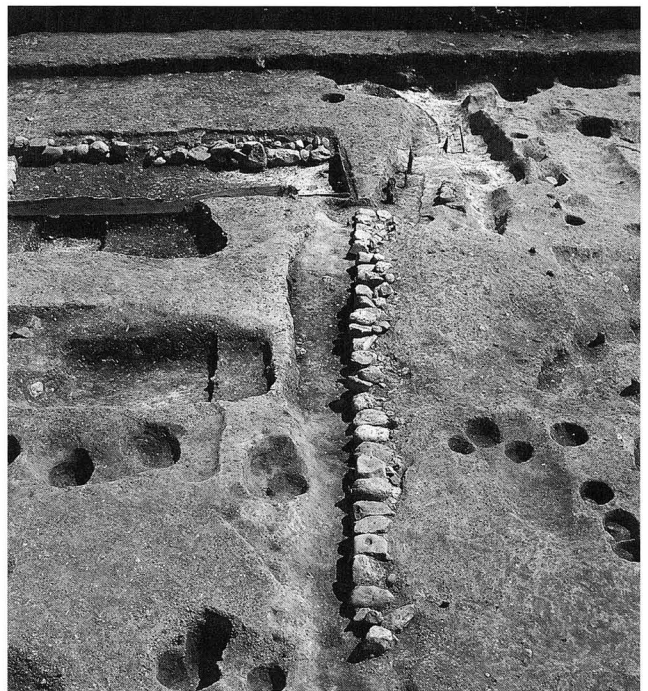
埋甕遺構 SX25 (南東から)



石組土坑 SX44 (東から)



埋甕遺構 SX25 平面・立面図 (1/40)



溝 SD31 (北から)

出土しており、S K37からは約340点(約50kg)、S K39からは約650点(約66kg)が出土した。S K42は平面隅丸方形の土坑で、土坑壁際の底には約0.4~0.6m間隔で杭列があり、擁壁があったと考えられる。時期は19世紀前半で、当時の遺構面から復原すると深さ約0.8mになる。瓦・土器と共に、「木綿屋佐兵衛」の墨書がある木札が出土した。S K32は埋土が暗灰色粘質土で、湧水がはげしく井戸の可能性がある。S K36は平面円形でほぼ垂直に掘り込まれ、桶または甕等を埋設していたものと考えられる。

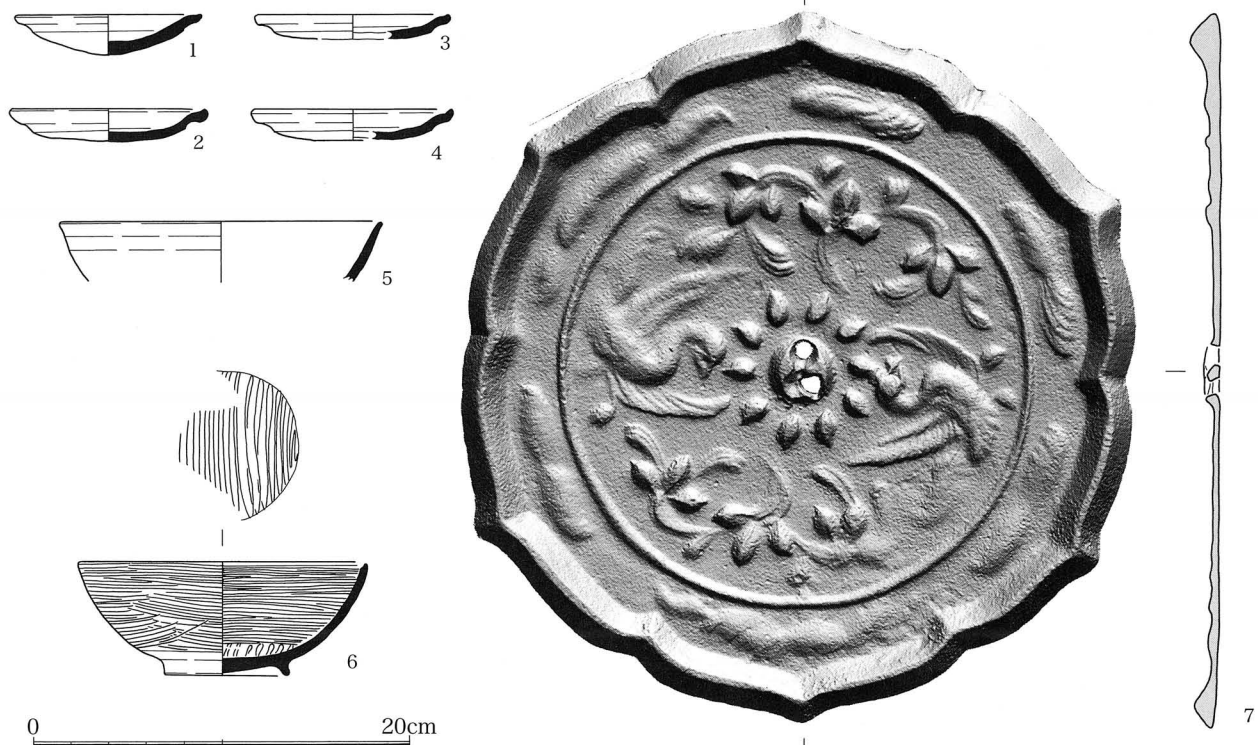
先述したように第1発掘区では江戸時代後半と中頃の整地層(I層・II層)がある。発掘区壁面の土層観察から、これらの層と遺構との関係を記すと、S K29・32・SD31がII層に覆われており、S K36・39がII層上面から掘り込まれ、I層に覆われていることがわかる。これ

ら遺構の出土遺物から、I層が18世紀後半以降で、II層が18世紀前半頃の年代でと考えられる。

IV 出土遺物

古墳時代から江戸時代までの各時期のものがあり、土器類が遺物整理箱51箱、瓦類が63箱、金属製品が4箱、木製品が2箱、石製品が1箱、壁土等が1箱ある。土器類はS K16出土の土師器皿と、S X25出土の大甕が多くを占める。S E09・S K16出土の遺物とS K42出土の木札について記す。

S E09出土遺物は上層と下層に分かれ、上層から13世紀末の土師器、下層から11世紀末の土師器皿、瓦器碗、銅鏡、この他に黒色土器A類碗、灰釉陶器碗、須恵器甕等やや年代が古いものが出土した。1~4は土師器皿で、いずれも「て」字状口縁の小皿である。口径は10.0~10.8cmである。5は灰釉陶器碗で、内外面に施釉



HJ 第531次調査 井戸SE09 出土遺物 (1/4 7のみ1/2)

する。6は瓦器碗で、外面は3分割の密なヘラミガキ調整、内面も密なヘラミガキ調整、見込みには13回以上のジグザグ状の暗文がある。7は唐草双鳥紋六稜鏡（巻首図版・参照）で、面径は9.5cm、重量は85gある。中央の紐は欠け、かわりに鏡面に達する孔を2つ穿っている。圏線で内区と外区に分け、内区には紐を中心に鳥と唐草を各2個ずつ対称に配置し、外区には省略された唐草文を6個連ねる。 casting quality is poor, and it is considered to be recast¹⁾.

土坑S K 16からは検出遺構一覧表に記した遺物が出土している。出土土器から時期は13世紀末頃で、以下主なものを記す。

土器類は遺物整理箱10箱分出土し、大半が土師器皿である。土師器皿は完形に復原できるものが多い一方、その他の土器はほとんどが破片である。

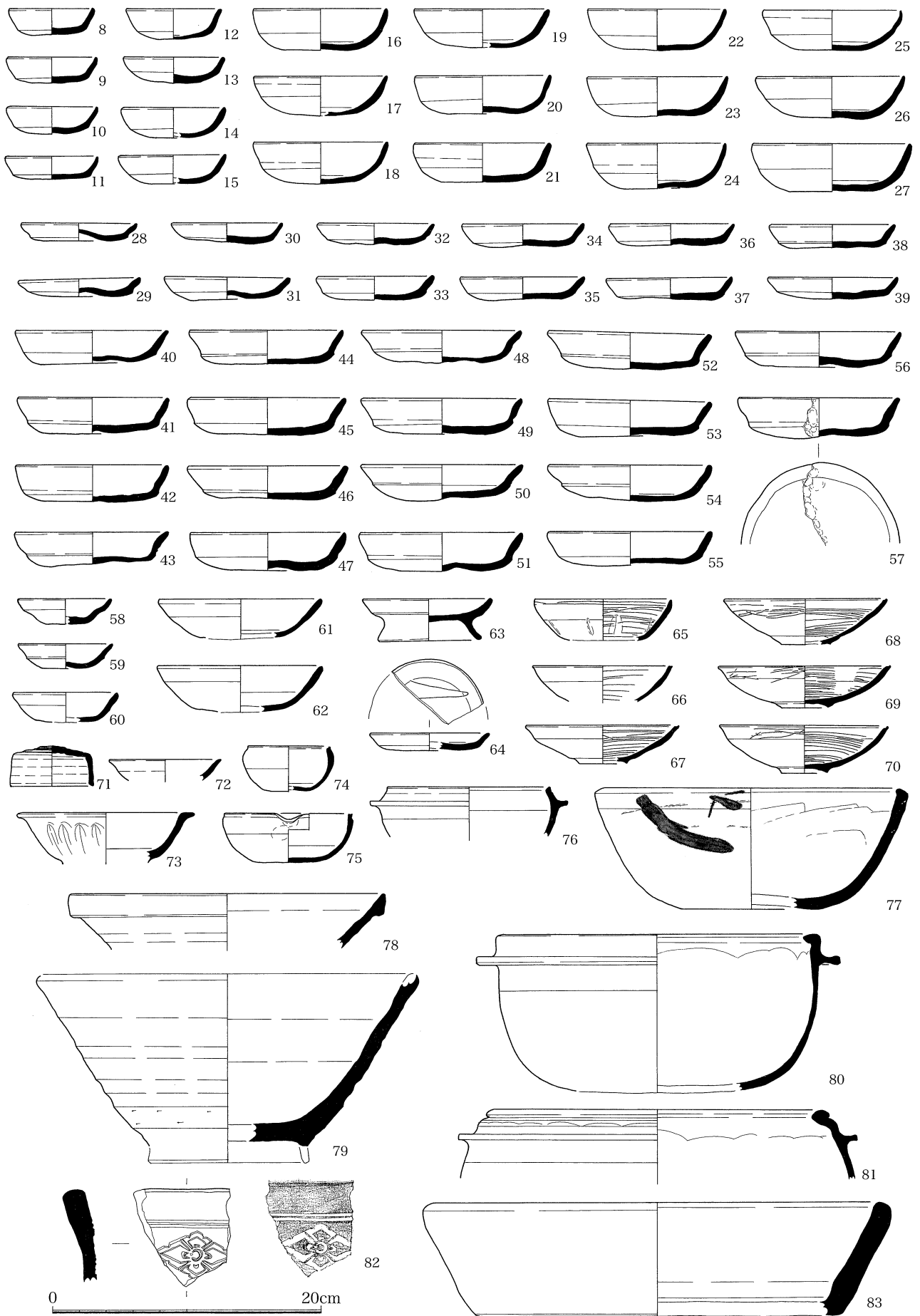
土師器皿は口径が9cm前後の小皿（28～39）と、12cm前後の大皿（40～57）があり、大皿の比率が高い。小皿には底部を上げ底状にしたヘソ皿（28・29・31）がごく少量ある。いずれも内面をナデ調整後、口縁部をヨコナデ調整する。大皿には内面をハケメ調整するものがある。外面は口縁部以下は未調整で、粘土接合痕跡や板の圧痕が見られるものがある。大皿の57には、底部から口縁部に及ぶ粘土接合痕跡が残る。胎土は、橙色からやや赤みを帯びた灰白色の色調で一定しているが、灰色のものや黒斑があるものがいくらかある。この他にやや深手の皿（8～27）が出土している。口径は数種類あり、6～11cm代まで9cm代を除き1cmごとに分布して

いる。調整手法は通常の皿と同様であるが、作りは丁寧で、器壁もやや薄くゆがみが少ない。この他京都産と考えられる胎土が白色の皿（58～62）が少量ある。

土師器羽釜には菅原分類²⁾の大和B型とH1型（81）の他、口縁端部を内側に水平に折り曲げるもの（80）がある。後者は口縁部の形態が大和H2型に似るが、H2型に比べ口縁端部は短く器壁は厚い。従来のH2型の出現時期よりかなり古く、その初現期のものかは今後の類例を待ちたい。いずれの羽釜も、鏝の幅は1.0～1.5cmと短い。また小型の羽釜も数点出土している。76は口縁端部を玉縁状にしたもので、胎土は砂が少なく精良である。内外面には煤が付着しない。

土師器鉢には大小のものがある。74・75は口縁部がヨコナデ調整、内面がナデ調整、外面が未調整である。77は、外面が未調整で粘土紐接合痕が残る、内面が板状工具によるナデ調整である。外面に墨書がある。

瓦器には碗と皿があるが、12～13世紀の各時期のものが破片で出土している。瓦器皿は、見込み部に数回のジグザグ状の暗文がある。碗に比べ出土数は少ない。瓦器碗には大和型の他、和泉型と樟葉型の輪花碗がある。大和型の碗は、器形のひずみははげしく、断面三角形の高台を雑に貼り付ける。口縁部外面にヘラミガキ調整を行うもの（68～70）と、行わないもの（66・67）とがある。内面は10～22回転の渦巻き状のヘラミガキ調整である。川越編年³⁾のⅢ-DとⅢ-Eにあたる。樟葉型の輪花碗（65）は1点出土しており、体部外面にへ



HJ 第 531 次調査 土坑 SK16 出土土器 (1/4)

ラ状工具を縦方向に押し当てて5弁の輪花風に形作る。口縁端部外面をヘラミガキ調整し、体部内面は13回転の圏線状のヘラミガキ調整する。見込み部は欠損し文様の有無は不明。和泉型の椀は数点の小破片で図化できないが、内外面のヘラミガキ調整はない。

瓦質土器には浅鉢がある。82はやや内傾した体部の浅鉢で、小片のため口径が復原できないが、おおよそ30cm以上あると推定できる。内外面は緻密な横方向のヘラミガキ調整で、表面の炭素は失われ灰白色である。外面には2条の沈線がめぐり、その下には花菱の単体のスタンプ文が押印される。従来、奈良火鉢は菊花の単体スタンプ文が押印される輪花型のものが出現期のものとされているが、今回の例はそれとは趣が大きく異なっている。また花菱文はやや時代が下ると奈良火鉢では通常の文様であるが、これらは連続して押印されて文様帯を構成しており、単体での押印例はない。いずれにしる奈良火鉢の出現期を考える上で重要な資料となろう。83は12世紀後半頃からしばしば出土するタイプの浅鉢で、内外面のヘラミガキ調整は粗く、ミガキ調整下のヨコナデ調整が見られる。

須恵器には東播系の鉢(78)と甕が少量ある。東海系の陶器には鉢と甕があり、東播系のものとは比べ出土量が多い。ほとんどが甕で、口縁部内面端部に凹線がめぐる12～13世紀前半頃のものが多い。79は鉢で欠損した高台跡を研いで再使用している。内面は摩耗して平滑である。

輸入陶磁器には白磁・青磁・青白磁・褐釉陶器がある。白磁は玉縁状や外反口縁の碗など平安時代後期のものが多い。72は口縁端部の釉を掻き取る白磁皿である。青磁も龍泉窯系の草花文や連弁文の碗など平安～鎌倉時代のものが多い。73は青磁杯で、外面に鎬連弁文を彫り、青磁釉を厚く施釉する。高台は欠損するが、断面三角形と考えられ、森田分類⁴⁾のⅢ類にあたる。71は青磁の蓋で、口縁端部を除く外面に施釉する。この他青磁・白磁・青白磁・褐釉の壺の破片があり、壺の出土が目立つ。

瓦類は整理箱5箱分(約470点、43kg)あり、丸瓦と平瓦が大半で、型式不明の奈良時代の軒丸瓦が1点ある。

S K 42出土の木札は、長さ7.2cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmの長方形で、上端から1.0cm下の中央部に径2mmほどの孔がある。表裏に墨書があり、「川□□組 今小路町木綿屋佐兵衛」「□□組 □□」とある。後述する「今小路町北南両町大絵図券文」には、調査地の2軒北側の住人に木綿屋佐兵衛が見られる。遺構の年代は絵図以降で、同一人物もしくは名前を継いだ人物の可能性が高い。

V 調査所見

今回の調査では、当初の想定を越えて各時代の遺構が

良好に残存しており、以下の成果が得られた。

① 奈良時代の遺構・遺物包含層が確認でき、鎌倉時代以降の削平を免れた奈良時代の遺構が、周辺にも存在することが考えられる。一方、調査が小規模なため、宅地利用の状況や、東七坊大路に関しては不明である。

② 平安時代から室町時代の各時代の遺構を検出し、平城京廃絶後も宅地として再利用し続けてられた様相が判明した。各時代を概観すると、平安時代には井戸の存在が示すように、断続的に宅地利用された。S E 09出土の六稜鏡は、ほぼ完形品で残存状況もよく貴重な資料といえる。鎌倉時代には遺構の数が増加し、土坑に多量の土器が廃棄される。土坑出土の一括土器には他地域産のものが僅かながら含まれ、土器研究のみならず当時の物流を考える上でも貴重な資料である。室町時代には埋甕遺構が築かれ、多量の液体を貯蔵する施設が存在したことがわかる。甕の内容物は不明であるが、その総量からは考えて何らかの商品の生産または備蓄に関わるものであろう。奈良町遺跡内での中世の埋甕遺構は5例目となる。

③ 江戸時代の各時期の遺構を検出し、宅地の利用状況を考える上で良好な資料が得られた。発掘区内は18世紀前半頃と18世紀後半以降に2回の整地が行われ、各時期とも敷地の奥には塵芥処理用の土坑が掘削される。史料によると、今小路町は宝永元年(1704年)・享保11年(1726年)・宝暦12年(1762年)の3度にわたる大火に見舞われている。調査ではこれらの大火を示す焼土層等は確認できなかったが、18世紀前半頃の整地の時期が宝永または享保の大火と近接しており、何らかの関係が推定できる。また、安永2年(1773年)の今小路町を描いた絵図「今小路町北南両町大絵図券文(天保4年(1833年)写⁵⁾)」によると、今回の調査地は北から「小泉屋 赤兵衛」「菱屋 忠兵衛」「粕屋 又六」の3軒にあたり、南北に3つの宅地があったことがわかる。間口の規模は、北から「二間四尺二寸、三間四尺五寸、二間六尺四寸」とあり、これらの合計は現在の敷地の間口規模とほぼ等しい。この宅地割りを発掘区内に当てはめると、北から一軒目と二軒目の境界線がS K 33・34とS X 35の間に、二軒目と三軒目の境界線がS K 43とS X 44の間にあることがわかる。江戸時代の遺構分布は、それぞれの宅地内でおおよそおさまる傾向が認められよう。

(中島和彦)

- 1) 鏡のデジタル図化については、檀原考古学研究所の奥山誠義・水野敏典両氏にお願いした
- 2) 菅原正明「機内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983 奈良国立文化財研究所
- 3) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983 奈良国立文化財研究所
- 4) 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集 4』1978 九州歴史資料館
- 5) 個人蔵

6. 平城京跡（右京北辺四坊三坪）の調査 第532次

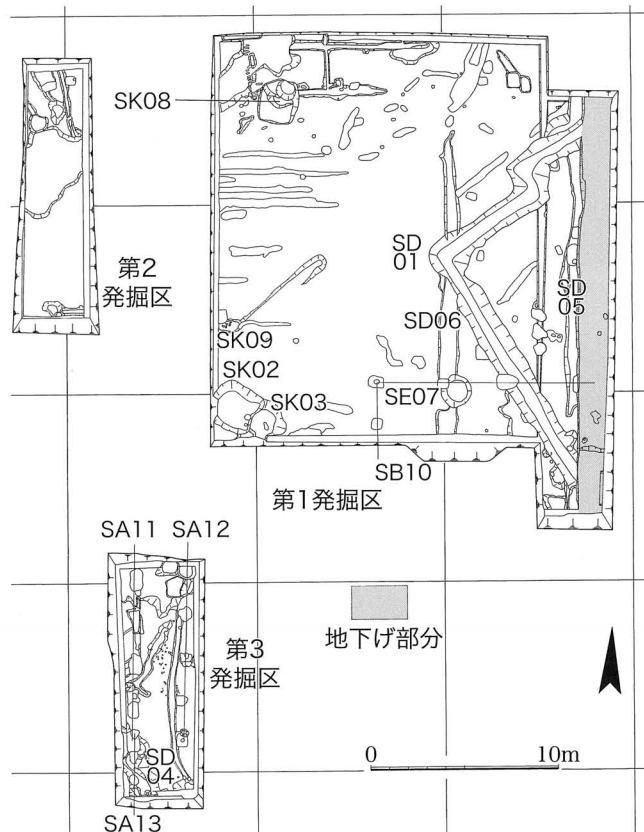
| | | | |
|------|----------------------|-------|------------------|
| 事業名 | マンション建設 | 調査期間 | 平成17年5月31日～7月29日 |
| 届出者名 | 株式会社 奥村組 | 調査面積 | 667㎡ |
| 調査地 | 奈良市西大寺宝ヶ丘731-1、738-3 | 調査担当者 | 久保邦江 |

I. はじめに

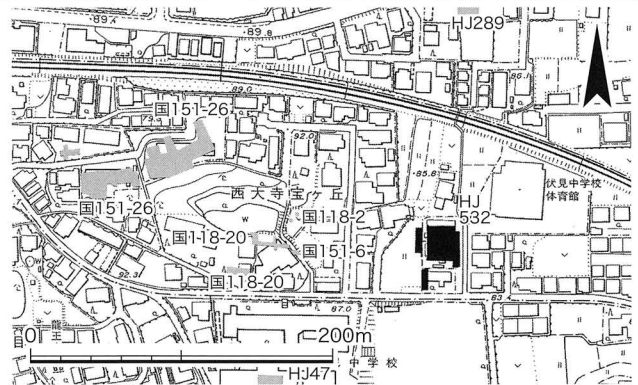
調査地は、条坊復原によると右京北辺四坊三坪の南東隅部に相当する。この三坪と西隣の六坪との間には称徳山荘の園地とみられる池が存在し、三・六坪は称徳山荘として一体利用が推定されている。また、市HJ第289次調査では古墳時代後期後半の掘立柱建物・掘立柱列・土坑を検出している。本調査では西四坊坊間東小路の確認と、三坪内の様相を明らかにすることを目的とした。

II. 基本層序

調査地は西ノ京丘陵の東斜面に位置し、北西から南東の方向に下る緩い傾斜地である。基本的な層序は造成土(0.1m)、耕土(0.08m)、床土(0.06m)、濃黄褐色土(0.08m)、灰褐色砂質粘土(0.08m)、灰色粘質土(0.2m)、整地土の黄褐色粘土ブロック混灰色砂質粘土(0.15m)と続き、現地表から0.75m下で黄褐色砂質粘土の地山にいたる。南東へむかうに従い整地土が厚く堆積する。遺構検出は地山上面と整地層上面で行い、遺構面の標高は第2発掘区北端で84.1m、第1発掘区南端で83.1mである。第1発掘区東拡張部の東半は約0.8mの深さまで地下



H J 第 532 次調査 遺構平面図 (1/400)



H J 第 532 次調査 発掘区位置図 (1/5000)

げがされており、南端部には灰色粘土の溜まる窪みがある。

III. 検出遺構

検出遺構には古墳時代の方形区画溝1条、斜行溝1条、土坑2基、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、溝2条、井戸1基、土坑2基がある。

古墳時代の遺構 SD01は第1発掘区東半で確認した溝(幅0.4～0.8m、深さ0.6m)である。溝は直角に折れ、さらに北に屈曲する。北西角部で完形の布留式甕が出土している。他に第1発掘区西南隅部分で土坑SK02・03、第3発掘区南西隅で斜行溝SD04を検出した。

奈良時代の遺構 SD05は第1発掘区東辺部で確認した南北溝である。位置的に西四坊坊間東小路西側溝とみられる。SD06はSD05と並行して三坪宅地内で検出した南北溝である。いずれも地山の黄褐色粘土を含む土で埋め戻された後、掘立柱建物SB10が建てられている。

IV. 出土遺物

遺物整理箱10箱分の遺物が出土。縄文時代の有茎尖頭器がSD01最上層、鉄製鋤先・石製陽物がSE07から出土した。木簡は第1発掘区東端の地下げ部分の南端部の灰色粘土から出土した。木簡には五文字書かれており、うち「国」の一文字のみが判読できる。他に古墳時代前期の土師器・須恵器の破片、奈良時代の線刻土器、軒丸瓦(6133R)丸瓦、平瓦、塼の破片がある。

V. 調査所見

今回の調査では、古墳時代前期の溝を確認し、平城京以前の遺構がこの地域に広がっていることを確認した。SB10は奈良時代後半の桁行柱間が12尺の大規模な建物で、西四坊坊間東小路西側溝、井戸SE07を埋め立てた後に建てられており、8世紀中頃に降に三坪は、東隣の二坪と一体で利用されている可能性がある。(久保邦江)

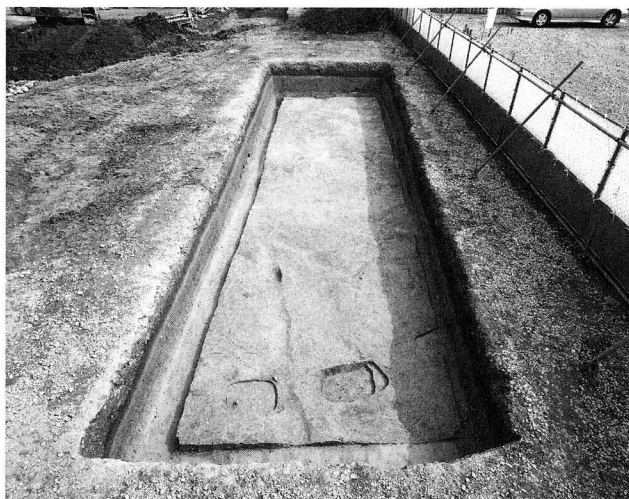
H J 第 532 次調査 検出遺構一覧表

| 遺構番号 | 棟方向 | 規模 桁行(間)×梁行(間) | 桁行全長 | 梁行全長 | 柱間寸法m | | 備考 |
|--------|-----|-------------------|-------|-------|-----------------|-----|--|
| | | | m | m | 桁行 | 梁行 | |
| S B 10 | 東西 | 4以上×2以上 | 7.2以上 | 2.4以上 | 3.6 | 2.4 | 柱掘形埋土から8世紀の土師器片・須恵器片出土。S D 05・S E 07より新しい。 |
| S A 11 | 南北 | 3 | 9.3 | | 2.4-2.4-2.4-2.1 | | 8世紀の土師器片・須恵器片。掘立柱列。S A 12と2.8m隔て並行。 |
| S A 12 | 南北 | 3 | 9.3 | | 2.4-2.4-2.4-2.1 | | 8世紀の土師器片・須恵器片。掘立柱列 |
| S A 13 | 南北 | 2以上 | 4.8 | | 2.4 | | 8世紀の土師器片・須恵器片。掘立柱列。S A 11より新しい。 |

| 遺構番号 | 掘形 | | | 主な出土遺物 | 備考 |
|--------|-------|----------------------|--------|--|---|
| | 平面形 | 平面規模 (m) | 深さ (m) | | |
| S D 01 | 方形区画溝 | 東西11以上南北15以上幅0.4～0.8 | 0.6 | 上層：8世紀の須恵器片・土師器片・有茎尖頭器(奈良時代の整地層) 中層：6世紀の土師器片 下層：5世紀初頭の土師器片、完形の布留式甕 | 張出部をもつ方形区画溝。国土方眼方向に対し北で西に約30°振れている。断面形状はU字形もしくは逆台形。 |
| S K 02 | 隅丸方形 | 東西2.2南北2.2 | 0.8 | 5世紀の土師器 | 土坑底で小ピット2基確認。主軸は西で北に約30°振れている。 |
| S K 03 | 隅丸方形 | 東西2.0南北1.8以上 | 0.4 | 5世紀の土師器 | S K 02より新しい。主軸は西で北に約30°振れている。 |
| S D 04 | 斜行溝 | 南北4.0以上幅1.2～1.8 | 0.6 | 上層：奈良時代の土師器片・須恵器片 下層：6世紀の須恵器片 | 北で西に約20°振れる。 |
| S D 05 | 南北溝 | 長さ22以上幅0.75以上 | 0.3 | 8世紀の須恵器片・土師器片・丸瓦片 | 西四坊坊間東小路西側溝。東半部は地下げで壊されており、溝幅不明。 |
| S D 06 | 南北溝 | 東西16以上幅0.8～1.2 | 0.25 | 8世紀の須恵器片・土師器片・不明瓦片 | S D 05と5.5mの間隔をあけて西側で併行する。 |
| S E 07 | 円形 | 直径1.85 | 2.2 | 8世紀中頃の土師器片・須恵器片・丸瓦片・鉄製鋤先・石製陽物形 | 井戸枠は抜き取られ構造は不明。S D 06より新しい。 |
| S K 08 | 隅丸方形 | 東西2.2南北2.4 | 2.7 | 8世紀の土師器片・須恵器片 | 底部が二段に掘られている。湧水層にはあたらなかった。 |
| S K 09 | 不整形円形 | 東西0.9南北0.65 | 0.25 | 8世紀前半～中頃の須恵器・土師器片 | |



第1発掘区全景(南から)



第2発掘区全景(北から)



第3発掘区全景(南から)



溝S D 01(南東から)

7. 平城京跡（右京四条四坊・西三坊大路）の調査 第533次

| | | | |
|------|---------------|-------|------------------|
| 事業名 | 個人住宅新築 | 調査期間 | 平成17年6月13日～6月21日 |
| 届出者名 | 個人 | 調査面積 | 14㎡ |
| 調査地 | 奈良市宝来三丁目815番2 | 調査担当者 | 池田裕英 |

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京四条三坊、四条四坊の西三坊大路と四条条間北小路の交差点上にあたる。

調査地周辺には円弧状の地割がみられ東400mに宝来山古墳、東北250mに兵庫山古墳も存在することから、古墳の遺存地割（円墳または前方後円墳の後円部）の可能性も考えられた。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から造成土、灰黒色粘土（旧耕土）、暗灰色粘質土、灰褐色土、灰褐色粘質土、暗灰色粘土と続き、現地表下約1.4mで灰緑色粘土の地山にいたる。遺構検出はこの灰緑色粘土上面で行った。地山上面の標高は74.9mである。

III 検出遺構

遺構検出の結果、奈良時代の条坊遺構や古墳に関わる遺構はまったく検出できず、円弧状の遺存地割の性格も明らかにできなかった。位置的に発掘区は西三坊大路路面上に位置している可能性が高いと考えられる。

IV 出土遺物

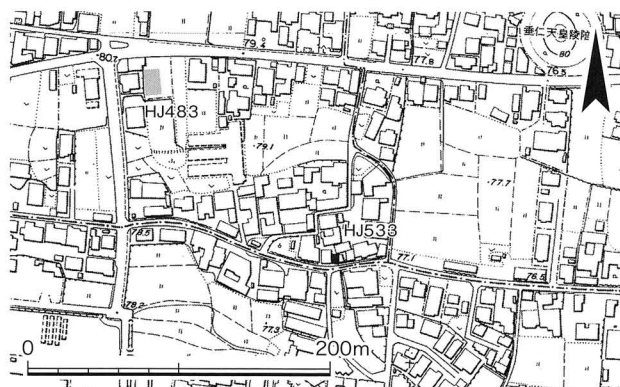
本調査では、出土した遺物はない。

V 調査所見

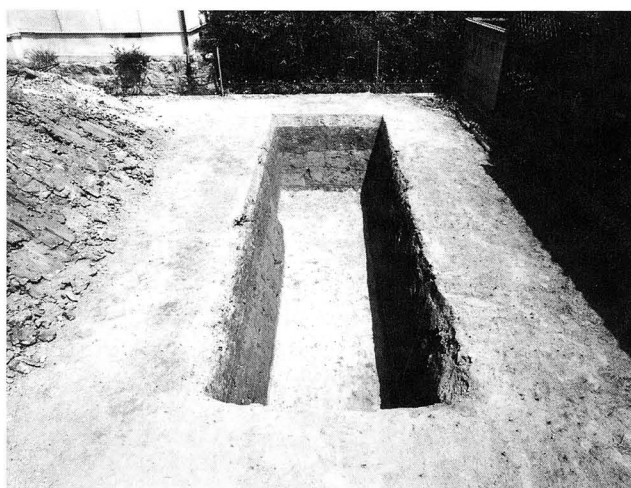
調査の結果、本発掘区は大路路面上にあるとみられ、本調査地から南に約150mの場所で行った市H J第304次調査¹⁾でも条坊遺構は検出されていない。大路が条坊復原よりも西にずれる可能性を考える必要がある。

(池田裕英)

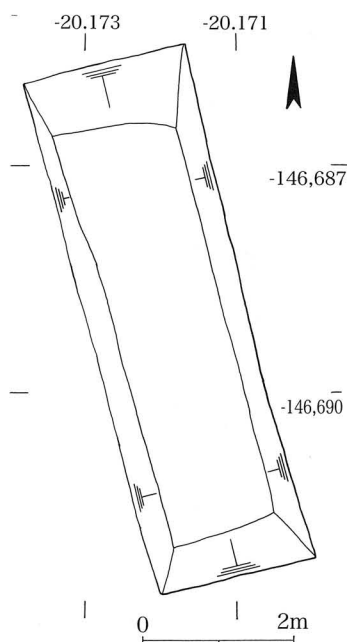
1) 奈良市教育委員会「平城京右京四条三坊十四坪・西三坊大路の調査第304次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成6年度』1995



H J 第 533 次調査 発掘区位置図 (1/5000)

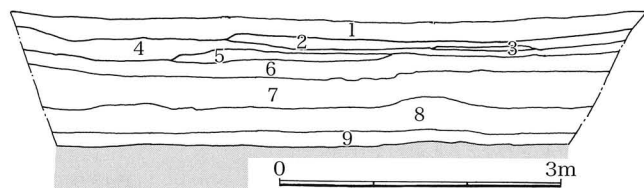


発掘区全景（南から）



H J 第 533 次調査 発掘区遺構平面図 (1/100)

S -148,692 N -148,687
H;76,8m



- | | | |
|---------------|-----------|-----------|
| 1: 造成土 | 5: 灰茶色粘土 | 9: 暗灰色粘土 |
| 2: 灰黒色土 (旧耕土) | 6: 暗灰色粘質土 | 地山: 灰緑色粘土 |
| 3: 暗茶灰色土 | 7: 灰褐色土 | (トーン部分) |
| 4: 茶灰色土 | 8: 灰褐色粘質土 | |

H J 第 533 次調査 発掘区西壁土層断面図 (1/80)

8. 平城京跡（右京二条二坊九坪）の調査 第534次

| | | | |
|------|---------------------|-------|-----------------|
| 事業名 | マンション建設 | 調査期間 | 平成17年9月1日～9月16日 |
| 届出者名 | 新星不動産株式会社 | 調査面積 | 100㎡ |
| 調査地 | 奈良市西大寺国見町一丁目2137-74 | 調査担当者 | 久保邦江・中島和彦 |

I. はじめに

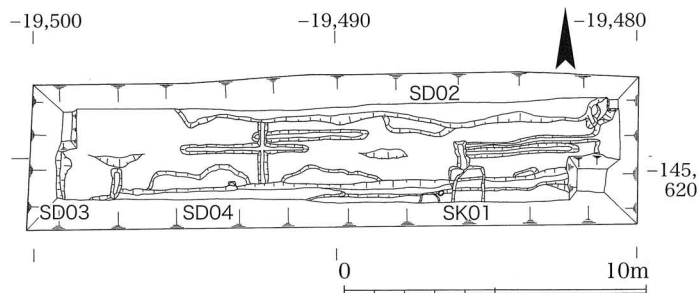
調査地は、条坊復原によると右京二条二坊九坪の南西隅部に位置しており、調査地西端に二条条間北小路と西二坊坊間西小路の交差点が推定される。周辺の調査例には、約120m東で県1993年度調査があり、二条条間北小路と西二坊坊間路の交差点を確認している。この調査の結果から、本発掘区は二条条間北小路路面にあたと推定され、路面の状況を確認する目的で調査を実施した。

II. 基本層序

発掘区内の基本層序は、造成土（0.6m）、耕土（0.15m）、床土（0.08m）、淡灰色砂質土・粗砂・小礫混（0.08m）、茶褐色砂質土（0.08m）と続き、灰色中粒砂となる。灰色中粒砂は旧流路の埋土で8世紀の土器片を含んでいるが、上面で奈良時代の遺構を確認したため、この面で遺構検出を行った。旧流路の遺物を含む層は0.2～0.4m堆積し、それ以下は遺物を含まない灰色砂層が2m以上堆積している。遺構検出面の標高は69.7～69.8mである。

III. 検出遺構

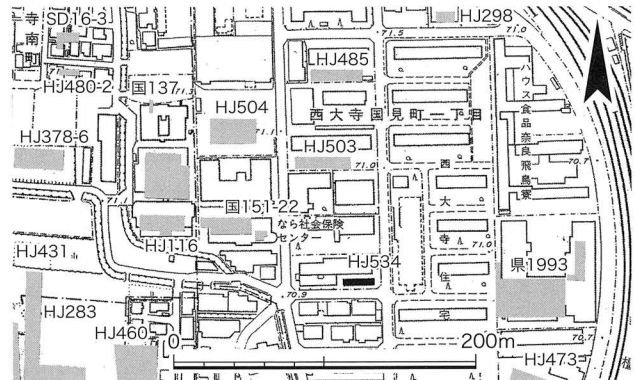
検出遺構には奈良時代の土坑1基、溝2条、江戸時代



H J 第 534 次調査 発掘区遺構平面図 (1/250)



発掘区全景写真（東から）



H J 第 534 次調査 発掘区位置図 (1/5000)

末の溝1条、時期不明の溝7条がある。

奈良時代の遺構 SK01は発掘区南端で検出した平面形隅丸方形の土坑（東西1.1m、南北1.1m、深さ0.4m）である。埋土は2層あり、両層から8世紀の須恵器片・土師器片が出土し、特に下層からは土師器甕の破片がまとまって出土した。SD02は発掘区北端で検出した南北溝（長さ14.5m、深さ0.2～0.4）である。南肩を検出した。埋土から8世紀の須恵器・土師器・丸瓦・平瓦の破片が多く出土し、下層からは8世紀の軒平瓦が出土した。SD03は発掘区西端で検出した南北溝（長さ1.5m以上、深さ0.2m以上）である。東肩を検出した。埋土から8世紀の須恵器・土師器の破片が少量出土した。

江戸時代の遺構 発掘区南辺部で確認した東西方向溝SD04は、東西16mで、北肩のみ検出した。茶褐色砂質土から掘削され、検出面からの深さは0.2mである。埋土から8世紀の須恵器・土師器片と18世紀末～19世紀初頭の肥前窯製や、京・信楽窯系の陶磁器が出土した。

IV. 出土遺物

遺物整理箱10箱分の遺物が出土した。SD02の出土遺物が多く、8世紀の軒平瓦（6643C）、凹面に「×」のへう記号のある平瓦、・博・円面硯・製塩土器片等がある。SD04から8世紀の軒片瓦（6641E）が出土した。他に包含層から軒丸瓦（6275種別不明）が出土した。

V. 調査所見

今回の調査地は、二条条間北小路の路面と推定されたが、奈良時代の遺物を含む遺構を検出した。西隆寺旧境内や市HJ第207次調査では、周辺の条坊関連遺構が北や西にずれることが報告されており、今回の発掘区が十坪内の宅地となる可能性もある。（久保邦江）